HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	可能表現の対照研究 ： 日本語と英語を中心に
Author(s)	今泉, 智子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13978号
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13978
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78335
Type	doctoral thesis
File Information	Satoko_Imaizumi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

可能表現の対照研究
―日本語と英語を中心に―

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
国際広報メディア専攻

今泉　智子

目次

第 1 章 はじめに 1

1.1 研究の目的 1

1.2 本研究の意義 6

1.3 研究の概要 8

第 2 章 研究背景 10

2.1 先行研究 10

2.1.1 可能表現の定義 10

2.1.2 世界の言語における可能表現 13

2.1.3 日本語の可能表現 14

2.1.3.1 日本語の可能表現形式 15

2.1.3.1.1 「える」「られる」「できる」 16

2.1.3.1.2 「ことができる」 18

2.1.3.1.3 「～うる／える」 19

2.1.3.1.4 その他の形式 20

2.1.3.2 ヴォイスとしての日本語可能表現 20

2.1.3.2.1 ヴォイスの定義 21

2.1.3.2.2 日本語のヴォイス構文 23

2.1.3.2.2.1 受身構文 24

2.1.3.2.2.2 自発構文 25

2.1.3.2.2.3 尊敬構文 28

2.1.3.2.2.4 受身・可能・自発・尊敬に共通する機能 29

2.1.3.3 日本語可能表現の意味分類 31

2.1.3.3.1 潜在可能／実現可能 32

2.1.3.3.2 可能の条件スケール（渋谷 1993b） 32

2.1.3.3.3 属性可能 34

2.1.3.3.4 認識的可能性 35

2.1.3.3.5 まとめ 36

2.1.3.4 日本語可能表現の文法化 37
2.1.3.4.1 自発起源型 37
2.1.3.4.1.1 られる 37
2.1.3.4.1.2 できる 40
2.1.3.4.2 完遂起源型 40
2.1.3.4.2.1 「える／うる」 41
2.1.3.4.2.2 「える」 42
2.1.3.4.3 日本語可能表現文法化の特徴 42
2.1.3.5 まとめ 43
2.1.4 英語の可能表現 44
2.1.4.1 法助動詞の定義 44
2.1.4.2 モダリティとしての英語可能表現 47
2.1.4.2.1 モダリティの定義 48
2.1.4.2.2 モダリティの意味分類 49
2.1.4.2.2.1 von Wright (1951) 49
2.1.4.2.2.2 van der Auwera and Plungian(1998) 50
2.1.4.2.2.3 Palmer(2001) 51
2.1.4.2.2.4 Bybee et al. (1994) 52
2.1.4.2.2.5 Narrog (2005b) 54
2.1.4.2.2.6 Leech (1971) 54
2.1.4.2.2.7 Radden and Dirven (2007) 55
2.1.4.2.2.8 黒滝（2013） 58
2.1.4.2.2.9 まとめ 59
2.1.4.2.3 英語法助動詞の文法化 60
2.1.4.3 英語可能表現（can,may）の意味分類 61
2.1.4.3.1 動作主内的可能、動作主外的可能 62
2.1.4.3.2 義務的可能 62
2.1.4.3.3 潜在的可能性 63
2.1.4.3.4 認識的可能性 63
2.1.4.3.5 知覚の実現 64

2.1.4.4 まとめ 66
2.1.5 日英語可能表現の対照研究 66
2.1.5.1 高橋（2011,2012a,2012b, 2013） 66
2.1.5.2 黒滝（2013） 68
2.2 問題提起 68
2.2.1 先行研究に残された課題 69
2.2.1.1 日本語のモダリティと可能の乖離 69
2.2.1.2 日英語可能表現の比較を困難にするフィールドの欠如 70

第 3 章 調査 72
3.1 本研究の理論的基盤 72
3.1.1 RCG 72
3.1.2 意味地図 73
3.1.2.1 モダリティの意味地図 74
3.2 調査 75
3.2.1 量的調査 76
3.2.1.1 調査 1 77
3.2.1.1.1 調査の目的 77
3.2.1.1.2 調査対象 77
3.2.1.1.3 調査手順 77
3.2.1.1.4 調査結果 80
3.2.1.1.5 分析 83
3.2.1.1.5.1 Dimension 1 の解釈 85
3.2.1.1.5.2 Dimension 2 の解釈 89
3.2.1.1.5.3 Dimension 3 の解釈 92
3.2.1.1.6 結論 93
3.2.1.2 調査 2 94
3.2.1.2.1 調査の目的 94
3.2.1.2.2 調査対象 94
3.2.1.2.3 調査手順 95

3.2.1.2.4 調査結果 95
3.2.1.2.5 分析 96
3.2.1.2.5.1 x 軸 97
3.2.1.2.5.2 y 軸 97
3.2.1.2.5.3 z 軸 97
3.2.1.2.5.4 まとめ 98
3.2.1.2.6 日本語原作データによる意味地図との比較 98
3.2.1.2.7 結論 99
3.2.1.3 量的調査のまとめ 99
3.2.2 質的調査 101
3.2.2.1 調査対象 101
3.2.2.2 調査結果 102
3.2.2.3 分析 103
3.2.2.3.1 英語の可能表現に対応する日本語の表現形式 103
3.2.2.3.2 日本語の可能表現に対応する英語の表現形式 105
3.2.2.4 結論 108
3.2.3 量的調査と質的調査の比較 109
3.2.4 結論 110

第 4 章 考察 111
4.1 解決すべき課題 111
4.2 現実の捉え方とグラウンディング 112
4.2.1 グラウンディング 113
4.2.2 グラウンディング要素としての英語法助動詞 114
4.3 グラウンディングから見た可能表現 116
4.3.1 I モード認知と D モード認知 117
4.3.2 日英語の可能表現と認知モード 119
4.3.2.1 英語の可能表現と D モード 119
4.3.2.2 日本語の可能表現と I モード 123
4.3.2.2.1 自発 125

4.3.2.2.2 受身 125
4.3.2.2.3 可能 127
4.3.2.3 知覚とインタラクション 127
4.4 結論 128

第 5 章 結論 130
5.1 結論 130
5.2 反省と今後の課題 131

第1章 はじめに

1.1 研究の目的

本研究の研究対象は、主に日本語と英語の可能表現である。どのような意味と形式を可能表現に含むかは言語によって異なるが、さしあたって、「～することができる／できない」という意味を表す言語形式であるとすると、「可能」の意味は、人間だけではなく生物が環境の中で生きていく上で重要な情報であり、言語や文化的背景を問わず、普遍的、基本的なものであると思われる。しかしながら、多くの言語が可能の意味を表す有標の表現形式を持つ一方で、それらの可能表現によって表される意味の範囲とその性格は言語によって多様であり、統語的特徴も異なる。（1a）～（1e）は日本語と英語の可能構文の一例である。

(1) a. 太郎は自分で着物が着られる。
b. 天気が悪くてどこへも出かけられない。
c. He can play the piano.
d. You can/may play the piano in this room.
e. He may have arrived.

日本語の可能表現の代表的な形式として、(1a)、(1b) のような「～られる[1]」という形式がある。一方、英語では（1c)、(1d) のように主に can が用いられる。可能の意味には両言語において、(1a)、(1c) のように個人の能力を表すものや、(1b) のように可能となる条件が周りの状況にある「状況可能」と呼ばれる意味が含まれる。日本語と英語では、能力と状況可能は同じ形式で表されているが、言語によってはこれらの二つの意味を異なる形式で表し分ける場合もある。また、英語では (1d) のように「～てもいい」という許可の意味や、（1e）のように「～かもしれない」といった推量の意味も、同じ can や may、might によって表されている。このように、「可能」という意味は、「～することがきる／できない」という意味だけには収まりきらない、より広い概念であることがわかる。英語の can や may

[1] 動詞の活用タイプによって「動詞語幹＋“(r)areru”」だけでなく「動詞語幹＋“eru”（可能動詞)」という形態もある。動詞の活用タイプによる形態の分布については 2.1.3.1 で述べる。

などは法（モダリティ）助動詞として統語的な機能を担い、モダリティ研究の中心的な研究対象となってきた。一方、日本語の可能構文は、対応する能動文（1a） の場合「着物を着る」）においてヲ格で示される名詞句が、ガ格で表示される（「着物が着られる」）という格の交替を生じることから、「可能態」とも呼ばれるように、ヴォイスに関わる現象として研究されてきた。モダリティは命題に対する話し手の評価や心的態度を表す意味的カテゴリーであるのに対し、ヴォイスは文法関係を表す統語的カテゴリーである。このように可能表現は、言語によって意味的にも統語的にも大きな違いがあり、可能表現として括られ得る範囲が異なるため、普遍的な定義をすることが難しい概念でもある。それゆえに、可能表現に関する研究は、それぞれの言語において個別的に研究されることが多く、特に日英語という性格の異なる二言語間における対照研究はこれまで盛んには行われていない。しかしながら、「文法カテゴリーの異なるものは比較できない」のだろうか。本研究は、「同じ意味を表す形式が、なぜこのように全く異なる文法カテゴリーにおいて論じられるか」という問題を出発点とし、個別言語における視点だけでは捉えきれない、「可能」という意味の多面性に注目する。話し手が日本語話者であっても、英語話者であっても、表そうとする意味は共通に存在するはずである。しかし、話者が使用する言語によって、可能の概念のどの部分をどのように捉え、どのように言語化するかが異なると考えられる。そうであるならば、そこには言語による捉え方の違いが存在すると予測される。本研究はこの「言語による捉え方の違い」に注目し、「捉え方」、つまりヒトの「認知」の面から言語を研究する認知言語学のアプローチに基づき、言語の観察を通して「可能」という概念を探究していく。

まず、本研究の基本的な言語観について述べる。言語の基本的な特性は「記号化」、つまり、「意味」と「形式」の結びつきである。Langacker (2008: 15) は、言語の記号としての構造は、図 1 のように、意味構造（S)、音韻構造（P)、記号構造（Σ）という三つの構造から成り立つと述べている。

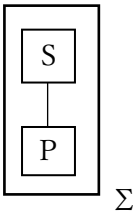


図 1 記号構造 (Langacker2008: 15)

この観点から考えると、本研究が対象とする可能表現とは、可能という「意味」が「音韻（形式)」と結びついて記号化されたものということになる。しかし、「意味」は直接観察できるものではない。意味はどこにあり、どのように形成されるのだろうか。言語の表す意味はその言語共同体に共有されたものであると同時に、個人の心に存在するものでもある。私たちは、日々の生活の中で「～できる／できない」という意味 (S) を幾度となく経験する。「着物が着られる」、「英語が話せる」、「天気が悪くて出かけられない」、など、様々な動作の可能性について、厳密に言えば毎回異なる経験を、全て同じ「可能」の意味として認識する。更に、個別言語はその言語共有体に属する個々人の、本来すべて異なる経験（S）をまとめて、特定の形式 (P) と結びつけて記号化しているのである。Langacker (2008: 30) は、ある言語表現の意味は、第一に、一個人の話者にとっての意味として考えなければならないとし、意味とは「概念」ではなく「概念化」であると述べている。概念化能力は人間が本来持っている認知能力であり、そこには知的概念だけでなく運動、感覚、感情の経験や物理的、言語的、社会的文脈の把握などあらゆる心的経験も含まれる。図 1 をもとに、概念化としての認知の役割を付け足すと、記号体系としての言語の構造は図 2 のように表すことができる。

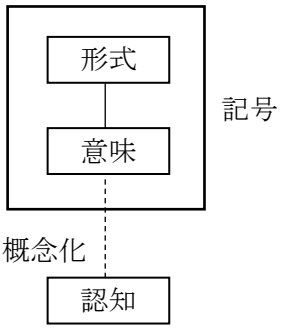


図 2 記号体系としての言語

つまり、人間の認知能力によって概念化された意味が、形式と結びついて記号化されたものが言語であるといえる。Langacker の認知文法（Cognitive Grammar）や認知言語学（Cognitive Linguistics）では、このように言語を人間の認知能力の一部として捉える。Croft and Cruse (2004) では、認知言語学の基本となる言語観として以下の三つを挙げている。

(2) a. language is not an autonomous faculty

b. grammar is conceptualism

c. knowledge of language emerges from language use (Croft and Cruse 2004: 1)

先に述べたように、言語はそれ自体、自律的なシステムではなく、人間の認知能力の一部であり（2a）、人間の認知能力によって概念化された意味が、形式と結びついて記号化されたものである。この結びつきは語彙項目だけではなく、統語的機能を担う言語形式にもあてはまる（2b）。また、言語知識は独立、固定された規則体系ではなく、具体的な発話事例をもとにカテゴリー化された総体であり、使用の積み重ねの中で変化を遂げていくものである。その変化や変化結果としての構造は、その構造に内在する性質によってもたらされるわけではない[2]（2c）。

これらは人間の言語に普遍的に当てはまる公理である。しかし、一方で、同じ人間の認知能力を反映しているはずの「言語」には、幅広い多様性が見られる。日本語も英語も、同じ人間の認知能力の反映として「創発（emerge）」した言語構造であるはずだが、それぞれの言語は異なる語彙、異なる規則、異なる変化過程を見せる。これは「言語が違えば思考も異なる」とする「言語相対性仮説」（Whorf 1956）につながる。言語による「捉え方」の違いについて、中村（2001） は認知言語学の立場から、(3)「認知相対論」を提示している。

(3) 認知相対論 : 言語は、人間に普遍的な認知能力や認知プロセスを反映しているのであるが、どの認知能力を強く反映し、また認知プロセスのどのような指向性を強く反映しているかという点で言語間で異なってくる。 （中村 2001: 3）

本研究も、意味と言語の在り方に関して（2）及び（3）の立場に立つ。したがって、本研究が行う可能表現の対照研究とは、それぞれの言語の話者がどのように可能の意味を概念

[2] このように、当初から最終状態を意図したわけではない行動の結果として生み出されたものを「創発構造（emergence structure）」と呼ぶ （早瀬・堀田 2005: 77）。また、生成文法のようにあらゆる文法現象が普遍文法のような規則によって生まれるというトップダウン式の考え方は「還元主義」と呼ばれるが、認知言語学の文法理論は、「言語構造が現実の具体的な発話事態（usage event）をもとに、そこから徐々に抽出、構成されていくとする、ボトムアップ式の言語観」（早瀬・堀田 2005: 63）である「用法基盤モデル（Usage-Based Model）」に基づいている。

化し、特定の言語形式と結び付けて記号化しているのか、そして、それがどのような認知プロセスを反映しているのかを観察し、比較することであると言い換えることができる。

可能表現はまた、多義性を持つ表現である。多義性とは、一つの形式に二つ以上の意味が結びつくことであるが、認知言語学では（2b）の前提のもと、「同じ「形式」に結びつく意味が複数ある場合、その意味は相互に関連性を持ち、1つのまとまりを形成している」（谷口 2006: 7）と考えられている。冒頭の（1）からわかるように、日英語の可能表現は多義性を持つが、その多義の関係はそれぞれの言語において異なる。つまり、言語によってどの部分に共通性を見出し、どこからどこまでを同じものとして捉えるかが異なるということである。複数のものに共通性を見出し、ひとまとまりのものと捉える能力は、カテゴリー化という人の認知能力の一つである。従って、可能表現の多義のあり方の違いにも、(3) のような言語による捉え方の違いが反映されていると推測される。

以上の基本的な言語観のもと、本研究は、言語を人間の認知、つまり「捉え方」から説明する認知言語学のアプローチに基づき、以下の四点を明らかにすることを目的とする。

(4) a. 日本語と英語の可能表現形式が表す意味にはどのような側面があるのか。
b. それらの側面はどのように関連して可能という概念を構成しているのか。
c. 日本語と英語は可能の意味（a）をどのように捉え、記号化しているのか。
d. 日英語の可能の捉え方の違い（c）は、どのような認知プロセスの違いを反映しているのか。

（4a）については、日本語と英語、それぞれの言語における先行研究において既に明らかになっている部分が多いが、（4b）については、通言語的には明らかになっていない。というのも、先に述べたように、これまで英語の可能表現は主にモダリティ研究、日本語の可能表現はヴォイス研究として進められてきたため、それぞれ異なる文法カテゴリーの枠組みの下で研究されてきたからである。言語研究では一般的に、その研究がどの文法カテゴリーの研究なのかという枠組みを明確にする必要があるため、日英語の可能表現を比較する場合も、一方のカテゴリーに基づいて比較されてきた。特に可能表現の場合、英語可能表現が中心的な役割を担うモダリティの枠組みから日本語の可能表現を捉え直す研究がこれまでに行われている。しかしながら、それでは日本語の可能表現が持つ捉え方を埋没させたうえで、表面上、英語の可能表現と同じフィールドに立たせていることになる。本研究では、ど

ちらかの文法カテゴリーに視点を置くのではなく、そもそもなぜ、同じ意味を表す言語形式が日本語と英語では異なる文法カテゴリーに属しているのか、という根本的な点に注目する。可能を表す言語形式が言語によってモダリティ、ヴォイスと言う異なる文法カテゴリーに属しているということは、逆に言えば、以下の図 3 が示すように、可能の意味領域は、そこでモダリティとヴォイスという異なる文法カテゴリーが重なり合う、両者の接点であるとも考えられる。

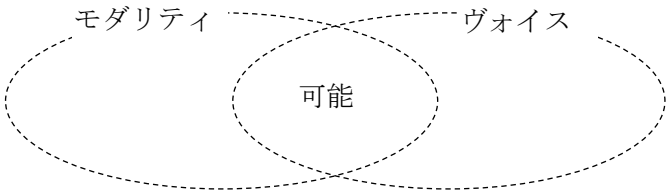


図 3 モダリティとヴォイスの接点としての可能

本研究は、このようにモダリティとヴォイスが交差する「可能」という意味を中心に据え、日英語の可能の捉え方の違い（4c）を、言語システム全体としてのものの捉え方の違いと関連付けて説明することを試みる（4d）。

本研究の最終的な目的は、これまでに明らかになっている各言語における可能表現の特徴がどのような関係にあり、また、各言語がそれぞれ異なる側面を強く反映するのはなぜなのかを解明することである。従って、本研究は先行研究に対し、異論を唱えるものではなく、これまで異なる文法カテゴリー、異なる言語における研究によって出されてきた可能表現に関する見解を統合し、日英語の「ものの捉え方」の違いというより大きな枠組みの中で、包括的に論じることを試みるものである。本研究の新奇性は、この包括的な説明を可能にするより広い視点の開拓にある。

1.2 本研究の意義

前節で述べた本研究の目的を達成することには、二つの意義がある。一つ目は、言語研究における方法論の限界を押し広げることである。モダリティ、ヴォイスと言った文法カテゴリーは、言語を観察し、系統的に分析、記述する上で必要不可欠な存在である。しかしながら、それらは言語を研究する上で生じたものであり、言語がそれらに基づいて形成されているわけではない、ということは忘れられがちである。（2c）で言語は創発的構造であると述

べたが、文法カテゴリーも同様に、言語に内在する構造ではなく、各言語のシステムの中で各言語の特徴を反映しながら立ち現れる、つまり創発するものである（この観点については中野（2017）で詳しく議論されている）。日本語と英語という異なる言語における、ヴォイスとモダリティという異なる文法カテゴリーは、「可能」という意味を中心に見ると、その領域で重なる部分がある。

二つ目は、言語教育への貢献である。日本語には、敬語や授受表現等、日本の文化及び社会特有の概念を反映した言語表現が存在する。それらは非日本語母語話者にとって理解しにくい「有標」の意味であると言えるが、それが有標であるがゆえに、注目されやすい文法項目でもある。一方、「可能」は多くの言語文化共同体に共有される基本的な意味である。したがって、「無標」の意味であると言えるが、言語表現の体系は特に印欧語のそれとは大きく異なる。意味が無標であるがゆえに、他言語と異なる捉え方は注目されにくく、また、理解されにくくもある。例えば、日本語学習者の可能表現に関する誤用には以下のようなものが見られる（学習者の母語はいずれも中国語）。

(5) a. このコップは落としても、割られない。（正：割れない）　（楠本 2009: 65）
b. インターネットで資料を調べるとか、新聞を読むとかは便利だといえとも、パソコンの前に長く座ったら疲れられます。（正：疲れます）（日本語学習者作文コーパス）
c. 遅くまで勉強していると、ルームメートに迷惑をかけられる。（正：迷惑をかけ得る、迷惑をかけるかもしれない）　（著者による収集）

（5a）は「無標可能表現」（楠本 2009）、「無標可能文」（姚 2006）または「結果可能表現」（張 1998）、と呼ばれる構文に関わる誤用である。日本語の有対自動詞はそれ自体に可能の意味を含む（早津 1987、張 1998）ため、「られる」を接続して可能形を作ることができない。（5b）、（5c）は認識的可能性（Epistemic possibility）の意味を意図したことによる誤用である。この誤用例の学習者の母語である中国語では、能力や状況可能を表す形式が、認識的可能性を表す形式としても使用されるため、その多義関係を日本語にも適応してしまったと予測される。このように、日本語の可能表現は学習者にとって理解しにくい特有の特徴を多く持ち、森川（1999）でも日本語の可能表現は「日本語らしさ」を含む表現であると述べられている一方で、敬語や授受表現のように大きく取り上げられて説明されることは少ない。張（1998）、楠本（2009）等の先行研究においても、可能は上級の学習者でも誤用が

多い項目の一つであり、教育現場で積極的に取り上げる必要性が指摘されている。本研究は、日英語の可能表現を単独に比較するのではなく、それぞれの言語システム全体の特徴や傾向と関連させて論じる。本来であれば、より多くの言語との対照が望まれるが、日本語と英語は特に言語全体の系統的特徴の違いが顕著であること、また、多くの日本語学習者は英語を第二言語として学んだ経験があるということから、本研究の成果は日本語教育、及び英語教育への貢献が期待される。

1.3 研究の概要

ここでは本研究の大まかな流れを述べる。第1章では、本研究の研究対象と基本的な言語観、及び研究の意義について述べたうえで、本研究が明らかにすることを目的とする問い（4a~d）を提示した。

第2章では日本語、英語それぞれにおける可能表現の先行研究を、それぞれヴォイス、モダリティというカテゴリーとの関連のもと、多義の関係や歴史的変化の過程を概観し、それぞれの言語における可能表現が表す意味を本研究の立場から整理し直す。それによって、（4a）の答えを明らかにする。そのうえで、ヴォイス、モダリティというカテゴリーに基づいた言語研究では、日英語の可能表現の対照を十分に行えないことを指摘し、文法カテゴリーを超えた研究方法の必要性を提示する。

第3章では、それを解決する理論として、Croft (2001) の Radical Construction Grammar (RCG) を導入し、RCG に基づく類型論的意味研究の手法の一つである「意味地図（Semantic map)」が日英可能表現の対照に有効であることを述べる。そして、実際に意味地図の手法を用いて可能の概念の可視化を試みる（3.2.1 量的調査)。これによって、日英語可能表現によって表される概念が「事態指向性／話者指向性」「コントロール可能性」という二つのスケールからなることを示し、（4b）の答えを明らかにする。さらに、日英語の可能表現の対応関係をより詳細に観察し（3.2.2 質的調査)、量的調査の妥当性を検証するとともに、日英語の可能の意味の捉え方の特徴を考察する。その考察から、英語は「事態指向性／話者指向性」のスケールに基づいて可能を捉える傾向が強いのに対し、日本語は「コントロール可能性」のスケールに基づく傾向が高いことを示し（4c）に対する解答を提示する。

第4章では（4c）のような違いをもたらす各言語の捉え方の違いを、中村（2004, 2009）のIモード認知／Dモード認知という二つの認知モードから考察する。具体的に

は、「事態指向性／話者指向性」というスケールには、認知主体と事態とを対峙させることが前提となるDモード認知が強く反映され、一方「コントロール可能性」をより重視する日本語の可能表現には、認知主体と外界とのインタラクションを強く残したIモード認知が強く反映されていることを論じ、（4d）への解答を提示する。

第５章では全体のまとめと今後の課題を述べる。

第2章 研究背景

2.1 先行研究

2.1.1 可能表現の定義

第１章では、可能表現をさしあたり「～することができる／できない」という意味を表す言語形式とし、本稿の研究対象である「可能」という意味の明確な定義をまだ提示していない。「可能」とはどのような概念なのだろうか。「可能」という日本語は、辞書を引くと通常は英語の“possible”に訳される[3]。まずは「可能」と“possible”の辞書における定義を見てみよう。(6)は『日本国語大辞典』における「可能」の定義、(7)は *Oxford English Dictionary* における“possible”の定義の第１～３項である。

(6) ある物事が実現できること。または、実際にありうること。また、その状態。

(『日本国語大辞典』)

(7) 1. That is capable of being; that may or can exist, be done, or happen (in general, or in given or assumed conditions or circumstances); that is in a person's power, that a person can do, exert, use, etc.

2. Having the power to do something; able, capable.

3-a. Expressing the contingency of a state of affairs, object, etc.: that may be or may come to be; that may be conjectured to be (though not known not to be); that is perhaps true or a fact; that may exist.

3-b. That will perhaps prove to be or to have been (what is denoted by the following noun); that may perhaps be but is not known to be a ——.

(*Oxford English Dictionary*)

(6) の定義は極めて広く緩やかな定義であるが、可能という概念が物事の「実現」、つまり、物事の「現れ」に関わるということがわかる。(7) は (6) に比べてより詳細な定義が

[3] 言語学的な可能表現研究では「可能＝potential」と訳される場合も多い（尾上 1998、渋谷 2006、黒滝 2013 等）。これについては 2.1.3 で詳しく見ていく。

されている。(7-1)、(7-2) では power という言葉が使われていることからもわかるように、possible という概念が、個体の持つ「力」に関るものであるという側面が表されている。一方、(7-3) では、know という言葉が繰り返し使われて いることから、物事が事実であるかどうか、または実現するかどうか、わからないが、そうであるかもしれないといった話者の「知識」、「認識」に関わる側面があることがわかる。(6) においても「ありうること」という部分に認識的な意味が含まれている。これは、特に印欧語を中心としたモダリティ研究における、根源的モダリティ (root modality) と認識的モダリティ (epistemic modality) という二分類につながる。

可能性 (possibility) という概念は、必然性 (necessity) とともに様相論理学において古くから使用されてきた概念であり、可能世界[4]とも深い関係がある。これらの概念は、英語やドイツ語など、印欧語の言語研究においても適応されてきた。一方、日本語では、根源的可能性／必然性と認識的可能性／必然性の表示に連続性が見られず、論理学の「可能性」「必然性」と言う概念がその統語的振る舞いの説明に有効であるとは言えない。(6)、(7) を見ても、日本語の「可能」が表す意味と、英語の possible が表す意味は必ずしも一致しないことがわかる。

「可能」と言う概念は、異なる言語において意味が異なるだけでなく、そもそも改めて定義することが極めて難しい概念である。Wierzbicka (1996) は言語に普遍的に存在する意味の最小単位であり、それ自体をそれ以上他の言葉で定義することができない "semantic primes (or primitives)"[5]の一つとして、"CAN" を挙げている。その上で、"CAN" は多くの場合、複雑な多義関係の中にあり、独立した語ではなく拘束形態素によって表される場合が多いため、semantic primes の中でも特に特定が難しい概念であると述べている ("'can' is particularly difficult to identify, partly because it is often involved in complex patterns of polysemy, and partly because its exponents often appear to be bound morphemes rather than distinct word." (Wierzbicka 1996: 67)。このように、「可能」は言語・文化を超えて普遍的に存在するプリミティブな概念であると同時に、そうであるがゆえにその意味

[4] 「われわれが現実に生きているこの世界とは、いくつかの点で異なるが論理的には充分考えることができる、ほかの世界のこと」(『日本大百科全書』)

[5] "The elements which can be used to define the meaning of words (or any other meanings) cannot be defined themselves; rather must be accepted as "indefinibilia", that is, as semantic primes, in terms of which all complex meanings can be coherently represented." (Wierzbicka 1996: 10)

を明示的に描写することが難しい概念である。

先に述べたように、英語学では論理学における「可能性（possibility）」がそのまま言語の意味分析に用いられる場合が多く、論理学の大前提とも呼べる可能性そのものの定義が問題になることはあまりなかったようである。一方、日本語学における「可能」の定義は研究者によって様々である。以下に３つの定義を取り上げる。

(8) a.「可能とは、動作主体がある動作を、実現する力を有すること、又、ある状態になる見込みがあることである。」（青木 1980: 170）

b.「『可能』というのは、何々しようとすることに対してそれを妨げるものがない、という表現である。」（寺村 1982: 262-63）

c.「動作主がその動作をしようと言う意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する。」（尾上 1998b: 93）

（8a~c）どの定義においても、動作主が「～しようする」という意志的な動作の実現について述べるという特徴があることがわかる。日本語では、「*ドアが開ける（正：ドアが開く）」のように、非意志動詞を可能の形にすることができないことから、この特徴が定義に盛り込まれていると考えられる。一方、（8a）の定義では、「見込みがある」という認識的な可能も含めているが、日本語において「～かもしれない」などの蓋然性を表す表現と、「られる」「できる」などの可能表現とは、第１章の冒頭に挙げた（1c~e）のような英語の法助動詞に見られる関連性はないため、蓋然性を表す表現が可能表現研究として扱われることは少ない[6]。

このように、可能という概念は、普遍的、基本的な概念である一方で、言語によってその射程や捉え方が異なり、日英語という異なる言語における可能表現の特徴を説明できる包括的な定義はこれまでに提示されていない。しかし、裏を返せば、「捉え方の違い」を観察するには格好のフィールドであるともいえる。本研究の目的は日英語の対照を通して可能表現の定義を検討することであるので、この時点で「可能の定義」を提示することはせず、日本語の可能表現について 2.1.3、英語の可能について 2.1.4 でそれぞれ先行研究における

[6] 後述するが、益岡（2007）は「可能」と「可能性」の意味は区別されるべきであるとし、「かもしれない」等の表現を可能性表現としている。また、日本語の「可能」表現にも「可能性」の意味への萌芽が見られると述べている。

議論を詳しく見ていく。

2.1.2 世界の言語における可能表現

前節で「可能」は多くの言語に普遍的に存在する概念であることを述べた。次に、世界の言語における可能表現の多様性と普遍性について、意味と形式の面から観察していく。

可能表現の形式に関する通言語的な研究として、マックス・プランク研究所による WALS (The World Atlas of Language Structures) の situational possibility 及び epistemic possibility に関する調査がある。WALS に掲載されている van der Auwera and Amman (2013) によると、研究対象となっている 234 の言語において、根源的可能（root possibility）[7]を表す形式は(9)）に挙げる三タイプに分けられる（[ ]括弧内の数字は各タイプに該当する言語の数)。このうち日本語は（9a）のタイプ、英語は（9b）のタイプに分類されている。

(9) a. 根源的可能を動詞接辞によって表す言語 [63]
b. 根源的可能を動詞接辞で表すことができず、動詞構文によって表す言語 [158]
c. 根源的可能を動詞接辞及び動詞構文では表すことができず、その他の標識によって表す言語 [13]

同様に認識的可能（epistemic possibility）を表す表現形式も（9）と同様の 3 つのタイプに分けられるが、各タイプに属する言語は（9）と必ずしも同様ではない。研究対象となっている 240 の言語において、その分布状況は（10）のようになっている。

(10) a. 認識的可能を動詞接辞によって表す言語 [65]
b. 認識的可能を動詞接辞で表すことができず、動詞構文によって表す言語 [84]
c. 認識的可能を動詞接辞及び動詞構文では表すことができず、その他の標識によって表す言語 [91]

---

[7] van der Auwera and Amman (2013) では、その状況に可能となる条件が存在するという意味で、「能力」等の意味も含めて“situational possibility（状況可能)”と呼んでいるが、ここでは認識的可能に対し、能力、状況可能、許可等を包括するものとして「根源的可能（root possibility)」と呼ぶことにする。

日本語は「その他の標識」によって認識的可能性を表す（10c）に分類されている。一方英語は、根源的可能と同じ助動詞 can や may が使用されることから、(9) と同様に（10）でも b のタイプに分類されている。

次に、可能表現の歴史的変化に関する普遍性と多様性について Heine and Kuteva (2002) の研究がある。Heine and Kuteva (2002) は、世界の言語における“ABILITY”を表す表現の語源とその発展として（11）の四つのタイプ、”POSSIBILITY”を表す表現の語源とその発展として（12）の二つのタイプを挙げている。

(11) a. ARRIVE > ABILITY
b. GET > ABILITY
c. KNOW > ABILITY
d. SUITABLE > ABILITY

(12) a. ABILITY > POSSIBILITY
b. GET > POSSIBILITY

例えば、英語の助動詞 can はもともと古英語の動詞 cunnan(know how to) が文法化して助動詞となったものであり、KNOW タイプの一例である。日本語の「られる」については、渋谷（2005）は、自発を起源とする考えでは、行為の到着として広義の ARRIVE に含めることができるとしている。

2.1.3 日本語の可能表現

2.1.2 で取り上げた van der Auwera and Amman (2013) による世界の可能表現の３タイプのうち、日本語は根源的可能については（9a）の動詞への接辞付与によって表示する言語に分類されている。この接辞に当たるのが「える」「られる」「できる」という形式である。また、「こと」という形式名詞を用いた「～することができる」という迂言的形式も存在する。認識的可能性に関しては、(10c) のその他の標識を用いる言語に分類されている。van der Auwera and Amman (2013) が判断材料として用いている資料の一つである Hinds (1988: 320) では認識的可能性（degree of certainty）を表す表現として「～かもしれない」「～にちがいない」が挙げられている。現代日本語においては根源的可能と認識的

可能の多義性は「あり得る」のような「える／うる」に若干見られるものの、それ以外にはほぼ見られないと言ってよい。一方で、「られる」は受身、自発、尊敬との意味的つながりをもち、歴史的にも同一起源から意味変化を経てきたと考えられている。「える」「られる」「できる」による可能構文は、述語動詞で表される動作の対象がガ格で表され、動作主がガ格から降格するという格の交替があるため、ヴォイス構文の一つとして扱われる。

以降、2.1.3.1 ではこれらの構文的特徴を整理する。次に 2.1.3.2 でこれらの構文のヴォイスとしての特徴を観察し、「られる」によって表される受身構文、自発構文、尊敬構文の特徴を整理する。2.1.3.3.5 では日本語の可能表現が表す意味にはどのような意味が含まれるのか、先行研究で提示されている様々な意味分類を整理する。2.1.3.4 では可能表現の通時的変化を概観する。

2.1.3.1 日本語の可能表現形式

（8）に挙げたように、日本語において「可能」という概念の定義は研究者によって様々であるため、何を可能構文と呼ぶかも定まっているわけではないが、可能表現の研究においては一般的に、述語動詞の語幹に接辞「-e-ru」「-(r)are-ru」「-deki-ru」[8][9]を付与した構文、及び「～ことができる」「～うる／える」が挙げられることが多い。「可能」を（8a）のように定義している青木（1980）、方言や歴史的研究を含め可能表現の詳細かつ広範な研究を行っている渋谷（1993b）でも、これらの形式を日本語の可能表現としている。日本語記述文法研究会（2009）では、「える」「られる」「できる」による構文を可能構文とし、「ことができる」「うる／える」は「その他の構文」として挙げている。「ことができる」は迂言的形式ではあるが、「できる」を含み、接辞「できる」と同じ起源をもつこと、また、「うる／える」も現代日本語では生産的な形式ではないが、「える」と起源を同じくすると考えられるため、本節でも取り上げる。以下では、可能の接辞「える」「られ

---

8 「-ru」は動詞の終止形（日本語教育文法では辞書形）の語尾であるので、「可能」の意味を表す形式は厳密に言うと「-e-」「-rare-」「-deki-」であるが、ル形を無標と考え、本稿では以降、形態論的な議論以外では「える」「られる」「できる」と表記する。

9 「られる」「える」を助動詞、または補助動詞として扱う研究も多い。また、日本語教育では一般的に「可能形」「受身形」のように、それぞれ動詞の活用形として扱われる。渋谷(2006: 61)では、「-eru」を接辞（可能動詞を形成する）、「（ラ）レル」を助動詞（ヴォイス系）、「デキル」を動詞（可能の意味をそれ自身で担う個別の動詞）としている。各形態素の歴史的変化を考慮すれば、渋谷（2006）のような品詞分類が適当であると考えられるが、現代日本語の記述的な視点では、表 1 のように動詞の活用タイプによる相補分布が見られるため、本研究では全て動詞語幹への接辞付与として扱う。

る」「できる」、「ことができる」、「える／うる」の構文的特徴を記述していく。

2.1.3.1.1 「える」「られる」「できる」

可能を表す接辞「える」「られる」「できる」は、動詞の活用タイプによって（13）のような相補分布をなす。

(13) a. 五段活用[10]動詞　：　動詞語幹＋e-ru　（例：読める yom-e-ru）[11]
b. する　：　する→deki-ru　（例：勉強できる benkyoo-deki-ru）
c. a,b 以外の動詞　：　動詞語幹＋rare-ru　（例：食べられる tabe-rare-ru）

（13c）「-rare-ru」は五段活用動詞に付き、「受身」の意味を表す「-are-ru」という異形態を持つ。現代日本語では接続する動詞の種類と表す意味が異なるものの、歴史的に「-are-ru」もかつては可能の意味を表していたことから、通常、異形態として分析される。（13a）「-e-ru」と(13)c）「-rare-ru」を、「する」以外の動詞に付いて可能の意味を表す接辞として異形態（「-(rar)e-ru」）とみなす考え方もあるが、渋谷（1993）では、「-rare-ru」と可能動詞（「-e-ru」）が別起源であることを史的調査から主張しており、本稿もこの立場に賛成する。現代日本語の可能・受身の体系をまとめると表 1 のようになる（色付きの部分は同一形態素「-(r)are-ru」）。

表 1 現代日本語の可能・受身の表示形式（動詞の活用タイプ別）

	五段動詞	上・下一段動詞	カ変動詞（来る）	サ変動詞（する）
可能	-e-ru	-rare-ru	-rare-ru	deki-ru
受身	-are-ru	-rare-ru	-rare-ru	-are-ru

ただし、本来（13c）のように「動詞語幹＋rare-ru」の形式をとる動詞に「-re-ru」を

[10] 日本語教育文法では五段活用動詞は「１グループ」動詞、上一段活用・下一段活用動詞は「２グループ」動詞、する及び来るは「３グループ」動詞と呼ばれている。
[11] 「五段活用動詞語幹＋eru」の形は、「可能動詞」とも呼ばれるが、本稿では単独の語彙としてではなく、動詞の活用として捉える。

付けて可能を表す、いわゆる「ら抜き言葉」という現象も見られる。例えば（14）のような形式で、話し言葉、若年層を中心に用いられてきたが、使用率は徐々に増加している（文化庁 2015: 16-18）。

(14) a. 食べられる（tabe-rare-ru）→ 食べれる（tabe-re-ru）
b. 来られる→（ko-rare-ru）→ 来れる（ko-re-ru）

この現象は「ら抜き」と呼ばれるものの、単なる形式の短縮ではなく、実際にはサ変動詞以外の可能の形式を「-(r)e-ru」に統一しようとする体系的変化として考えられる。

表 2 ら抜きによる可能・受身の新体系

	五段動詞	上・下一段動詞	カ変動詞（来る）	サ変動詞（する）
可能	-e-ru	-re-ru	-re-ru	deki-ru
受身	-are-ru	-rare-ru	-rare-ru	-are-ru

接辞による可能構文は格パターンに変化をもたらす。動詞述語が可能の形式をとる場合、能動文においてヲ格で表示される要素は、（15b,c）のようにヲ格またはガ格で表される。また、（15d）のように、能動文においてガ格で表示される要素がニ格で表される場合もある。これが、日本語の可能構文がヴォイス構文とされる所以である。

(15) a. 佐藤さん**が**、英語**を**話す。（能動文）
b. 佐藤さん**が**、英語**を**話せることはみんな知っている。（可能構文１）
c. 佐藤さん**が**、英語**が**話せることはみんな知っている。（可能構文２）
d. 佐藤さん**に**、英語**が**話せることはみんな知っている。（可能構文３）
e. *佐藤さん**に**、英語**を**話せることはみんな知っている。

（日本語記述文法研究会 2009: 279　強調は著者による）

ただし、「～こと」のように名詞化されない場合、（16）のように動作主は主題として提示されることが多い。

(16) 佐藤さんは、英語が話せる。

また、日本語の可能構文は通常主語が有情物であり、非意志動詞は用いられない。以下の（17a）「落とす」（17b）「閉める」の主語は「私」であり、動作主による意志的動作を表すのに対し、（17c）「落ちる」（17d）「閉まる」の主語は非情物の「ボール」「窓」であり、非意志動詞であるため、「られる」「える」を付与した形は非文となる。

(17) a.（私には）ボールが落とせる。
b.（私には）窓が閉められない。
c. *ボールが落ちられる。
d. *窓が閉まれない。

2.1.3.1.2 「ことができる」

（13）のほかに、「動詞連体形＋ことができる」という迂言的形式がある。これは、「こと」という名詞を含む複合形式であり、（9a）の動詞接辞には含まれないが、動詞の活用タイプに関係なく用いることができ、「られる」、「える」、「できる」とほぼ同様の意味を表すとされている。

(18) 佐藤さんは、英語を話すことができる。

（16）、（18）はどちらも使用できるが、前節で述べたように、非意志動詞は「られる」、「える」、「できる」を付与できないのに対し、「ことができる」は意志性の低い動詞でも使用することができる。「受かる」「覚める」は非意志動詞であるが、（19）のように「ことができる」を使用できる場合もある。

(19) a. 太郎は将来エジプトへ留学したいと思ってアラビア語の勉強を続けてきたが、念願が叶って今年留学試験に＜受かることができた／*受かれた＞。
b. 眠り姫は王子のキスで永遠の眠りから＜覚めることができた／覚められた*＞。

（青木 1997: 98-99）

この点について、青木（1997）は、「コントロール」の概念から日本語の可能表現の成立条件を考察し、（19a）では太郎が試験に受かるために何らかの努力をした、といったように、主体の意志が動作をコントールする場合、及び、（19 b）のように動作主の意志が表出されていなくても、他者、あるいは話し手からの働きかけや期待が示される場合は、「ことができる」を用いて可能の意味を表すことができると分析している。

渋谷 （1993b: 10）はこのような「ことができる」と共起することができる動詞の意味的範囲の広さ（動作主性の弱さ）、及び、形式上、接続する動詞の活用の種類を選ばないことを合わせて「スルコトガデキルの広分布性」と呼んでいる。その理由として、分析的な形式であるため、動詞の部分と可能を表す「できる」の部分の独立性が強いこと、また、歴史的にもともと出来事の出来を表す表現であったために、出来事の在り方についてはもともと制約がなかったことを挙げている。

2.1.3.1.3 「～うる／える」

「動詞連用形＋うる／える」は主に書きことばで使用され、ある出来事が成立する可能性の有無を表す。

(20) a. 積極策が最悪の結末をもたらすという可能性も十分に考えうる。

b. 日本は至るところで、大地震が起こりうる。 （日本語記述文法研究会 2009: 283）

（20a,b）のような表現や、「ありえる／ありえない」という形式は定型表現化し、広く用いられるが、これらの表現以外では「うる／える」が接続する動詞は限られている。「起こり得る」「あり得る」「存在し得る」のように無意志動詞も使用することができるが、主に認識に関わる動詞（「考え得る」「予測し得る」）や達成に関わる動詞（「到達し得る」「達成し得る」）などに使用が限られている。

金子（1986）では、「うる／える」は「チカラの可能」と「蓋然性の可能」を表すと述べている。「チカラの可能」としては(21)のような例を挙げている。

(21) a. …飛行機に代わり得る乗り物はあるのか…。（朝神奈川新聞・八五・八・一六）

b. 進化の道筋は‥‥試行錯誤によって成し遂げられたと考えるのが今日の自然科学の成果を最もよく説明しうる。（夕朝・八一・一一・九） （金子 1986: 88）

確かに、(21a)、(21b) はそれぞれ「代わることができる」「説明することができる／説明できる」と言い換えることができるが、「代われる」は許容度が落ちる。これらは、「能力」の用法のように動作主による意識的な動作の実現を表しているわけではないからであろう。したがって、「える／うる」は現代語では「能力」の意味は基本的に表さないと言ってよいと思われる。一方で、(20a,b) のような例が「蓋然性」を表すと言ってよいかどうかも疑問が残る。これについては、2.1.3.3.4 で再度検討する。

2.1.3.1.4 その他の形式

青木（1980） は文語における推量の助動詞「む」「べし」による表現も可能表現となり得ると述べているが、現代語ではほぼ消失している。

また、日本語記述文法研究会（2009）では、その他の可能構文として「〜かねる」も挙げられているが、現代語の用法では躊躇、遠慮の意味が強く、また、使用される動詞も限られており、純粋な可能を表すとはいえない[12]。

2.1.3.2 ヴォイスとしての日本語可能表現

日本語の可能表現のもっとも顕著な特徴は、これまで国内外問わず多くの研究で取り上げられているように、可能を表す形式が「受身」を表す形式としても用いられることであろう。また、2.1.3.1.1 で見たように、可能構文は格パターンに関してヴォイス構文としての特徴を持つ。本節ではこのような日本語の可能表現のヴォイス構文としての特徴を詳しく見ていく。

2.1.3.2.1 ヴォイスの定義

日本語記述文法研究会（2009: 207）は、「ヴォイスとは、事態の成立に関わる人や物を

---

[12] ただし、古代日本語では以下の例のように「〜しようとしても〜できない」という不可能の意味を表していた（『日本国語大辞典』「かねる」の項参照）。

玉藻(たまも)刈る沖へは漕がじしきたへの枕のあたり忘れ可禰(かね)つも〈藤原宇合〉（万葉集 1 巻 72）

このような古代語における用法は「動作が行われた後、動作主の意図した状態変化が、動作主の思い通りに実現するかしないか」を表す「結果可能」（張威 1998）に相当すると言える。「躊躇」「遠慮」の意味は、このように動作主体の意図があるにも関わらずその出来事が実現しないという「かねる」の特性から派生した意味であると考えられる。現代語の用法では「躊躇」「遠慮」の意味から、丁寧さを表す語用論的ストラテジーとしても使用される。（例：それについてはお答えしかねます。）

表す名詞が、どのような形態的タイプの動詞とともに、どのような格によって表現されるかに関わる文法カテゴリーである」と定義している[13]。ヴォイス（態）はこのように、一般的に動詞の形態や項構造といった統語的特徴から定義されるため、言語や研究者によって定義の揺れは大きくないと言える。以下ではヴォイスという文法カテゴリーの起源について簡単に見ていく。

英語をはじめとする西欧語におけるヴォイスという文法カテゴリーは、もともとラテン語の（22a,b）のような動詞の屈折による対立を指し、「動詞の形態」として定義される（鷲尾 2010: 116）。

(22) a. amo 「私が愛する」
b. amor 「私が愛される」

(23) a. I **love** (him/her).
b. I am loved.

日本語の「られる」による受動態も、「愛する（ais-**u**-ru）／愛される（ais-**are**-ru）」という動詞の形態の対立として定義することができる。英語の場合、（23b）のように「be+過去分詞」によって受動態が示されるが、これは be 動詞を用いた構文になるため、厳密には（22a,b）のような「動詞の形態」とは言えない。このようなことから、「英語には受動態が存在しない」と主張する立場もあるが、「be＋過去分詞」を受動態（Passive voice）とし、能動態（Active voice）との対立としてヴォイスを定義することが一般的である（斉木・鷲尾 2012: 140-41）。

しかしながら、ヴォイスの歴史を遡ると、現在一般的な能動態と受動態という対立ではなく、古典ギリシャ語やサンスクリット語などの印欧古典語では、能動態（enérgeia / Active）と中動態（páthos / Middle）の対立であった。能動態と中動態の対立は、以下の例（24a,c）のように主語の行為が他へ向けられているのか、（24b,d）のようにその行為の

[13] 日本語学においては「ある出来事をどの立場から表現するかということに関わる文法カテゴリー」（庵 2012: 98）としてより大きく捉えると、「あげる／もらう」のような授受表現もヴォイスに含まれる。ただし、先の定義は形態的に有標／無標の対立によって表される統語的ヴォイスであるのに対し、授受表現は「勝つ／負ける」の関係と同様、形態的に関係を持たない語彙的ヴォイスである（庵 2012: 118）。

結果が主語自身に帰属するのか、という区別であった（柴谷 1997: 6)。古典ギリシャ語の páthos は passive とも訳されるが、(24b）は、「私は殴られる」という受身の意味だけではなく、「自分で自分を殴る」という再帰的な意味、及び、「私は打たれた状態にある」「私が何かを悼んでいる（心を打たれた状態にある)」のように、より広い意味を表していた（國分 2017: 57-58)。現代で言うところの受動態とは、もともとこの中動態に依存し、歴史的にはその一つの変形である（Benveniste 1966, 岸本監訳: 171）[14]。

(24) ＜古典ギリシャ語＞

a. tuptó　（私が殴る）

b. tuptomai（私は殴られる）　（柴谷 1997: 5）

＜サンスクリット語＞

c. yajati「彼は（他の人のために、僧侶として）犠牲を捧げる」

d. yajate「彼は（自分のために、奉納者として）犠牲を捧げる」

（Benveniste 1966, 岸本監訳: 167)

その後、中動態は受動態に取って代わられ、ラテン語では形式所相動詞と呼ばれる中動態のみをもつ動詞の一類（「nascor（生まれる)」、「fruor（享受する)」、「loquor（話す)」など）にのみ残された。現代英語において中動態の意味を残す構文としては中間構文がある。また、非人称構文や身体的手入れを表す構文も意味の上では中動態に近い。

日本語学において、ヴォイスの始まりは先に述べた西欧語の「動詞の形態」としての Voice を日本語に適応したものであった。大槻（1897: 61）では Voice を「口氣」と訳し、能相（Active）と所相（Passive）があると述べている。その後、明治時代からは日本語の事実に基づいてヴォイスを規定する試みが行われてきた（鷲尾 2010)。三矢（1908）では、ヴォイスを「相[15]」と訳し、「「相」とは、スガタなり」（三矢 1908: 141）と述べ、被役（または受身、所相)、可能、使役があるとしている。ここで、「使役」及び「可能」が

[14] 本節冒頭で、ヴォイスと言う文法カテゴリーはその定義における揺れが大きくないと述べたが、Banveniste (1983: 167-168)では、能動・中動・受動の対立関係の歴史的な「他の動詞範疇、つまり・法・時称・人称・数はかなり明確な定義を受けいれるのに、動詞の態 diathèse という基本的な範疇が多少とも厳密に画定できないというのは、驚くべきことではないか？」と述べている。

[15] 現代日本語学では「相」をアスペクト、「態」をヴォイスとするのが一般的である。

ヴォイスに含まれていることが西欧語におけるヴォイスとの違いである。日本語では、（22)、(23）のような能動受動の対立に加え、(25c）のように使役も動詞の形態によって表される。

(25) a. 食べる（tabe-ru）
b. 食べられる（tabe-**rare**-ru）
c. 食べさせる（tabe-**sase**-ru）

英語では、使役は“I make him **love** her.”のように make/let を用いて表されるが、動詞の形態は能動態と同じである。従って使役がヴォイスとして論じられることは一般的にはない。また、既に幾度となく述べているように（25b）は受身と可能の意味を表す。寺村（1982: 255-256）は、日本語の文法においては、可能の表現も受動態と同じく文法的な態の一つとして捉えるべきであり、この点において、ヴォイスといえば能動／受動の対立が問題になる英語などと異なると指摘している。このように、日本語学におけるヴォイスは英語におけるそれよりもその射程を広く捉えているといえる。

以上をまとめると、ヴォイスと言うカテゴリーは、印欧古典語における能動態／中動態という対立が、中動態の衰退によって能動態／受動態という対立として一般化し、その概念が日本語学に適応された後、日本語の実情を反映し、使役、可能といった概念までを含むようになったという背景を持つ。

2.1.3.2.2 日本語のヴォイス構文

日本語記述文法研究会（2009: 207）は中心的なヴォイス構文として受身文と使役文、関連構文として可能構文、自発構文、相互構文、再帰構文を挙げている。このうち受動構文、可能構文、自発構文は「られる」という形態を共有する。以下では、日本語において可能と関連の深い受身構文及び自発構文についてその特徴を記述する。

2.1.3.2.2.1 受身構文

日本語の受身構文は、述語動詞によって表される動作の働きかけや、その動作による影響を受ける人や物を主語とする構文である。日本語の受身には、大きく分けると直接受身と間接受身がある。

直接受身は、対応する能動文においてヲ格または二格によって表示される要素を、ガ格で表示するものである。能動文においてガ格で表示される要素は、直接受身文では二格、または「ニヨッテ」で表示されるか、または省略される。(26a,b) が表す出来事自体は同じだが、(26a) は猫の視点から、(26b) は魚の視点から出来事を捉える文となる。

(26) a. 猫**が**魚**を**食べた。

b. 魚**が**猫**に**食べられた。【直接受身】

間接受身は、対応する能動文には含まれていない参与者で、その動作によって何らかの影響を受けた人が主語となる文である。以下の (27a)、(27b) はどちらも「私」が主語になるが、対応する能動文には含まれていない。一方で、能動文においてガ格で表される主語は、直接受身文と同様、間接受身文でも二格で表示される。

(27) a. (私は) 雨**に**降られた。(←雨**が**降った。) 【間接受身】

b. (私は) (猫**に**) 魚を食べられた。(←猫**が**魚を食べた。) 【間接受身】

このような受身構文は「迷惑受身」とも呼ばれるように、主語がその出来事によって悪影響を受ける、つまり迷惑を被ったことを表す。

また、(28) のように対応する能動文においてヲ格で表示される物の持ち主 (人) を主語とする受身文は「持ち主の受身」と呼ばれている。

(28) a. 私の財布**が**スリ**に**盗まれた。(←スリ**が**私の財布**を**盗んだ。) 【直接受身】

b. (<u>私は</u>) スリ**に**財布を盗まれた。(←スリ**が** (<u>私の</u>) 財布を盗んだ。)【持ち主の受身】

受身文で主語となる「私」は能動文の直接の参与者ではなく、(27)と同様にその出来事から何らかの影響を受けた人であるため、間接受身の一つと考えられる。間接受身文に見られる、主語が出来事によって受ける影響、という意味は日本語の受身文の大きな特徴であり、研究者によって「被影響」「利害」「affectivity」「受影性」等として議論されてきた

（川村 2004）[16]。尾上（1999）では、「被影響」を以下のように定義している。

(29) 他者の行為や変化（典型的には他者の意志と他者の力の発動）の結果、あるものが自らの意志とは関係なく（いやおうなく）ある立場に立つことになるという事態把握のあり方。（尾上 1999: 88）

（26b）と（27b）、（28a）と（28b）を比べると、（27b）、（28b）は被影響の意味があるのに対し、（26b）、（28a）は客観的な描写であり、被影響の意味を帯びない[17]。

また、（28a）のように主語がモノ（無情物）で、被影響の意味を帯びない受身文は、川村（2004: 110）によると、近世以前の資料に例が少ないため、非固有的な用法である可能性が高い[18]。

以上のように、日本語の受身文は、統語上は動詞の形態と格パターンによって定義されるが、意味上は主語への「被影響」を表すという特徴を持つ。ただし、被影響の意味があるかないかという絶対的な対立ではなく、動詞の意味や文脈によって被影響が強く感じられるものから弱いものまで存在し、段階的に捉えるべきである。

2.1.3.2.2.2 自発構文

自発構文は「ある動きや思考、感情などが、能動主体の意志とは関係なく、あるいはそれに反して自然に起きてくることを表す」（日本語記述文法研究会 2009: 283）。受身文と同様、自発文は対応する能動文から格パターンが変化する。以下の例（30a,b）ともに、能動文でヲ格で示される対象が、自発構文ではガ格で表示されている。動作の主体は通常一人称で、明示されない場合が多いが、表示される場合には、「私**に**は昔のことが思い出される」のように、二格で表示される。

(30) a. 昔のこと**が**思い出される。（←私**が**昔のこと**を**思い出す。）

---

[16] 本稿では川村（2004）の「被影響」という用語を採用する。

[17] お金の持ち主である私への被影響が示されると考えることもできる（「潜在的受影者」（益岡 1991））が、（28）と比べると、客観的描写としての特徴が強いと思われる。

[18] ただし、「パジャマが床に脱ぎ捨てられている」のように、行為の結果の状態を描写するものは古代日本語にも見られる（川村 2004: 110-111）。このような用法を尾上、川村は「発生状況描写」と呼び、受身と区別している。

b. 異国の風情**が**感じられる。(←私**が**異国の風情**を**感じる。)

現代日本語では一般的に(30a,b)の他、「思われる」、「思いやられる」、「偲ばれる」、のような思考動詞+「られる」、及び一部の動詞+「える」(「泣ける」、「笑える」等)に限られる。渋谷(2006)では自発を(31)のように定義し、「られる」、「える」に加え、「てしまう」(例:急いでいたので、ついつい赤信号で渡ってしまった)も自発構文として挙げている。

(31) 通常は動作主体の意志の発動によって行う/行わないはずのある動作が、動作主体の意志とはかかわりなく、あるいはときにそれに反して、起こる(肯定文の場合)/起こらない(否定文の場合)といったことを表す動詞の文法的なカテゴリー

(渋谷 2006: 48)

既に述べたように、現代日本語において自発用法は思考・感情を表す一部の動詞に限られているが、日本語諸方言には(31)のような自発を表す生産的な形態が残されている。山形市方言の「(ら)る」や、北海道、東北、栃木、静岡等の方言にみられる「(ら)さる」がある。

(32) a. コノ　靴　オレサ　ハガタ。　(森山・渋谷 1988: 92)
(この靴が、私にはけてしまった。=この靴が私の足に入った。)

b. コーラを買おうと思ったのに、知らないうちに緑茶のボタンが押ササッタ。(北海道方言)　(円山 2007: 54)
(押すつもりはなかったのに、押してしまった)

(32a,b)は、本来意識的に行われる「靴を履く」という動作が、意図せずに、または意図に反して、実現したことを表す。(31)の定義にあるように、自発構文は本来、意志的な動作からその意志性を削除する(「無意志動詞化 deagentivization」(森山・渋谷 1988: 49)ため、無意志動詞から自発文は作れない。また、(30)で見たように格の体制に変化をもたらし、もとの文の動作主(agent)を、動作の(非)成就を経験する主体に変化させる。(32)では能動文でヲ格で示される靴(「靴をはく」)が、ガ格(ただし

（32a）の方言の例ではゼロ格）で表されており、動詞の動作を行う主体（「私」）は、（32a）では経験者（「オレサ」）として示されている。このように、自発態は一部の方言に残されているものの、現代共通語では使用が限られており、動詞の文法的なカテゴリーとしては自立性が弱い（渋谷 2006: 49）。

一方、寺村（1982）では、「家が焼けた」「ガラスが割れる」のように「あるもの（X）が、自然に、ひとりでにある状態を帯びる、あるいはある X を対象とする現象が自然に起きる」（寺村 1982: 271）ことを表す形態を「自発態」と呼び、五段活用他動詞の語幹に「-e-ru」を付けた形を自発構文としている。これは「焼く／焼ける」「割る／割れる」といった自他動詞の対立に相当するが、（森山・渋谷 1988: 91）も指摘しているように、「-e-ru」形を自動詞としてではなく、自発として考える必要はないと思われる。例えば「落ちる」も自然に起きる現象を表すが、「-e-ru」という形態をとらない。ただし、このように語彙として先の定義のような自然発生的な現象を表す自動詞を多く有するということは、日本語の大きな特徴であるという点で、この指摘は意義のあるものである。

自動詞「見える」「聞こえる」「わかる」も、自発構文と意味的・文型的に類似する。以下の例（33a~c）では、認知の対象である「山」「鳥の声」「あなたの気持ち」がガ格で表示され、認知の主体である「私」は明示されないか、明示される場合は二格で示される。これらは形式上「-e-ru」という形をとることから、可能動詞とされる場合もあるが、可能の形式として「-(r)are-ru」を付与した「見られる」「聞かれる」という形式が存在することから、「-e-ru」による自発構文ではなく、語彙的に自発の意味を持つ自動詞として扱うべきであろう。

(33) a. （私には）山**が**見える。
b. （私には）鳥の声**が**聞こえる。
c. （私には）あなたの気持ち**が**わからない。

可能表現形式の一つ「できる」も、起源的な用法では以下の例(34)a）のように事物の出現という自然発生的現象を表す（渋谷 2006: 60）。

(34) a. 駅前に新しいスーパーができた。（起源的な意味：事物の出現）
b. 太郎にはテニスはできない。（可能の意味）　（渋谷 2006: 60）

これらの自然発生的現象は、(31) の定義にあるような「通常は動作主体の意志の発動によって行う／行わないはずのある動作」ではない。そこで、渋谷 (2006) は、(31) の自発の定義を「自発（狭義自発)」とし、広義自発として (35) のような定義を提示している。

(35) 自然生起：ある出来事が動作主体の意志や期待のありようとはかかわりなく、あるいはそれに反して、反意志的に／自動的に／他力によって実現する／しないことを表す。
(渋谷 2006: 54)

以上をまとめると、自発は狭義の意味では、動作主体による意志的な動作が、動作主体の意志とはかかわりなく、あるいはときにそれに反して、起こる／起こらないということを表す文法カテゴリーであり、現代日本語では一部の方言に生産的な形式が見られるが、共通語では主に思考動詞など限られた動詞に使用が限定される。格パターンについては、能動文においてヲ格で示される名詞句がガ格に昇格し、動作（多くは認知）主体は省略されるか、「〜ニハ」で表示され、降格する。広義の自発は、ある出来事が反意志的に、自動的に、または他力によって実現する／しないことを表すもので、有対自動詞や「見える」「聞こえる」「わかる」等の可能の意味を含む認識動詞、「なる」「できる」などの動詞も含まれる。

2.1.3.2.2.3 尊敬構文

「られる」は可能、受身、自発に加え、動作主の動作を高めて述べる「尊敬」の用法を持つ。尊敬構文は格の交替を引き起こさないため、通常ヴォイス構文としては扱われないが、先行研究においても、尊敬用法は自発用法からの拡張であると考える説が有力である（川村 2004: 119)。

以下の例 (36b) の尊敬構文では、敬意を表す対象である動作主（＝先生）がガ格で表示されているが、格表示に関しては無標の能動文 (36a) と同じである。

(36) a. 先生が本を読む。
b. 先生**が**本を読**まれる**。

自発から尊敬への拡張は、ある動作が、動作主によるものであるということを直接的に述べないことが、動作主への尊敬につながるという語用論的拡張と考えられる。Shibatani (1985: 837) は、動作主について非直接的に述べることは尊敬を表すために様々な言語で用いられる方法であり（例えば二人称代名詞の複数で尊敬を表すフランス語の vous 等）、尊敬用法は「られる」が持つ「動作主背景化 Agent-defocusing」の機能との結びつきが最も明白であると述べている（「動作主背景化」については次節で紹介する）。ただし、受身・可能・自発構文では構文上、対応する能動文のガ格は二格へ降格されるが、尊敬構文では、動作主はあくまでガ格として残る。従って、構文上は降格という意味で背景化されるわけではなく、あくまで語用論的な動作主背景化であると考えられる[19]。

2.1.3.2.2.4 受身・可能・自発・尊敬に共通する機能

以上、日本語の「られる」によって表される可能以外の意味である受身、自発、尊敬の構文的特徴を見た。ここで四つの構文を並べて振り返ってみよう。

ヴォイスとして一般的な受動態を表す受身文では、(24b) のように、能動文においてヲ格で表示される動作の対象がガ格で表示され（「魚が」）、文の第一の焦点となる。(16) の可能構文は、「佐藤さん」を動作の主体としてではなく、能力の持ち主として描き出すものであり、受身文と同様に、能動文においてヲ格で表示される「英語」がガ格で表示されている。また、(30a) の自発構文においても、動詞「思う」の対象である「昔のこと」がガ格で表示されている。(36b) 尊敬用法は格の交替がないため、通常ヴォイス構文としては扱われない。

(26)b.（再掲） 魚が猫に食べられた。(←猫が魚を食べた。) 【受身】
(16)（再掲） 佐藤さんは英語が話せる。(←佐藤さんが英語を話す。) 【可能】
(30)a.（再掲） 昔のことが懐かしく思い出される。(←私が昔のことを思い出す。) 【自発】
(36)b.（再掲） 先生が本を読まれる。(←先生が本を読む) 【尊敬】

日本語ではこれら四つの用法が「られる」という同一の形式によって表される、つまり

[19] 川村（1993: 720）は「実態上の動作主は表現上動作主ではないものとして表される」とし、「動作主の非動作主化」であると述べている。

多義関係にあるということは、1.1 で述べたように、これらの四つの意味同士に関連があり、何らかの共通点があるということである。四つの用法の統一的な説明として、Shibatani (1985) による「動作主背景化 Agent-defocusing」、尾上（1998a, 1998b, 1999, 2003 等）、川村 （2004, 2012 等）による「出来文」としての統一的把握がある。

Shibatani (1985) は、動作の対象がガ格として示され、動作主が省略されるか、またはニ格などに降格するという統語的特徴から、これらの四つの用法が共通に持つプロトタイプ的機能は動作主背景化（Agent-defocusing）であると主張する。

一方、尾上（2003）は、（37）のように指摘する。

(37) そもそも受身と可能と自発と尊敬の四つの意味の間に意味としての共通性など指摘できるものではない。受身はどの項に視点を置いて語るかという次元での意味であり、可能は動作主がその意志をもった場合にその行為が実現するか否かという状況の許容性にかかわる意味であり、自発は動作主の意志の有無に関する意味であり、尊敬は文中の登場人物に対する話者の気持ちの表現に属する意味である。[...] このように意味としては相互に異なる次元にありながら、それらの意味をラレルという共通の言語形式によって実現するからには、その形式に対応する何らかの「捉え方」の共通性というものがそこにあるであろう （尾上 2003: 40, 下線は筆者による）

その共通の「捉え方」を、尾上（1998a, 1998b, 1999, 2003 等）は「出来文」という捉え方であるとする。「出来文」は（38）のように定義され、「られる」形の述語及び、「泣ける」「笑える」などの自発文、「見える」「聞こえる」などの語彙的自発形式を含む。

(38) 出来文とは、事態をあえて個体の運動（動作や変化）として語らず、場における事態全体の出来、生起として語るという事態認識の仕方を表す文である。（尾上 2003: 36）

出来文の考え方では、主語は事態発生の「場」として捉えられる。例えば（16）の可能構文は、「佐藤さん」という場において、「英語を話す」という出来事が生起する、と捉えられる。自発用法（30a）では話し手である「私」と言う場において、ある思考や感情が生起する。尊敬用法（36b）では、敬意の対象となる先生という場において、読むという動作が生起する。また、受身用法に関しては、（26b）のように視点が被動作主に移る直接

受身だけではなく、(27b) のような間接受身も「私」という場において、「猫が魚を食べる」という事態が生起し、その事態から何らかの影響を被った、として「被影響性」も統一的に捉えることができる。

この考え方では、統語的な特徴だけではく、話し手の「事態把握」という観点が取り入れられていることに重要な意味がある。尾上 (2003) は、(39) のように述べている。これは、第 1 章で述べた本研究の理論的基盤である(3)認知相対論に通ずる主張である。

(39) 日本語では、「「場におけるコト全体の存在」「コト全体の生起」(出来文) と言えるような特別な捉え方をもつ文がある程度広い用途に使われている。[...] 英語のように個体中心の「モノ―モノ」間関係の認識を基盤として成り立つものと、日本語のように「場―コト」関係の上に成り立つものとは差があって当然である」。 (尾上 2003: 41)

以上、本章では可能・受身・自発・尊敬の四つの用法間の共通性として、Shibatani (1985) の動作主背景化、及び尾上 (2003 等) による出来文としての統一的説明を見た。前者は統語的振る舞いに基づく共通性であり、ヴォイスとしての四つの用法を検討するのには有効である。後者は話し手による事態把握という観点が取り入れられており、日本語が、個々の「モノ」ではなく「コト」全体の生起として事態を捉えるという認知的基盤とのつながりが示唆されている点で、日英語の可能の「捉え方」の違いを明らかにする本研究にとって重要な指摘である。

2.1.3.3 日本語可能表現の意味分類

可能表現の意味分類に関しては、渋谷 (1993b, 2005, 2006 等) による網羅的な研究がある。どこまでを可能の意味に含めるかという範囲については研究者によって揺れがあるものの、可能の内部での意味分類とその基準に関しては、多くの先行研究が渋谷による分類を引用している。以降では渋谷 (1993b, 2005, 2006 等) による日本語可能表現の意味分類と、その他の研究による補足的な意味を付け加え、先行研究における知見を整理する。

2.1.3.3.1 潜在可能／実現可能

可能の意味はまず、動作の実現が含意されているか否かによって、「潜在可能

（potential）」と「実現可能（actual）[20]」に分けられる（渋谷 1993b: 14, 2005: 33, 2006: 62）。前者は以下の例（40a）のように、行為の実現の可・不可について、その行為を行う力や条件がそろっているかどうかだけを述べるもので、動作の実現（非実現）は含意されない。一方、後者は（40b）のように動作の発動が予定されているか実際に発動されているものであり、動作の実現（非実現）を含意する。

(40) a. 私は何キロでも泳げる。
b. 今日、はじめて 100 メートル泳げた。

尾上（1998）、川村（2004）などは、可能を（8c）のように定義した場合、実現可能は「可能」とは呼べず、「可能（potential）」とは潜在可能のことであると指摘している。渋谷（2005, 2006 等）も、この点を認めたうえで、「にもかかわらず本稿でそれを可能として取り上げるのは、それが日本語では同じ形式によって表され、また歴史的にも起源と派生関係にあるからである」（渋谷 2005: 33）と述べている。本研究もこの立場を取り、本来連続体である「意味」を基準に線引きを行うのではなく、目に見える「形式」の観察に基づき意味に関わる側面を推測していく。

2.1.3.3.2 可能の条件スケール（渋谷 1993b）

渋谷（1993b, 2005, 2006）は、日本語の可能表現は動作が可能／不可能となる条件を基準として（41）のように分類している[21]。

(41) a. 心情可能：主体内部に永続する心情的・性格的条件によって可能・不可能であることを述べるもの。
例：夜中にお墓に行くなんてこわくてできない。
b. 能力可能：主体内部にほぼ永続的に存在する能力的な条件によって可能・不可能であることを客観的に述べるもの。

---

[20] 尾上（1998 他）、川村(2004 他)では「意図成就」と呼んでいる。本稿では「実現可能」という用語を使用することにする。

[21] 渋谷(1993)では「外的強制条件可能（＝自発）」を加えた五分類になっているが、渋谷（2005）の分類には含まれていない。

例：100 メートル 10 秒では走れない。

c. 内的条件可能：主体内部の、病気や気分などの一時的な条件によって可能・不可能であることを述べるもの。

例：今日は気分が悪くて行けない。

d. 外的条件可能（＝状況可能）：主体外部の条件による可能・不可能を述べるもの。

例：忙しくて行けない。

（渋谷 2005: 34）

現代共通語では、(41a~d) は全て「える」「られる」「できる」によって表され、これらを区別する形式はないが、日本語の諸方言においては能力可能と状況可能に非対等性が見られるものもある（渋谷 2005: 71）。概して能力可能を表す形式は能力可能（及び内的条件可能）に限られ、状況可能を表す形式は広く用いられる傾向にある。(41a~d) は連続をなしており、渋谷（1993b）では動作主体とそれぞれの条件との密着度（不可分性）によって図 4 のようなスケールをなすとしている。

←動作主体内部条件　　動作主体外部条件→

心情・性格　—　能力＜先天的・後天的＞　—　内的　—　外的　—　外的強制

図 4 可能の条件スケール（渋谷 1993b: 32）

ただし、方言においても心情可能、能力可能、内的条件可能のみを特別に表す形式はほとんど見られない（渋谷 2006: 69-70）。本研究では、心情可能、能力可能、内的条件可能をまとめて「動作主内的可能」と呼び、外的条件可能を「動作主外的可能」と呼ぶことにする。

2.1.3.3.3 属性可能

中井・呂（2014）では、「このきのこは食べられる」のように、事物の内的条件が動作実現の決定的要因であり、動作主体の意思によって制御できないものを「属性可能」として分類を立てている。更に「うる／える」は話し手の判断を表す認識可能とし、(42) の四分類を提示している。

(42) a. 能力可能：ある動作または状態を実現する能力が主体にあるか否か

b. 条件可能：主体の能力の有無ではなく、何らかの条件により主体の動作・状態の実現が可能か否か、あるいはその条件自体の有無

c. 属性可能：事物の属性や状態が実現可能かどうか

d. 認識可能：事柄の成立が可能か否かという認識上の可能性の有無

能力可能、条件可能は主体が有情物であり、その意志によってコントールできるのに対し、属性可能における属性の持ち主は、基本的には非情物か、有情物であってもその動作を意志的にコントロールすることはできない（中井・呂 2014）。渋谷（1993b: 21-22）では、可能表現の形容詞化の段階として、恒常的属性段階と評価的属性段階という段階に細分化している[22]。前者は（43a~c）のように、動作主や対象になる人やモノの属性を表す。後者は（44a~c）のように、話し手の動作主体や対象などに対するプラスまたはマイナスの評価を表す。この用法に使用される可能表現形式は、「える」が多く、「ことができる」は用いられない（渋谷 1993: 23）。

(43) a. 太郎はスキーができる（動作主体の属性）

b. この酒は（賞味期限が切れていないから）飲める。（対象の属性）

c. この車は時速 150 キロで走ることができる。

(44) a. あいつはなかなかできる。

b. こんな酒、飲めたものではない。

c. このスパイクシューズはけっこう走れる。 （渋谷 1993: 22）

評価的属性段階の可能構文では、程度副詞が共起できること（例：とてもできる男だ）や、動作主を二格で表示できないこと（例：*このスパイクシューズは私に走れる）などから、形容詞化が進んでいるといえる。

[22] 可能表現が属性表現化する段階として、恒常的属性段階の前に「一時的状況段階」が設定されている（例：この魚は中まで火が通っていないから食べられない）（渋谷 1993: 20）

2.1.3.3.4 認識的可能性

2.1.3.1.3 で述べたように、金子（1986）は（20）のような「うる／える」を「蓋然性の可能」と呼んでいる。中井・呂（2014）もこれを受け、（42）に挙げたように「認識可能」を分類として立てているが、現代日本語では「生産性を持たない（語彙的である）うえに、文章語的なニュアンスを持つ」（中井・呂 2014: 10）と述べている。

(20)（再掲） a. 積極策が最悪の結末をもたらすという可能性も十分に考えうる。
b. 日本は至るところで、大地震が起こりうる。
（日本語記述文法研究会 2009: 283）

渋谷（1993a: 413）においても、「過去形（アリ得タ）等を持つことから、蓋然性を表すとはいえ、ダロウなどとは異なってかなり命題よりの推定を表す」と指摘されているように、話し手のその場における判断としての蓋然性を表すというよりは、一般的事実またはその場の状況における条件から、客観的、理論的にある出来事が発生する／しないことが推測される、というより理論的な意味での可能性を表す意味にとどまっていると思われる。（20b）と以下の例（45）を比較すると、「起こるかもしれない」は話し手の個人的、主観的なニュアンスが強いのに対し、「起こりうる」は事態の成立が実現する可能性が現実世界に存在する、といった客観的、論理的なニュアンスが強い。

(45) 明日にも大地震が起こるかもしれない。

金子（1986: 89）も、「える／うる」には、西欧語研究において sporadic aspect（くりかえしのスガタ）と呼ばれている用法があることに言及している。金子（1986）ではアスペクトの問題として述べているが、以降 2.1.4 で見るように英語において can の「散発的用法（sporadic patterns of behaviour）」は認識的可能性（epistemic possibility）とは別に認められている。2.1.4.2.2.6 で紹介する Leech (1971) は、英語の may と can の違いを現実的可能性と理論的可能性の対立として説明しているが、（20b）は理論的可能性、（45）は現実的可能性により近いと思われる。

2.1.3.3.5 まとめ

以上の先行研究の検討を踏まえ、本研究では日本語の可能表現が表す意味を（46）のように整理する。

(46) a. 実現可能（出来事の実現／非実現を表すもの）
b. 動作主内的可能（参与者の内部に可能となる条件が存在するもの）
c. 動作主外的可能（参与者の外部に可能となる条件が存在するもの）
d. 属性可能（述語動詞が表す動作の対象となるものの性質を表すもの）
e. 評価的属性可能（人や物の属性に対する話し手による評価を含むもの）
f. 潜在的可能性（一般的事実やその場の状況に内在する条件から理論的に導き出される、ある出来事や状態が発生する可能性の有無を表すもの）

渋谷（1993b, 2005, 2006）では、心情可能、能力可能、内的条件可能を分けているが、本研究では、出来事の実現を可能とさせる条件が動作主体の内部にあるか、外部にあるかという点で分けることにする。

属性可能は、述語動詞が表す動作の対象となるものの性質を表すものとする。2.1.3.3.3 に挙げた先行研究では、（43a,c）のように動作を行う主体の属性を表すものも「属性可能」とされていたが、これはつまり能力可能であり、動作主内的可能と重複する。そこで、本稿では（43b）のように能動文においてヲ格で表示される対象が主語として取り上げられるものを属性可能とし、（44）のように評価的な意味を含む用法を「評価的属性可能」と呼ぶことにする。

「える／うる」によって表される（20）のような意味は、認識的可能性としてではなく、一般的事実やその場の状況に内在する条件から理論的に導き出される、ある出来事や状態が発生する可能性の有無を表す「潜在的可能性」として扱うことにする（「潜在的可能性については、英語可能表現に関して 2.1.4.2.2.8 でも再度検討する）。この用法は話し手の判断への傾倒が見られるが、完全に話し手の主観的判断を表すまでには至っていないと考えられる。

2.1.3.4 日本語可能表現の文法化

前節では可能と多義関係にある諸用法を見た。本節ではそれらがどのような順序で、ど

のように発展してきたのか、その通時的な変化過程に関する先行研究を整理する。

渋谷（2006）によると、日本語諸方言における可能表現には、2.1.2 の（11）に挙げた世界の可能表現の起源のうち、全てのパターンが観察されるが、大きく分けると「自発→可能」という自発起源型と、「完遂→可能」という完遂起源型の、二つの流れが見られる。現代語の「られる」「できる」及び「ことができる」は自発起源型、「える」は完遂起源型とされている。以降では、現代日本語の可能表現の起源について渋谷（1993b, 2005, 2006）の研究を中心にまとめる。

2.1.3.4.1 自発起源型

2.1.3.2.2.2 で自発構文の定義について述べたが、可能表現の起源となるのは、（35）の広義の自発文である。渋谷（2006: 54-55）は、この広義の自発を、動作主体（または話し手）があらかじめ期待しているかどうかという前提の違いから、（47）の三つのタイプにさらに分けている。

(47) a. 動作主の期待に反して事態が自然生起することを表す（期待逸脱型自発）
b. 動作主体の期待するところに沿って事態が（他力本位的に）自然生起することを表す（期待成就型自発）
c. 動作主体の期待の有無とはかかわらない事態が自然生起することを表す（期待不問型自発）

このうち、「られる」は（47a）「期待逸脱型自発」、「できる」「～ことができる」は（47c）「期待不問型」である。以降でそれぞれの歴史的起源を詳しく見ていく。

2.1.3.4.1.1 られる

「られる」は古代日本語の「らる」が起源であるとされている。古代日本語でも「らる」は自発、可能、受身、尊敬を表しており、現存する文献資料ではその起源をはっきりと証明することができないため、自発を起源とする説、可能を起源とする説、受身を起源

とする説と諸説あるが、概ね自発を起源とする説が優勢である[23]。渋谷（1993b, 2005, 2006）は、「られる」を（47a）「期待逸脱型自発」起源とする。古代日本語の「らる」による自発は現代語の「られる」によるものより広く用いられていた。川村（2012: 177-182）によると、古代日本語の「らる」は①知覚・感情・認識の、意図を伴わない成立、②生理現象、情動、感情に触発された不随意的行為、③偶発的行為を表していた。（48a）は現代語の自発用法と同様に、「思われる」という非意図的な思考の発動、（48b）では「(するつもりはなかったのに、自然と）くしゃみがでた」という非意図的な生理現象、（48c）では、不注意ですずりに髪の毛が入ってしまったという偶発的行為を表す[24]。これらは、2.1.3.2.2.2 に挙げた広義の自発の定義（35）に相当する。（48d）は外部条件によって「住むことができる」という外的条件可能を表していると解釈できる。

(48) a. 瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして偲はゆ何処より来たりしものそ眼交にもとな懸かりて安眠し寝さぬ（万葉集 5 巻 802）（川村 2012: 178）

b. 其レヲ取ッテ焼テ食ツルニ、極ク甘カリツケレバ、「賢キ事也」ト思テ食ツルヨリ、只此ク不心ズ被舞（マハル）ル也（今昔物語集 28 巻 28 話）（渋谷 2006: 55）

c. にくきもの……すずりに髪の入りてすられたる。（枕草子 28 段）（川村 2013: 180）

d. 家の作りやうは、夏をむねとすべし、冬はいかなる所にも住まる（徒然草 55）（渋谷 2006: 55）

Narrog (2010) も四つの用法のうち自発を起源とする発展を主張し、「られる」の意味変化の過程として図 5 のような流れを示している。

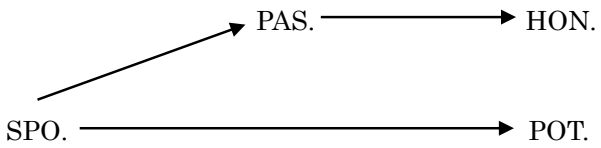


図 5 「られる」の意味変化（Narrog2010: 77）

[23] 特に渋谷（1993b）をはじめとする日本語可能表現の共時的、通時的整理が行われて以降、自発起源説を採用する研究が多いようである。

[24] 偶発的（不随意的）行為と受身、可能の多義関係は日本語だけではなく、タガログ語などにも見られる（大上 2004）。

自発はもともと動作主の意図によらない、または反する出来事の発生を表すため、「られる」が可能の意味を獲得した時点では、(48d) のように動作主の外部にある条件による可能・不可能を表し、そこから、徐々に動作主の意図による動作を表す動詞にも使用されるようになったと考えられる。渋谷 (1993b, 2005) は、可能の内部で意味変化が進む場合は (49) の流れが一般的であると述べている。

(49) 状況可能　→　能力可能　→　心情可能

また、日本語では認識的モダリティへの変化はそれほど一般的ではない (渋谷 2005) が、(50) のように許可や禁止を表す用例は見られる。

(50) a. どなた様でもお使いになれます。
b. ここには入れません。

ただし、渋谷 (2005: 42) が指摘するように、許可用法よりも禁止用法のほうが多く用いられる。また、許可・禁止については「てもいい」「てはいけない」という迂言的形式が主に用いられ、動詞によっては許可・禁止の意味として解釈しにくいものもある。以下の例 (51a) の許可の意味での「とめられる」は、許容はできるものの、許可という文脈では「とめてもいい」を用いる場合のほうが多いと思われる。(51b)「食べられる」では、許可の意味での「られる」の使用はより不自然さが増す。

(51) a. ここに自転車をとめてもいいですか。(とめられますか。)
とめてもいいです／とめてはいけません。(とめられます。／とめられません。)
b. これ、食べてもいいですか。(??これ、食べられますか。)
食べてもいいです／食べてはいけません。(??食べられます。／?食べられません。)

このように、「られる」による許可及び禁止「られる」に関しては、許可及び禁止の意味を獲得しているというよりも、文脈による語用論的解釈の域にとどまっているように思われる。

2.1.3.4.1.2 できる

「できる」は（47c）「期待不問型」のタイプである。「できる」は「いでく（出来）」が変化した形で、2.1.3.2.2.2 の（34）にも挙げたように、もともと物事の出現を表す動詞であった。以下の（52）は渋谷（2005）に挙げられている用例であるが、（52a）は酒が出来上がるという意味での使用であるのに対し、（52b）では可能の意味が読み取れる。

(52) a. [酒が] ようできたかあしうできたか、心みをいたさう（虎明本狂言集　川原太郎）
（渋谷 2006: 55）

b. 踊と申すものは、おちいさい内から御奉公ができてよろしうございますねへ（浮世風呂二・上）　（渋谷 2006: 55）

c. 江戸へ金を持て帰ることは出来ません（浮世風呂四・上）　（渋谷 1993b: 152）

d. いかにも金談できぬから（夢粋独言）　（渋谷 1993b: 152）

渋谷（1993b: 152-153）によると、「できる」が可能表現化したのは江戸時代後期に入ってからで、（52a）のように「が」を介入した形が先に現れ、次に（52c）「～ことができる」という形式が現れ、現代語のサ変動詞に接続する形式（52d）の出現は最も遅い。

「できる」は認識可能への発展はなく、許可・禁止用法への発展に関しては「られる」と同様の状況であると考えられる。

2.1.3.4.2 完遂起源型

渋谷（2006: 34）は完遂起源型の可能表現には「補助動詞ウ・キル・オーセル、副詞エなど」があるとしている。これらのうち、現代日本語に残されているのは補助動詞「う」を起源と持つ「える／うる」、及び接辞「える」である。「える／うる」は 2.1.3.3.4 で述べたように現代日本語では生産性を失っているが、その起源となる補助動詞「う（得・能）」は、古典日本語において、可能（特に実現可能）を表す形式として古くから生産的に用いられてきた。接辞「える」の起源には諸説あるが、渋谷（1993a, 1993b）では補助動詞「う」がその発生に関わっていると考えている。

2.1.3.4.2.1 「える／うる」

渋谷（1993b）によると、副詞「え」及び補助動詞「う」による可能表現は上代から見

られる[25]。もともとは「獲得」の意味を表す動詞「う」であったが、(53) の例では可能の意味を読み取ることができる（53a）は副詞「え」、(53b,c) は補助動詞「う」の例)。

(53) a. しかすがに 黙然(もだ)も得(え)あらねば わが背子が 行きのまにまに 追はむとは 千たび思へど〈笠金村〉（万葉集第 4 巻・543）

b. しましくもひとりあり宇流(うる)ものにあれや島のむろの木離れてあるらむ〈遣新羅使人〉（万葉集第 15 巻 3601）

c. 掃ひ得たる櫛、垢に落とし入れたるも、ねたし。（枕草子 一本 26）

（渋谷 1993b: 79）

副詞「え」は否定で、補助動詞「う」は肯定で用いられることが多く、次第に「え」は「え～ず」という否定を伴う形式でしか用いられなくなっていった。渋谷（1993b: 78）は、「副詞「え」の本来的意味は、ある動作を最後までやり遂げること、あるいはある状態が完全であることを示すもので、可能の意味は前者から派生してきた」とし、「完遂系可能形式」として認定している。(53c) は意志的な動作を最後までやり遂げる、という実現可能を表しており、非意図的な出来事の発生としての自発を起源にもつ「られる」とは性格が異なる。完遂型の可能形式はこのような実現可能を介し「完遂→実現可能→潜在可能」という順序で進んだと考えられる（渋谷 2006: 35)。

2.1.3.3.4 で述べたように、現代語の「える／うる」は蓋然性を表す「認識的可能性」の意味を持つとする立場もあるが、話し手の主観的な推量と言うよりも、「理論的にそのようなことが起こる可能性がある」という理論的可能性にとどまっていると思われ、認識的可能性への発展が認められるとは言えるかどうかは疑問である。ただし、自発起源のその他の可能形式よりもモーダル化が進んでいることは確かである。

2.1.3.4.2.2「える」

可能の接辞「える」の起源には、「知るる」「読むる」などの自動詞を起源と考える説

[25] 渋谷（1993b）は副詞「え」は「う」の連用形と考え、同起源であるとしている。『日本国語大辞典』の「え（得・能)）項によると「エシ（善）の活用形エクを略して副詞に用いたもの」とする説もあるが、「「え（得)」がア行のエであるのに対し、「えし（善)」の「え」はヤ行のエと考えられるところから疑問である」と記述されている。

（坂梨 1969 等）と、補助動詞「う」を起源とする説（渋谷 1993a 等）があるが、その起源は現存する文献からは明確に知ることはできない。前者の説では「られる」「できる」と同様に「える」も自発起源となるが、後者の説では完遂型と考えられる。ただし、渋谷（1993a: 428）は「２つの説のどちらかに軍配をあげることは困難であり、むしろ自動詞と補助動詞エルの両方が相互に影響を与えつつ可能動詞の成立をもたらしたと考えるほうがより的確にその成立過程を説明することができるのかもしれない」と述べている。

「える」を「られる」と同様に自発起源であると考えると、なぜ「える」では受身用法が発展しなかったのか、という疑問が残る。また、評価的属性用法も「える」のほうが多い。さらに、現代語ではていわゆる「ら抜き言葉」現象によって、可能を表す意味における「える」という形式が勢力を増していることを考えると、「-e-」という形式が動作主指向的な可能をプロトタイプとして持つことが予測される。自発から発展した動作主外部における条件による可能をプロトタイプとする「られる」と「える」を別起源と考えた方が、「られる」とは異なる「える」の振る舞いをうまく説明できると考えられる。

2.1.3.4.3 日本語可能表現文法化の特徴

以上、日本語の可能表現の歴史的変化を見た。日本語の可能表現形式の起源は、現存する文献資料からははっきりと証明されないものが多いが、自発に由来するものと完遂に由来するものがある。「られる」は自発を由来とする説が有力で、「自発→外的条件可能→内的条件可能」という順に文法化されたとみられる。「できる」はものの出現を表す「いでく」から出来事の出現を表すようになり、そこから可能の意味が発生した。「うる／える」は獲得の動詞「う」から、動作の完遂、動作の実現の意味から実現可能が発生し、その後能力可能、外的条件可能へと発展し、認識可能の一歩手前まで発展したが、現在では実現可能、内的・外的可能の意味では生産性を失い、一部の動詞について潜在的可能性を表す。「える」の起源にも定説がないが、「うる／える」と同様完遂起源と考えることで、「られる」との異なる特徴を説明できる。

2.1.3.5 まとめ

以上、日本語の可能表現について、先行研究を概観した。先行研究の検討を踏まえ、本稿では、日本語の可能表現を（54）にあげる形式とする（ただし、（54c）は生産的な構文ではない。）

(54) a. 動詞接辞「える」「られる」「できる」

b. ことができる

c. える／うる

これらの形式によって表される意味は（55）のように分類できる。

(55) a.可能

a-1 実現可能（出来事の実現／非実現を表すもの）

a-2 動作主内的可能（動作主の内部に可能となる条件が存在するもの）

a-3 動作主外的可能（動作主の外部に可能となる条件が存在するもの）

a-4 属性可能（述語動詞が表す動作の対象となるものの性質を表すもの）

a-5 評価的属性可能（人や物の属性に対する話し手による評価を含むもの）

a-6 潜在的可能性（一般的事実やその場の状況に内在する条件から理論的に導き出される、ある出来事や状態が発生する可能性の有無を表すもの）

b. 自発

c. 受身

d. 尊敬

これらの形式は構文的には能動文においてヲ格で表示される要素がガ格で表示され、動作主が背景化されるというヴォイス構文としての共通点を持つ。意味的には動作主体における出来事の出来を表すという共通点を持つ。歴史的起源には、「られる」「できる」「ことができる」は自発起源、「える」「える／うる」は完遂起源と考えられる。

2.1.4 英語の可能表現

英語で「～することができる」といった可能を表す表現の最も代表的な形式といえば、法助動詞 can が挙げられる。また、冒頭の（1）で見たように、「可能性」という意味では may、might も使用される。法助動詞はその名の通りモダリティを表す助動詞であり、英語における「可能」はモダリティ研究の中核をなしてきた。モダリティは一般的に「話し手の命題に対する心的態度を表す」と定義される。助動詞だけでなく、形容詞、副詞、仮定法、不変化詞、活用、（日本語におけるような）終助詞など様々な文法カテゴリーによっ

て表される（澤田 2006: 5）が、ここでは特に先行研究の豊富な法助動詞を中心に見ていく。と言うのも、法助動詞は一つの形式が複数の意味をもつ多義関係によってパラダイムが形成され、その体系と意味変化の過程が、英語におけるモダリティの特徴を顕著に表しており、可能の意味を観察する本研究にとって重要であるからである。2.1.4.1 ではまず、法助動詞の統語的なカテゴリーとしての位置づけを確認し、次に 2.1.4.2 ではモダリティという意味カテゴリーとしての特徴について先行研究を見ていく。

2.1.4.1 法助動詞の定義

助動詞とは、一般的に動詞に意味を追加する目的で使われるものである（畠山（編）2016: 5）が、その意味するものは言語によって異なる。そこで、英語における助動詞、及び法助動詞とはどのようなカテゴリーなのか、まずは確認することにしよう。

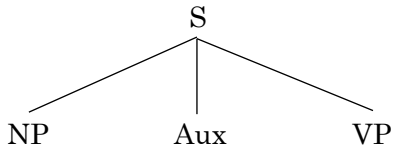
英語における助動詞（auxiliary verbs）とは、亀井・河野・千野・西田（1988: 732）では「元来、独立した動詞であったものが、その本来の意味から離れて、形式的に動詞の補助的な役目をするもの」であり、「その補助的な役割は、主として動詞の文法範疇（アスペクト、時称、法、態など）の明示にある」と定義されている。そのうち、法（モダリティ）の文法範疇を表すものが法助動詞と言うことになる。つまり、法助動詞を定義するとなると、必然的に法、つまりモダリティをどのように定義するかに依存することになる。モダリティは意味的な文法範疇であるから、このような助動詞定義は意味的な定義ということになる。山岡（2014: 235）では、法助動詞とは、「文で述べようとする内容に対する話し手の心的態度を表す助動詞のこと」と定義している。話し手の心的態度には、話し手の判断や推量といったものが含まれるが、法助動詞はそれ以外にも主語に関する能力や主語に対する許可・義務・命令などを表し、前者は「認識的モダリティ（epistemic modality）」、後者は「根源的（または義務的）モダリティ（root/deontic modality）」と呼ばれている。

特に英語をはじめとする印欧語においては、可能性と必然性という論理学における概念（＝意味）と法助動詞の体系（＝形式）に整合性があり、その表裏一体の関係を中心にモダリティと言うカテゴリーが編成されている。それゆえに、モダリティの定義を見ると「法助動詞によって表される意味」とあり、法助動詞の定義を見ると「モダリティを表す助動詞」とあるように、意味からの定義では循環論的になってしまう場合もある。ここではまず文法的カテゴリーとしての法助動詞の位置づけを確認し、次節でモダリティという

意味的な文法カテゴリーの定義について議論することにする。

生成文法における句構造規則では、助動詞（Aux: Auxiliary）は、名詞句（NP: Noun Phrase)、動詞句（VP: Verb Phrase）とともに文（S: Sentence）を構成する要素の一つである。このような英語の最も基本的な句構造規則は、(56）のように示される。

(56)　S →　NP Aux VP



（中井・上田・奥・高尾・松岡・Hirose 2004: 43）

英語の Aux には、法助動詞（modal auxiliary verbs)、have+過去分詞、be＋現在分詞、及び時制要素（Tense）が含まれる。時制要素は文の一番初めの助動詞に付与され、助動詞がない場合は動詞に付与される。これは（57）のように表される。

(57)　Aux　→　Tense (M) (have en) (be ing)
　　Tense　→　Present / Past　　(中井他 2004: 52)

つまり法助動詞とは、助動詞（Aux）のうち have+過去分詞、be+現在分詞、及び時制要素（Tense）以外のもの、ということになる。

Greenbaum and Quirk (1990) は、名詞や形容詞などと対立する語類の一つとしての「動詞」を、それが動詞句の中で果たす機能に従って、「本動詞（あるいは語彙的動詞)」、「基本動詞」、「法助動詞」の三つの主な範疇に分けている。そのうち、基本動詞と法助動詞は、閉体系的な部類[26]であるから、その全部を列挙することが出来るとし、基本動詞として be, have, do、法助動詞として can, may, shall, will, must, could, might, should, would を挙げ

[26] 閉ざされた類（closed class）は成員の数が少なく新しい語が加わりにくい類のことで、例えば冠詞や助詞などがある。それに対し、開かれた類（open class）は、名詞のように、成員の数が多く、新しい要素が加わり得る類のことである(田中 1988: 87)

ている（Greenbaum and Quirk 1990, 池上訳: 41）[27]。そのうえで、助動詞は、操作詞として（58）のような共通の特徴をもつとしている。

(58) a. 否定形にする場合、not がすぐ後に置かれる。

She *may* do it.

She *may not* do it.

b. 疑問節を作るには、主語の前に置かれる。

He will speak first.

Will he speak first?

c. 否定ではなく肯定であることを特徴づけるために、ストレスを帯びることがある。

Won't you try again?

Yes, I WILL try again.

d. その機能が、それを除いた残りの叙述部分が省略されている範囲に及ぶ。

Won't you try again?

Yes, I WILL.

(Greenbaum and Quirk 1990, 池上訳: 59-61 より抜粋)

さらに、法助動詞のみに特有の機能として（59）のような特徴を挙げている

(59) a. to なし不定詞（すなわち、動詞の基本形だけで、to に先行されないもの）を伴う。

You *will ask* the questions.

b. 不定動詞句の機能で（つまり、不定詞または分詞として）用いることは出来ない。

その結果として、動詞句の最初の動詞としてしか用いられない。

*to may, *maying, *mayed

c. 現在時制、３人称、単数に対して-s のつかない形を有する。

You must write. She must write.

---

[27] 助動詞と主動詞の中間的な存在として、法的イディオム（had better, would rather など）、準助動詞（be able to, be going to, have to など）が別途挙げられている。前者は助動詞と不定詞、ないしは副詞の結合したもの、後者は本動詞 have または be によって導かれる一連の動詞句のことである（Greenbaum and Quirk 1990, 池上訳: 70）。

d. 過去形が現在時や未来時を指して（しばしば断定を避けるという意味合いで）用いられる。

I think he may/might be outside.

（Greenbaum and Quirk 1990, 池上訳: 61-62 より抜粋）

したがって、英語の法助動詞を統語的特徴から定義すると、(58)、(59) の特徴をもつ言語形式ということになり、脚注 27 に挙げた周辺的な形式を除くこととすれば、先に挙げた９つの形式（can, may, shall, will, must, could, might, should, would）が英語の法助動詞である、ということになる。本研究において英語の法助動詞と言う時は、これらの９つの形式を指すこととする。

2.1.4.2 モダリティとしての英語可能表現

前節では、統語的な観点から「助動詞」とは何かという定義を確認した。次に、本節では法助動詞の「法」、つまりモダリティという意味的な観点から、英語の法助動詞の用法を概観する。

モダリティとは何か、と言う問題は言語学の中でも非常に多くの議論がなされ、未だ特定の着地点の見いだされぬ問題である。最も一般的な定義として、モダリティとは「命題に対する話し手の心的態度」を表すとされることが多い。直接法、命令法、仮定法といった「ムード（法)」と「モダリティ（法性)」を包括的に扱う立場もあるが、本稿では前者を含まない意味でのモダリティを研究対象とする。英語では、論理学における「可能性」と「必然性」の概念がそのまま言語研究にも適応され、モダリティ研究の中心となってきた。しかしながら、モダリティの分類にもあまたの研究があり、その分類基準やラベルも研究者によって様々である。本稿に関わるのは「可能性」の概念であるので、ここでは特に可能性に関わるものを中心に、モダリティの文法化及び分類に関する先行研究を概観し、モダリティにおける可能がどのような概念として分析されてきたか、つまり、可能の概念を構成する側面を検討していく。

2.1.4.2.1 モダリティの定義

すでに言及したように、モダリティは言語研究の中でも非常に大きなトピックであり、各言語に関する膨大な研究があるが、モダリティをどう捉えるかは研究者によって様々で

ある。よく挙げられる定義として、モダリティは「話し手の命題に対する心的態度を表す」という定義があるが、これは Lyons (1977: 452) の “[speaker's] opinion or attitude towards the proposition that the sentence expresses or the situation that the proposition describes”という記述に基づくものである。ナロック（2014）では、これまでのモダリティ研究の歴史を整理し、モダリティの捉え方として（60）に挙げる 6 つがあるとしている。

(60) a. 必然性と可能性としてのモダリティ
b. 「文のあり方」としてのモダリティ
c. 主語と述語の結び付きとしてのモダリティ
d. 事実未定、あるいは非現実としてのモダリティ
e. 話し手態度、あるいは主観性としてのモダリティ
f. 文の二大要素としてのモダリティ

（60a）は論理学における必然性・可能性をモダリティに適応した考え方で、哲学の歴史ではカントやハイゼ、アリストテレスにまで遡る。英語の法助動詞の用法など、特に印欧語をはじめとする諸言語ではこの概念がモダリティを系統的に分析するのに有用となる。（60b）は「平叙文」「疑問文」「命令文」「感嘆文」という文の類型として捉えるものであるが、現在ではモダリティの周辺として捉えられることが多い（ナロック 2014: 6）。（60c）の考え方も現在では衰退しているが、Sweet (1891) による「ムードとは主語と述語の様々な関係を表す文法形態である」という捉え方などがある（ナロック 2014: 7）。（60d）はモダリティを「非事実」または「非現実」を表すものとする考え方で、Palmer (2001)、Narrog (2005a) などがある。また、Langacker (2006, 2009, 2012 等) も法助動詞はプロセスを非現実に位置付ける（グラウンドする）働きを持つものとして捉えており、認知言語学においては「モダリティ＝非現実」として捉える考え方が主流である（この考え方は本稿第 4 章で取り上げる）。（60e）は先述した Lyons (1977) による定義がその後のモダリティ研究に残した大きな産物である。日本語学においても山田文法における「陳述」、時枝文法における「詞」と「辞」といった考え方の流れを受け、仁田、益岡などによるモダリティ論においても「主観的な判断や態度」「話し手の心的態度」を表す言語表現として定義されている。（60f）は日本語学において、文は大きく「モダリティ」と「命

題」の二つの要素に分けられるとする考え方を指す。本稿でも 2.1.5 でこの考え方に触れるが、ナロック（2014）も指摘しているように、これによってモダリティが定義されるというものではない。

以上、ナロック（2014）による整理を要約したが、現代の言語学において採用されることが多いものは、(60a,d,e) の三つである。日英語に限って言えば、(60a) は特に英語の法助動詞の意味について、(60d) はグラウンディング要素としての英語の法助動詞の機能について、(60e) は意味カテゴリーとしてのモダリティ、また日本語学におけるモダリティ一般を論じる上でとられる捉え方である。

2.1.4.2.2 モダリティの意味分類

前節ではモダリティの捉え方には様々な立場があることを見た。その捉え方によって、モダリティの意味をどのように分類するかも異なるが、英語の法助動詞の表す意味を記述する上では、(60a) に挙げた「可能性」及び「必然性」が中心的な概念となる。この可能性・必然性をさらにどのように細分化するかは研究者によって異なり、これまでに非常に多くの先行研究がなされている。以下では、その中から主に８つの分類を取りあげ、本稿の研究対象である可能に関わる「可能性」を中心に、検討していく。

2.1.4.2.2.1 von Wright (1951)

論理学における可能性・必然性を言語の形式的記述に応用した研究の先駆けは von Wright (1951) である（澤田 2006, ナロック 2014）。von Wright (1951) は表 3 のように、モダリティを真理的モダリティ（Alethic）、認識的モダリティ（Epistemic）、義務的モダリティ（Deontic）、存在的モダリティ（Existential）の四つに分類し、さらに、能力（Ability）や性向（Disposition）を表す力動的モダリティ（Dynamic）も加えている。特に Epistemic、Deontic、Dynamic の分類は、その後の研究にも引き継がれている。

表 3 von Wight (1951) によるモダリティの分類

Alethic	Epistemic	Deontic	Existential	Dynamic
necessary possible contingent impossible	verified undecided falsified	obligatory permitted indifferent forbidden	universal existing empty	ability, disposition

2.1.4.2.2.2 van der Auwera and Plungian(1998)

von Wright と同様に、可能性・必然性を中心とした分類に van der Auwera and Plungian (1998) がある。van der Auwera and Plungian (1998: 80)は、モダリティを「可能性と必然性に基づくパラダイムを含む意味領域」と定義している。モダリティは Epistemic modality と Non-epistemic modality に二分され、更に Non-epistemic modality は Participant-external modality と Participant-internal modality に分けられる。そのうち可能性に基づくパラダイムは表 4 のように構成される。

表 4 可能性に基づくモダリティの分類(van der Auwera and Plungian 1998: 82)

<table>
<tr><td colspan="4">Possibility</td></tr>
<tr><td colspan="3">Non- epistemic possibility</td><td rowspan="3">Epistemic
possibility
(Uncertainty)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Participant-internal
possibility
(Dynamic possibility,
Ability, Capacity)</td><td colspan="2">Participant-external possibility</td></tr>
<tr><td>(Non-deontic
possibility)</td><td>Deontic
possibility
(Permission)</td></tr>
</table>

このモダリティの定義は比較的狭義のものであるが、英語の法助動詞の各用法を分析する上では有効である。Participant-internal possibility は、可能となる条件が参与者の内部に存在するもので、以下の例（61a）のような能力の意味が含まれる。Participant-external possibility は可能となる条件が動作主外に存在するもので、(61b) のようないわゆる状況可能に加え、下位分類として Deontic possibility が設定されている。これは可能となる条件が特に権威のある個人や社会的規範に帰するもので、(61c) のような許可の用法がある。一方、Epistemic possibility 話し手の推量や判断を表す。(61d) は客観的事実ではなく、話し手による推量を表している。

(61) a. I **can** lift this stone.

b. To get to the station, you **can** take bus 66.

c. You **can/may** leave now.

d. John **may** have arrived.

(van der Auwera and Plungian 1998: 80-81)

この分類は、いわゆる root / epistemic の対立、及び、可能となる条件の所在が参与者内か外か、つまり participant-internal / participant-external というスケールに基づく分類であると言える[28]。

2.1.4.2.2.3 Palmer (2001)

Palmer (2001) は、モダリティを Event Modality と Propositional Modality に二分する。Event modality は、現時点でまだ実現、遂行されていない、潜在的な事態（ "events that are not actualized, events that have not taken place but are merely potential" (Palmer 2001: 8)）に関わるもので、下位分類として Deontic modality と Dynamic modality がある。Dynamic modality は条件要因が個人にあるもので、能力（ability）と意志（willingness）が含まれる。Deontic modality は条件要因が個人の外部にあるもので、義務（obligation）と許可（permission）が含まれる。Palmer (2001) はそれぞれの例として（62a~c）を挙げている。

(62) a. John can speak French. Dynamic (ability)

b. He can escape. (the door is not locked) Dynamic

c. John will do it for you. Dynamic (willingness)

d. John must come in now Deontic (obligation)

e. John may/can come in now. Deontic (permission)

(Palmer 2001: 10)

---

[28] モダリティの分類に関する先行研究では、「分類」を目的としているため、根源的モダリティ vs. 認識的モダリティの対立として意味を線引きしているが、本研究の考え方は、意味分類ははっきりとした境界を特定できるものではなく、段階的であると考える。そのため「分類」というよりも「スケール」として捉える。

Palmer (2001: 10) は英語の can は（62a）のような純粋な能力だけでなく（62b）のようにより一般的な意味での可能性も表すと述べている。これは、一般的に「状況可能」と呼ばれる用法であるが、Palmer (2001) は状況可能も能力も共に Dynamic modality として分類している。

一方、Propositional modality は Epistemic modality と Evidential modality から成る。前者は話し手の命題に対する事実性の判断を表すもので、speculative, deductive, assumptive が含まれる。後者は命題の事実性についての証拠を示すもので、reported, visual evidence, auditory evidence, hearsay などが含まれる。この定義は証拠性をモダリティとして含めている点で van der Auwera and Plungian (1998)よりも広い定義であり、法助動詞だけでなく副詞や形容詞、また、日本語の「ね」「よ」等の終助詞なども含まれる。Event modality 内の分類に関しては、可能となる条件の所在が基準になっている点では van der Auwera and Plungian (1998)と同様であるが、(61b)、(62b) のように可能となる条件が外部にあるもので、Deontic 用法でないもの（いわゆる状況可能）を Dynamic に分類し、"Dynamic vs. Deontic"という対立としている点で異なる。Palmer (2001) の分類は表 5 のようにまとめることができる。

表 5 Palmer(2001)によるモダリティの分類

Modality			
Event modality		Propositional modality	
Dynamic modality	Deontic modality	Epistemic modality	Evidential modality

2.1.4.2.2.4 Bybee et al. (1994)

Bybee, Perkins and Pagliuca (1994) はモダリティのタイプとして Agent-oriented modality、Speaker-oriented modality、Epistemic modality、Subordinating moods の四つを挙げている。

Agent-oriented modality は述語で表される行為の遂行に関する条件の、動作主内外における存在を報告するもの（"Agent-oriented modality reports the existence of internal and external conditions on an agent with respect to the completion of the action expressed in the main predicate" (Bybee et al. 1994: 177)）と定義している。ここには、Obligation、Necessity、Ability、Desire が含まれる。Ability は動作主内に動作を可能と

する条件が存在することを述べるものであるが、2.1.4.2.3 で後述するように、動作主内だけでなく動作主外に動作を可能とする条件が存在する root possibility へと一般化する (Bybee et al. 1994: 178)。

Speaker-oriented modality は動作を可能とする条件が動作主に存在することを述べるものではなく、そのような条件を話し手が聞き手へ課すことを可能とするものである（“Speaker-oriented modalities do not report the existence of conditions on the agent, but rather allows the speaker to impose such conditions on the addressee” (Bybee et al. 1994: 179)。ここには、特に可能と関りのある permissive（許可）のほかに、imperative、prohibitive、optative、hortative、admonitive が含まれる。

Epistemic modality は断言に関わるものであり、命題の真実性に対して話し手がどの程度約束できるか（ “Epistemic modality applies to assertions and indicates the extent to which the speaker is committed to the truth of the proposition” (Bybee et al. 1994: 179)）を示すものである。ここには possibility、probability、が含まれる。

Subordinating moods は Speaker-oriented modality 及び Epistemic modality として使用される形式が特定の従属節においても使用されることから設定されたカテゴリーである。特定の従属節とは（63a,b）のように、補文節、譲歩節、目的節などである。

(63) a. Although he **may** be a wise man, he has made some mistakes in the past.

b. We are working now so that we **can** take the summer off.

(Bybee et al. 1994: 180)

Bybee et al. (1994) の分類は、表 6 のようにまとめられる。

表 6 Bybee et al. (1994) によるモダリティの分類

Modality			
Agent-oriented modality	Speaker-oriented modality	Epistemic Modality	Subordinating moods
Obligation, Necessity, Ability, Desire	permissive, imperative, prohibitive, optative, hortative, admonitive	Possibility, probability	

この分類では、Agent-oriented vs. Speaker-oriented という対立が導入されている点で先に挙げた分類と異なる。van der Auwera and Plungian (1998) も、Palmer (2001) も、許可（Deontic modality）を、Non-epistemic modality または Event modality として、Epistemic に対立するカテゴリーに分類しているが、Bybee et al. (1994)では許可を命題内の意味として捉えるのではなく、聞き手を意識した語用論的な意味を帯びている点に注目しているといえる。

2.1.4.2.2.5 Narrog (2005b)

Narrog (2005b) は、モダリティは図 6 に示されるような、Event-oriented vs. Speaker-oriented、Volitive vs. Non-volitive という二軸から構成される概念であるとしている。Speaker-oriented（話者指向的）モダリティは話し手による判断を表すものであるのに対し、Event-oriented（事態指向的）モダリティは事態内の客観的条件や状況を表す。つまり「主観性」のスケールである。また、これまで Deontic と Epistemic として区別されていたものは、“element of will”が含まれるかどうかによって分けられるとし、Deontic modality は Volitive、epistemic modality は Non-volitive であるとしている。Narrog (2005b) は意味地図を用いてモダリティを分析しており、図 6 がモダリティの概念スペースである。Narrog (2005b) の研究については、意味地図に関する先行研究で再度検討する。

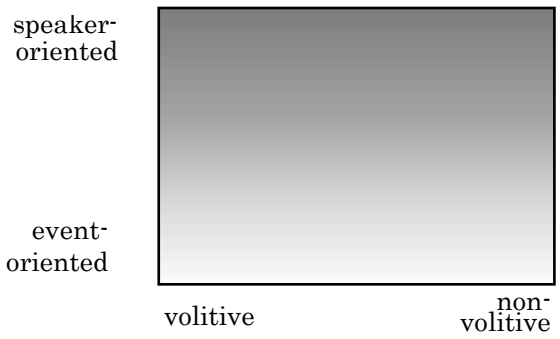


図 6 モダリティを構成する二軸 (Narrog2005b: 694)

2.1.4.2.2.6 Leech (1971)

Leech (1971)は、can と may の対比を論じる上で、may は現実的可能性（Factual

possibility)、can は理論的可能性（Theoretical possibility）を表すとしている。(64) のように、前者は“It is possible that ~”で言い換えることができ、後者は“It is possible for NP to ~”で言い換えることができるものである。

(64) a. FACTUAL：The road may be blocked.
=It is possible that the road is blocked.
=Perhaps the road is blocked.
b. THEORETICAL：The road can be blocked.
=It is possible for the road to be blocked.
=It is possible to block the road. (Leech 1971: 76)

現実的可能性は理論的可能性よりもより主観的要素が強く、より個人的な文脈で使用されるのに対し、理論的可能性はより一般的な記述として用いられることが多い(Leech 1971: 76-77)。例えば、(65a) は特定の友人について警告する場合に使用されるのに対し、(65b) は「友人というものは～」といったより一般論的なニュアンスになる。

(65) a. A friend may betray you.
b. A friend can betray you. (Leech 1971: 77)

2.1.4.2.2.7 Radden and Dirven (2007)

Radden and Dirven (2007: 246)ではモダリティを（66）のように定義し、Root と Epistemic の二項対立のもと、Root modality を Disposition, Intrinsic modality, Deontic modality の三つに分類している。

(66) Modality is an assessment of potentiality, depending either on the speaker's judgement of the reality status of a state of affairs (epistemic modality) or on the speaker's attitude towards the realization of a desired or expected event (root modality). (Radden and Dirven 2007: 246)

この分類方法は 2.1.4.2.2.2 で述べた van der Auwera and Plungian(1998) の分類にほ

ぼ相当するが、それぞれの意味を表す用語が異なっている。まず、Possibility / Necessity という概念ではなく Enabling modality / Compelling modality という用語を用いている。Enabling modality は力の潜在的可能性に障害がないこと（“Enabling modality involve the unimpeded potential of a force”）と定義されている。Enabling modality は表 7 のように 4 つに分類される。（67a~b）にそれぞれの用例を挙げる。

表 7 Radden and Dirven(2007)の分類(Radden and Dirven (2007: 246)より作成)

Root modality			Epistemic modality
Disposition modality	Intrinsic modality	Deontic modality	
ability	intrinsic possibility	permission	possibility

(67) a. I can drive [ability]
b. I can drive you. [intrinsic possibility]
c. You can/may take me home. [permission]
d. We may be leaving soon. [epistemic possibility]

(Radden and Dirven 2007: 253)

Intrinsic possibility は話し手の外にある条件による可能性を指す（“Intrinsic possibility can be […] defined as referring to a possibility enabled by a speaker-external source.” (Radden and Dirven 2007: 256)）と定義されており、一見 Participant-external possibility に相当するように見えるが、participant-external ではなく speaker-external である点で van der Auwera and Plungian(1998) の分類とは異なる。つまり、speaker（話者）指向的な定義である。このような話者指向的な意味で、「状況可能」という用語を用いる場合もある。安藤（2005: 277）では、状況的可能性とは、「主語の行動を妨げるものは外界に存在しない（=nihil obstat）という話し手の判断を表す（強調は筆者による）」と述べている。また、次に紹介する黒滝（2013）もこの intrinsic possibility を状況可能と訳している。

表 7 を見ると、possibility には intrinsic possibility と epistemic possibility の二つが

あるが、Radden and Dirven (2007) はこれらが英語において前者は can、後者は may で表されると述べ、(68) の例を挙げている。

(68) a. You can download Power Point from Microsoft.
'it is possible for you to download…' [*intrinsic possibility*]
b. You may have Power Point on your computer.
'it is possible that you have…' [*epistemic possibility*]
(Radden and Dirven 2007: 256)

"It is possible for NP to~"、"It is possible that~" との言い換えを基準としていることから、この対立は 2.1.4.2.2.6 に挙げた Leech (1971) の Factual vs. Theoretical に相当すると言える。

Radden and Dirven (2007) はこの Intrinsic possibility は ability や permission と連続をなすだけでなく、現実 (reality) 的用法へも発展すると述べている。これは、(69)) のように現実に発生している知覚や思考を表す can の用法である。

(69) a. I can see my house now.
b. I can feel his breath on my neck.
c. We can hear the birds chirping.
d. I can remember when we first met. (Radden and Dirven 2007: 257)

これは、"POTENTIALITY FOR ACTUALITY"というメトニミーを通した拡張であると述べている。モダリティは 2.1.4.2.1 で述べたように、「非現実」を表すものとされているため、(69)) のような例はその性質に背くものとして先行研究においても度々指摘されてきた。澤田 (2006) ではこのような can の用例を「自発」として分類している。

Radden and Dirven (2007) の分類の特徴は以下の三点にまとめられる。一つ目に、その分類基準として potentiality (潜在的可能性) を採用している点、二つ目に、disposition としての ability 及び permission と連続する possibility として話者指向の intrinsic possibility を設定している点、三つ目に、現実 (Reality) を表す用法をその射程に含めている点である。

2.1.4.2.2.8 黒滝（2013）

黒滝（2013）は Bolinger (1989) による intrinsic possibility と extrinsic possibility の区別を発展させ、この二項対立からモダリティを分類している。intrinsic/extrinsic の概念は Bolinger (1989) による。Bolinger (1989: 7) は can と may の比較を行う上で can は人、モノ、状況に内在的、生得的に備わっている可能性について言及する（ “Can refers to what a person, thing, or situation is endowed with, whether naturally in place (physical, mental) or implanted (authorized, permitted) ; it invokes what is immanent, inherent.”）のに対し、may は個体や状況に外在する可能性について言及する（“May refers to the external, to what transcends the entity or situation”）と述べている。前者は intrinsic possibility または potentiality と言い換えることができ、後者は extrinsic possibility または単に possibility と呼ぶことができるとしている。また、単なる“possibility”とはつまり、epistemic possibility のことを指すとしている。

黒滝（2013: 319-320）では、この intrinsic modality と extrinsic modality をさらに細分化させている。intrinsic modality には deontic modality、intrinsic potentiality、dynamic modality(disposition)が含まれる。deontic modality は(70)a）の許可のように義務に関わるものである。intrinsic potentiality は「話し手の外にある要因（モノの性質、内在する能力や環境・状況などから引き起こされる潜在的可能性（potential possibility）や潜在的必然性（potential necessity）を表す」（黒滝 2013: 319)。例として（70b）を挙げているが、これは「散発的用法」（sporadic patterns of behaviour (Palmer 1979)）と呼ばれる用法である。dynamic modality は ability や propensity など性向を表すものである。

(70) a. You may stay here. [Deontic possibility]
b. Flying planes can be dangerous. [Intrinsic potentiality] （黒滝 2013: 319)

Extrinsic modality は、Epistemic modality と Evidential modality に分けられる。可能性に関わるものでは、前者には may による可能性がある。後者は「証拠となる事実からの推論を表す」(黒滝 2013: 320）ものであり、例として（71）を挙げている。

(71) One can see you were sick. (Palmer 2001: 36)

黒滝（2013）の分類は、表 8 のようにまとめられる。

表 8 黒滝（2013）によるモダリティの分類

Intrinsic modality			Extrinsic modality	
Dynamic modality	Intrinsic modality	Deontic modality	Epistemic modality	Evidential modality

この分類では Radden and Dirven (2007) と同様、潜在的可能性（potentiality）が分析に導入されている。intrinsic potentiality は、状況可能に相当し、黒滝（2013: 318）もこれが can の第一義であるとしている。

2.1.4.2.2.9 まとめ

以上で見てきたモダリティの分類に関する先行研究において提示されてきたモダリティ分類の基準のうち、可能性に関わる概念は（72）のようにまとめられる。

(72) a. 根源的（Root）vs. 認識的（Epistemic）
または Epistemic vs. Non-epistemic（van der Auwera and Plungian 1998）
または Event vs. Propositional (Palmer 1998)

b. 参与者内的条件（Participant-internal）vs. 参与者外的条件（Participant-external）
（van der Auwera and Plungian 1998）

c. 非義務的（Non-deontic）vs. 義務的（Deontic）
（van der Auwera and Plungian 1998）
または Dynamic vs. Deontic (Palmer 2001)

d. 理論的（Theoretical）vs. 事実的（Factual）（Leech 1971）

e. 事態指向的（Event-oriented）vs. 話者指向的（Speaker-oriented）(Narrog 2005b)
または Agent-oriented vs. Speaker-oriented （Bybee et al. 1994）

f. 意志的（volitive）vs. 非意志的（non-volitive）(Narrog 2005b)

g. 潜在的可能性（potentiality）(Radden and Dirven 2007)

h. 現実（reality）vs. 非現実（unreality）(Radden and Dirven 2007)

i. 内在的（Intrinsic） vs. 外在的（Extrinsic）（Bolinger 1989）、（黒滝 2013）

j. 証拠性（Evidentiality）(Palmer 2001)、（黒滝 2013）

2.1.4.2.3 英語法助動詞の文法化

以上で見たように、法助動詞によって表される英語のモダリティは様々な概念に基づいて連続性を成す。それぞれの助動詞は二つ以上の意味を持つ多義形式であり、それらの意味は相互に関連をもつ。関連をもつということは、歴史的に派生関係にある可能性が高い。ここでは通時的な視点から can と may の意味変化の過程に関して、先行研究の知見を整理する。

現代英語では能力は can によって表され、may は許可及び認識的可能性を表す。しかし、歴史を遡ると、早くに能力の意味を表していたのは may であり、その後中英語 1200 年後から can が勢力を増し、may は可能性、許可の意味へと移行していった（小野・中尾・荒木・宇賀治・若田 1972: 343-44）。2.1.2 の（11）に挙げた Heine and Kuteva (2002)の可能表現の起源タイプのうち、英語の法助動詞 can は KNOW > ABILITY タイプに属する。can は古英語で know how to という意味の動詞 cunnan から派生したものである(Goossens 1992)。Bybee et al. (1994) によると、可能の意味は以下の（73）のように、mental ability (=know how to) を起源とし、やがて身体的能力を表すようになり、更に可能となる条件が動作主外に帰する状況可能の用法へと発展した。

(73) Can predicates that

(i) mental enabling conditions exist in the agent

(ii) enabling conditions exist in the agent

(iii) enabling conditions exist

for the completion of the main predicate situation. (Bybee 1988: 255)

状況可能は更に、可能となる条件が権威のある個人や社会的規範に帰する場合、許可の意味に発展する。

may はもともと古英語の have power to を意味する動詞 mæg から派生したもので、身体的能力（＝（73ii））を語源として、それ以降 can と同様の意味変化の過程を辿ったとされている(Bybee et al.1994: 193)。更に、状況可能から許可の意味へと発展し、また一方で話し手の推量や判断を表す epistemic possibility（「認識的可能性」）へと発展した。

以上のような意味変化は英語だけではなく、他の言語においても観察されるものである。Bybee et al. (1994) は、より多くの言語における同様の現象を研究し、言語普遍的にみら

れる可能表現の意味変化の流れとして、図 7 のような「客観的な ability から主観的な epistemic possibility へ」という道筋を提示している。

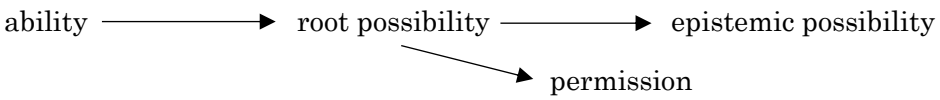


図 7　認識的可能への変化過程 (Bybee et al.1994: 199)

このような変化の流れは、possibility だけでなくモダリティ全体として deontic から epistemic へ文法化する「一方向性」として提示されている。

2.1.4.3 英語可能表現（can,may）の意味分類

2.1.4.2.2 で見たように、主に法助動詞によって表される英語のモダリティは、様々な側面から分類が試みられてきた。そのため、意味用法のラベルも研究によって様々である。そこで、本節では先行研究の分類を参考にしながら、can と may が表す意味を本稿の見解として整理し直す。

本稿では、英語の助動詞 can と may が表す意味を(74)）のように整理する[29]。

(74) a. 動作主内的可能

例）John **can** speak French. (Palmer 2001: 10 再掲)

b. 動作主外的可能

例）He **can** escape. (the door is not locked). (Palmer 2001: 10 再掲)

c. 義務的可能（許可）

例）You **can/may** leave now. (van der Auwera and Plungian 1998:81 再掲)

d. 潜在的可能性

例）i. I **can** drive you. (Radden and Dirven 2007: 253 再掲)

ii. Flying planes **can** be dangerous. （黒滝 2003:319 再掲）

[29] これらの他に、may が祝福などを表す叙想法代用（例：Long **may** you live!（安藤 2005: 286））もあるが、「可能」「可能性」よりもムードに発展しており、ここでは取り上げないことにした。

iii. The bill **may** be paid by check or by credit card. （安藤 2006: 283）

e. 認識的可能性（can は疑問文・否定文のみ）

例）i. John **may** have arrived. (van der Auwera and Plungian 1998:81 再掲)

ii. That **can't** be Mary. — she's in New York. （安藤 2005: 279）

f. 知覚の実現

例）We **can** hear the birds chirping. (Radden and Dirven 2007: 257 再掲)

まず、(74a~d) は「可能」であるのに対し、(74e,f) は「可能性」であることに注目されたい。益岡 (2007: 187) も指摘しているように、「可能」を表す表現と「可能性」を表す表現は異なる。益岡は日本語の可能をモダリティの観点から捉え、「可能性」は話し手による可能性判断を表すモダリティであり、「非現実」であるとしている。しかし、英語のように「可能」も「可能性」として捉える言語においては、「現実／非現実」という観点だけでは説明ができない。本研究では、(71a~d) のように、動詞で表される動作の発生を誘発する条件が特定の場所（動作主の内部、動作主の外部、社会的規範等）に有る／無いことを表すものを「可能」と考える。一方、(74e,f) のように、ある出来事や状況が成立するということ自体が有るか無いかというものを「可能性」と考える。後者は可能となる条件のありかには関知しない。

2.1.4.3.1 動作主内的可能、動作主外的可能

(74a) は、主語となる出来事の参与者に先天的に備わっている、または後天的に身につけた精神的・身体的な能力を指す。(74b) は主語となる出来事の参与者の外部に可能となる条件が存在するものである。

2.1.4.3.2 義務的可能

(74c) は、可能となる条件が社会的規範や権威ある人に存在するものである。(74a,b) が命題内部の客観的な描写であるのに対し、義務的可能では発話行為的な性格を帯びるようになる。つまり、話者指向性が強くなる。

2.1.4.3.3 潜在的可能性

(74d) は、一般的事実やその場の状況に内在する条件によって、ある出来事や状態が

発生する可能性が有る／無いことを表す。Coates (1983, 澤田訳 1992)では「根源的可能性」、安藤（2005）では「状況的可能性」という用語が用いられている。（73d）の例（ii）のような「散在的（sporadic)」(Palmer 1979) 用法も含む。この意味は可能世界理論における「可能性」に最も近い概念であり、“possibility”の概念の原点と言える。逆に言えば、本質的であるからこそ、これまでその定義が曖昧であった。can の場合、（74b）動作主外的可能と比べると、話し手指向性は強まるが、完全に話し手による蓋然性を表すには至っておらず、あくまで根源的可能性に属する。潜在的可能性は主に can で表されるが、may でも表される。may が使用された場合、許可と同様より改まった言い方になる（Coates 1983, 安藤 2005)。can と may がほぼ同様の意味で用いられている例として、安藤 （2005: 283）では（75）の例を挙げている。

(75) Jump **may** be used for motion up (*jump up onto the ledge*) or down (*jump down off/from the ledge*) [...] or it **can** just refer to a mode of location (*jump around the garden*). (Dixon 1991: 281)

ただし、Leech (1971) が can と may の違いを「理論的／事実的」という対立で説明していたように、can のほうが理論的に導き出された可能性であるのに対し、may の場合は事実性に関わる意味になるため、認識的可能性により近くなる。

この用法は根源的可能から認識的可能性へかけての意味の連続性の中間にあり、「可能」と「可能性」の意味が分かれる分岐点となる。さらに、黒滝（2013）では Intrinsic potentiality としているように、“potentiality”と“possibility”の境界にある用法であるとも言える。

2.1.4.3.4 認識的可能性

（74e）認識的可能性は、主に may、can は疑問文・否定文のみで用いられる。話し手の発話時における命題内容の事実性に関する判断を表し、話者指向的な用法である。ただし、can を用いた場合は、あくまで理論的可能を起源に持つことから、話者が発話時において話者の外部に存在する条件から理論的に推論した結果を表す。

（74d）潜在的可能性には主に can によって表され、認識的可能性には主に may, might によって表されるが、（76）のように根源的用法と認識的用法の中間的な意味も見られ

る。このような例から、根源的用法と認識的用法には連続性があることがわかる。

(76) The quality of the final product must be influenced by the quality of the raw material of the industry, and the methods of processing **may** influence its nutritional quality. (Coates 1992: 169-170)

2.1.4.3.5 知覚の実現

（74f）は現実に発生している知覚や思考を表す。この用法は「非現実」を表すその他の用と性格が異なり、唯一「現実」を表す。本来、「非現実」を表すはずのモダリティ形式が「現実」を表すことから、これまでの先行研究においては、周辺的、例外的な用法として扱われてきた。しかし、本研究のようにモダリティとしてではなく、「可能」として can を観察する場合、このような用法が例外的あるというよりはむしろ、基本的であると考えられる。2.1.4.2.3 で見たように、can はもともと know という認識に関わる動詞を起源とする。Bybee (2010: 169) によると、can の起源である cunnan は、古英語において、以下の三種類の動詞を補部にとることができた。

(77) a. 技術を表す動詞（verbs denoting skills）
b. コミュニケーションに関わる動詞（communication verbs）
c. 認識に関わる動詞（cognitive verbs）

中期英語以降、（77a,b）の用法から “know how to”、“knowledge to say or tell truthfully”という意味が生まれ、“ability”の意味へと変化した。一方、（77c）の「cunnan＋認識動詞」には（78）のような例があるが、この文脈では cunnan があってもなくても、ほぼ同じ意味を表すことができる。このような動詞には、distinguish の他に、remember, understand, imagine, think, believe などがある(Bybee 2010: 163)。現代英語においても、（69）に挙げた知覚・感覚動詞だけでなく、（79）のような思考動詞の例もほぼ同じ意味になる。

(78) Nu **cunne** ge <u>tocnawan</u> heofenes hiw (Ags. Gospel of Matthew xvi.3)
‘Now you **can** <u>distinguish</u> heaven’s hue’ (Bybee 2010:163、強調は著者による)

(79) a. I **can** remember. / I remember.

b. I **can** understand. / I understand.

この cunnan+認識動詞について、Bybee (2010) は（80）のように述べている。

(80) […] it is not so much that *cunnan* is used with the cognitive verb with fuller lexical meaning as it is that the lexical verb is used to shore up and flesh out the cognitive meaning of *cunnan*. That is, the harmonic use of *cunnan* and the other verbs of similar meaning may indicate the beginning of the bleaching of the meaning of *cunnan*. […] With cognitive verbs we continue the situation of the modal and the main verb being in a kind of harmony, such that the meaning of *can* + a cognitive verb is not that much different from the meaning of the cognitive verb alone. There examples make it clear that prefabricated sequences are highly conventionalized and can remain in the language a long time. (Bybee 2010: 163)

つまり、「cunnan＋認識動詞」という形式は、動詞自体によって表される認識の意味と大きな違いがなく、認識動詞は cunnan の認識的な意味を強化するために使用されていた。さらに、このように cunnan と補部の認識動詞が意味的に調和した状況において cunnan の意味の「漂白化（bleaching)」が起こり、可能表現として文法化していく源泉になったのである。

したがって、can が表す知覚の実現は、周辺的な用法ではなく、むしろ can の最も起源的な用法であり、can の現来の姿を現している用法であると言える。

2.1.4.4 まとめ

以上、英語の可能表現を、主に法助動詞の can と may を対象として、モダリティの分野における先行研究を概観した。どのような概念に基づいてモダリティの定義、分類を行うかは、先行研究によって多くの議論がなされてきたが、本研究ではそれらのうちどれか一つを選ぶのではなく、それぞれの概念がどのように異なり、どのように類似しているのかを観察し、（72a~j）のように整理した。また、英語の可能表現 can と may が表す意味を、（74a~f）として整理した。また、特に can の文法化の初期の過程において、認識動詞

との融和という特徴があったことから、現代英語の can の用法では周辺的な「知覚の実現」が、can の発展においては重要な役割を担っていることを指摘した。

2.1.5 日英語可能表現の対照研究

これまで見てきたように、日本語と英語の可能表現は特徴の異なるタイプに属している。言語研究としても、一方はヴォイスにおける周辺的な構文、一方はモダリティの中心概念として、異なる文法カテゴリーにおいて全く異なる立場をとっているがゆえに、これらの二言語における可能表現を直接比較しようとした研究は多くはない。少ないながらも日英語の可能表現の比較を行っている先行研究は、概してモダリティの枠組みに基づくものが多い。これは possibility という概念が（主に印欧語の）モダリティというカテゴリーの中核をなす重要な概念であるため、モダリティ研究として日本語の可能を捉えようとすることが研究の動機となるからであろう。以下では主にモダリティの枠組みから日本語と英語の可能表現を比較している高橋（2011, 2012a, 2012b, 2013）、黒滝（2013）を取り上げ検討する。

2.1.5.1 高橋（2011, 2012a, 2012b, 2013）

高橋（2011, 2012a, 2012b, 2013）では、日本語原作の小説『雪国』『伊豆の踊子』とその英訳における可能表現の対応関係を分析し、(81) のような結果を報告している。

(81) a. 日本語で可能表現が用いられ、英語でも can/could が対応している場合、過去形 could は、知覚動詞とともに用いられる場合や認識的用法を除く否定文が多く、特に過去に一回だけ実現した出来事を表す場合や、過去の能力について述べる場合は全て否定形である。

b. 日本語で可能表現が用いられ、英語では可能表現として訳されていない場合、過去に一回だけ実現した出来事を表す。

c. 英語で can/could が see hear などの知覚動詞や understand などの認識動詞とともに用いられている場合、状況的知覚可能性を表す。

d. 日本語の原文に可能表現がないのに、英語で can/could が用いられている場合、日本語では、(i) 主観述語が用いられている場合、(ii)「ある」「なる」による表現が用いられている場合、(iii) 意志・意図を表す表現が用いられている場合、(iv) 主観的判断文が

用いられている場合、(v) モダリティ表現が省略されている場合、(vi) 結果状態を述べている場合、名詞表現が用いられそれを英語で言いかえている場合、語り手と登場人物の視点に違いがある場合がある。

e. 英語で can/could が用いられている場合、日本語では推量・推定を表す表現が多く、「かもしれない」「ようだ」「だろう」「きっと」「はずだ」「～とも聞こえる」「わけにもいかない」「そうだ」 と対応している。このような日本語のモダリティは、蓋然性の高低を区別するのではなく、推量・推定に至った根拠やプロセスを示すことを中心としている。

（高橋 2011,2012a,20112b,2013 より抜粋）

さらに、（81）のような特徴は、英語の客観的事態把握と日本語の主観的事態把握の反映であると結論付けている。客観的事態把握／主観的事態把握は池上（2003, 2004 等）による、日英語の捉え方の違いを論じる上で基礎となる研究である。池上（2004）は、英語は事態の外側から出来事を捉え、その中の個別の参与者に注目する客観的事態把握（「スル的」事態把握）を好むのに対し、日本語は事態の内部から出来事全体を描写する主観的事態把握（「ナル的」事態把握）を好むと述べている。この事態把握の違いは、特に認知言語学的研究において、各言語の様々なふるまいの違いに影響を与えていることが指摘されている。高橋（2013: 40-41）は、客観的事態把握の英語は命題を中心に文を構成し、命題に対する話者の態度を二次的に発話時に命題に付加するという方略を取るため、話者の命題に対する蓋然性判断を法助動詞によって示すのに対し、主観的事態把握の日本語は命題自体の存在が希薄で、命題の蓋然性の高低よりも、いかにその主観的判断をしたかという推量のプロセスや判断の根拠を示す方に関心が高く、「そうだ」「ようだ」「らしい」などの多様なモダリティ形式が存在すると述べている。

2.1.5.2 黒滝（2013）

黒滝（2013） は英語と日本語の可能表現の比較を通して「従来日本語のモダリティ論では捉えられなかった可能をモダリティ表現として位置づけ（黒滝 2013: 313)」るとし、日本語のモダリティは状況可能、epistemic modality、epistemic evidentiality から成ると結論付けている。また、日本語のモダリティは epistemic modality を基本としてそこから状況可能、evidential modality へと発展しており、可能・自発の連続性については

「epistemic modality→状況可能→自発・完遂（dynamic modality）→能力可能」（黒滝 2013: 326）という変化過程を提示し、そこには事態の中に身を置いて話し手の見えの視点から事態を把握する主観的事態把握が反映されているとしている。

2.2 問題提起

以上、日本語と英語の可能表現に関して、それぞれの言語における先行研究、及び日英語の対照研究を概観した。以上の観察から見られる日英語の可能表現の違いを表 9 にまとめる[30]。これをもって、（4a）への解答とする。

表 9 日本語と英語の可能表現の比較

		日本語	英語
文法カテゴリー		ヴォイス	モダリティ
形式		接辞（及び複合形式）	助動詞
意味	実現可能	○	×
	属性可能	○	×
	動作主内的可能	○	○
	動作主外的可能	○	○
	義務的可能	△	○
	潜在的可能性	△（える／うる）	○
	認識的可能性	×	○
	知覚の実現	△？（自発）	○
	自発	○（られる）	△？（知覚の実現）
	受身	○（られる）	×
	尊敬	○（られる）	×
語源		自発型・完遂型	“know how to” “have power to”
意味変化		外的→内的	内的→外的→認識
反映される事態把握		主観的事態把握	客観的事態把握

2.2.1 先行研究に残された課題

日英語の可能表現の違いについて、これまでの先行研究における議論から表 9 のように整理されたが、これらの相違点が何に起因するのかについては、先行研究において深く議論されているとは言えない。そこには、日本語のモダリティと可能の乖離、及びそれによ

[30] 「自発」と「知覚の実現」の意味は重なる部分があると考えられるが、日本語学における「自発」と英語法助動詞の用法における「知覚の実現」は必ずしも同一ではない。しかし、これらの「知覚」が関わるグレーゾーンが可能のヴォイスとモダリティの境となると考えられる。これについては、第 4 章で議論する。

る共通のフィールドの欠如という問題がある。

2.2.1.1 日本語のモダリティと可能の乖離

日英語の可能表現の比較研究においては、各言語におけるモダリティの特徴の違いが指摘されているが、そもそも日本語のモダリティ論に「可能」の概念を含める分析は多くはない。では、日本語ではモダリティをどのように捉えているのだろうか。

日本語の文の階層構造は一般的に、図 8 のように、モダリティが命題を包みこむ構造になっていると考えられている。

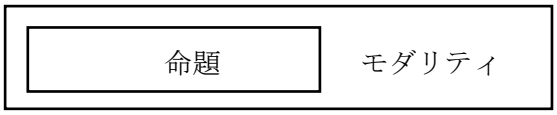


図 8 日本語の文の構造（日本語記述文法研究会 2003: 2）

日本語の可能表現は、通常、図 8 の構造の命題の内部に属すると考えられている。例えば、加藤（2006: 36）は日本語の助動詞をモダリティ助動詞と非モダリティ助動詞に分け、「られる」を非モダリティ助動詞に分類している。一方話し手による推量や判断を表すモダリティは、命題の外の階層に属する。日本語のモダリティの分類にも多くの研究があるが、日本語記述文法研究会（2003）ではモダリティを４つのタイプに分け、①文の伝達的な表し分けを表すもの（表現類型のモダリティ）、②命題が表す事態のとらえ方を表すもの（評価のモダリティ・認識のモダリティ）、③文と先行文脈との関連付けを表すもの（説明のモダリティ）、④聞き手に対する伝え方を表すもの（伝達のモダリティ）を挙げている。しかし、これらの分類の中には英語のモダリティの分類の中心的なカテゴリーである動作主内的可能、動作主外的可能に当たるものは見当たらない。認識的可能性は②認識のモダリティに相当し、蓋然性を表すものとして「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」が挙げられているが、「える」「られる」「できる」「ことができる」という可能表現はどのタイプにも含まれていない。

2.2.1.2 日英語可能表現の比較を困難にするフィールドの欠如

日英語の可能表現の比較は、2.1.5 で見たように、日本語の可能をモダリティとして見直

すというものが中心である。他言語との比較を通してそのモダリティの射程を問直すというアプローチは意義のあるものであるが、モダリティとしてではなく、そのヴォイスとしての側面は可能の意味にとってどのような位置づけになるのか、という疑問が浮上する。

可能という普遍的な概念の記述のためには、それぞれの文法カテゴリーの枠組みの中で可能を捉えるだけではなく、同じ意味を表す表現が、日英語ではなぜ統語的に全く異なるカテゴリーに属するのか、というより広い視点から考え、それらを包括的に説明する必要がある。ここで、第1章の図2に挙げた記号化としての言語の基本的な構造を思い出してみよう。言語は「形式」と「意味」の結び付きからなる記号体系であり、その意味は話者の概念化によって成立する。「可能」と言う「意味（＝概念化）」は目に見えるものではないため、直接観察することができない。「意味（＝概念化）」がどのようなものであるかを知る手掛かりは、それと結びついている「形式」の振る舞いである。したがって、カテゴリーを設定し、その枠に基づいてトップダウン的に観察、分類を行うという従来の言語研究に多くとられる方法ではなく、形式の観察を通して、ボトムアップ的にカテゴリーの在り方を検討する方法が必要である。

第3章 調査

3.1 本研究の理論的基盤

前章 2.2 で述べたように、日英語の可能表現はそれぞれヴォイス、モダリティという異なる枠組みの中で論じられてきた。それらの中で、可能の意味に関わる様々な側面があることが提示されているが、それらの側面同士がどのように関連するのかは十分に明らかになっているとは言えない。また、意味に基づく分類を行う場合、どの形式までをその分類に含めるのかということも問題になってくる。そこで、本研究はヴォイス、モダリティといった「カテゴリー」に基づく分析ではなく、各言語における「形式」に基づく分析方法をとり、各言語の可能表現形式がどのような意味を表しているのかを実際の使用例から観察することで、可能の意味にどのような側面があるのかをボトムアップ的に探る手法をとり、本研究の目的である（4b）の答えを探究する。この立場に合致する理論として Croft (2001) の Radical Construction Grammar (RCG) がある。

3.1.1 RCG

Radical Construction Grammar (RCG) は、「話者（speaker）の心（mind）の中で表示されていると想定される文法構造の特徴を明らかにすることを目指す理論である」（Croft 2001: 3, 渋谷訳: 3)。RCG は「文法構造の形式的表示の事実上全ての側面が各言語に特有（language-particular）であると主張」（Croft 2001: 4, 渋谷訳: 4）し、モダリティ、ヴォイスといった文法カテゴリーを含む、統語理論にみられる全ての統語的装置は排除される。なぜなら、それらは個別言語に特有であり、類型論的、普遍的記述を不可能にするからである。RCG では統語カテゴリーを基本とするのではなく、「むしろ構文が統語表示の基本単位であり[...]カテゴリはそれが現れる場である構文から派生する」（Croft 2001: 4, 渋谷訳: 4）と考える。この考え方は、第 1 章で図 1 によって示した、言語の基本的な構造に基づくものである。Croft (2001: 6-7)は、RCG は Langacker (1987 等)の認知文法（Cognitive Grammar）や認知言語学（cognitive linguistics）等の特定の意味理論や分析に依存するものではないことを断ったうえで、認知文法と RCG の互換性はかなり高いと述べている。

また、RCG はフィールド言語学や言語類型論とも整合性を持つ（Croft 2001: 7)。類型論的思考については、以下（82）のように述べられている。

(82) まずは、何にもまして、言語における**多様性**（DIVERSITY, VARIATION）が基本である。[…] ラディカル構文文法は、共時的な言語内部の多様性を、類型論的思考の中に組み入れる方法を提供する。[…] 類型論学者は、世界の言語の標本を構築し、通言語的一般化を通して言語の普遍性を探究するという**帰納的**（INDUCTIVE）分析法を用いる。多様性が基本であるがゆえに、言語の多様性の幅を発見するための唯一安全な方法とは、通言語的研究を通じた方法ということになる。そして、言語の多様性を探究することによってのみ、多様性の範囲、言い換えれば、人間の言語の普遍性を発見することが可能になる。（Croft 2001:7, 渋谷訳：8）

これは、日本語と英語と言う異なる言語における、可能表現の多様性から、そこに共通する「可能」という意味を探ろうとする本研究の目的に合致する。また、文法カテゴリーによるトップダウン的な方法ではなく、形式に基づくボトムアップ的、用法基盤的な考え方も本研究の言語観と一致する。この理論に基づく具体的な類型論的研究手法として、「意味地図（Semantic Map）」がある。これについて次節で詳しく解説する。

3.1.2 意味地図

意味地図（Semantic Map）は、「ある言語形式が持つ二つもしくはそれ以上の意味または文法機能の規則的な関係を可視化する方法」(Narrog and van der Auwera 2011: 318)と定義される。Haspelmath (2003: 212-213) が強調するように、意味地図は言語形式がどのような機能を果たしているのかという「用いられ方」の地図であり、機能主義的な言語観に立つものである[31]。

意味地図には古典的地図（Classical Map） と統計的地図（Statistical Map）の二種類がある。前者は次節に挙げる図 9 の様に、関連のある用法同士を線で結ぶ手法である。ある言語において、ある形式が二つの用法を持つ場合、それらの用法は「関係がある」とみなされ、線で結ばれる（また、矢印によって意味変化の方向も表示できる）。そのような用法間の結びつきの研究者による観察を通して構築されるため、“Connectivity Map”, “Implicational Map”とも呼ばれる。（詳細は Haspelmath 1997, Haspelmath 1999,

[31] Haspelmath (2003)では「意味」、「用法」ではなく「機能」として扱うことを強調している。本稿では一般的な「用法」という言葉を主に使用するが、言語形式の機能を観察するという立場を否定するものではない。

Haspelmath 2003, Croft 2001 等を参照)。

一方、統計的意味地図は量的データから統計的な手法を通じて直接構成される地図である。古典的地図が用法間の「結びつき」に基づく地図であるのに対し、統計的意味地図は「類似性」に基づく地図で、“Similarity Map”とも呼ばれている。データから統計的手法によって直接構築されるため、古典的地図に比べ、よりボトムアップ的、用法基盤的なアプローチであるといえる。具体的手法としては多次元尺度構成法を利用し、実際の用例間の類似性が地図上の隣接性によって示される（詳細は Cysouw 2007, Croft and Poole 2008, Wälchli 2010 等を参照)。

3.1.2.1 モダリティの意味地図

先行研究で提示されているモダリティの意味地図として、2.1.4.2.2 に挙げた van der Auwera and Plungian (1998)、Narrog (2005b) がある。van der Auwera and Plungian (1998) は、表 4 のような多義関係だけではなく、通時的変化の過程を考慮した図 9 のような意味地図を提示している[32]。左の点線部分はモダリティの語源となる語彙、中央の枠内がモダリティ、更に右の枠外にムードやその他の統語的カテゴリーへの文法化の道筋が示されている。

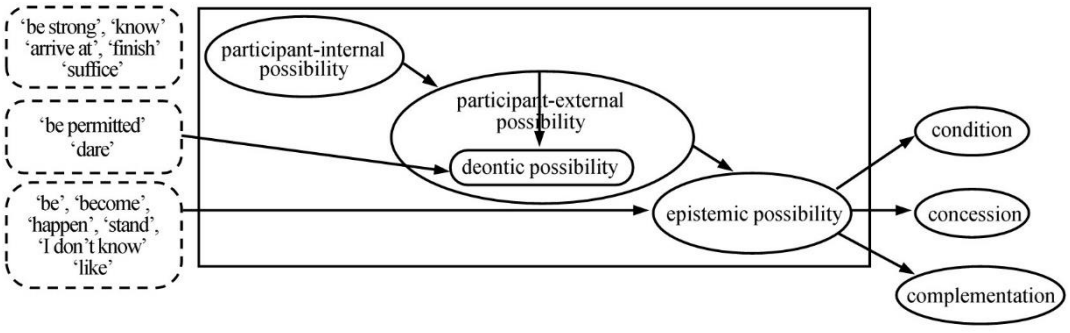


図 9 可能性への変化と可能性からの変化（van der Auwera and Plungian1998: 91)

図 9 の図中の位置関係は恣意的であるのに対し、Narrog (2005b) は、“volitive” vs. “non-volitive”、“event-oriented” vs. “speaker-oriented”という二軸から構成される意味地図を提示している。図 10 はその地図中に英語 can の用法を示したものである。

[32] 必然性（necessity）に基づく意味地図と合わせて「モダリティの意味地図」となるが、今回は可能性（possibility）に基づく部分だけを提示している。

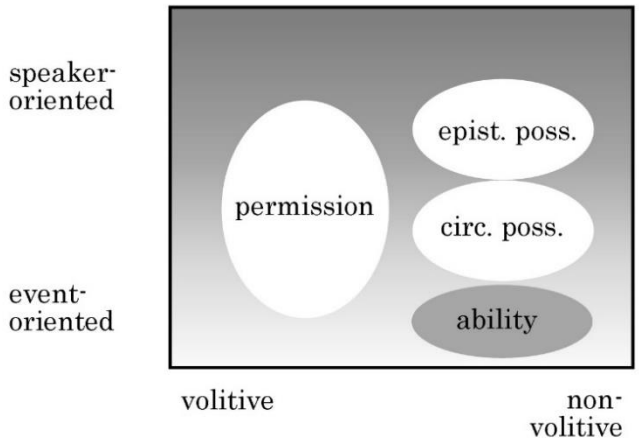


図 10　モダリティの２次元スペースにおける can の意味の分布（Narrog2005b: 695）

先行研究における二つの意味地図は、モダリティとしての可能表現の比較には有効である。一方、日本語の可能表現をこれらの中に表示することも可能ではあるが、モダリティから見た場合の特徴のみに焦点が当てられ、本来日本語の可能表現の特徴である受身や自発との関係性といったヴォイス的な特徴を地図内に示すことは難しく、それらを含めた全体像を直接組み込むことができない。また、両者とも古典的意味地図であり、モダリティに関する統計的意味地図はこれまでに提示されていない。

そこで、本稿ではよりボトムアップ的で、用法基盤モデル[33]に沿うアプローチである統計的意味地図を使って、日本語も含めた可能表現の意味地図を構築することを目指す。

3.2 調査

3.1 で述べたように、本研究は従来のモダリティやヴォイスといった文法カテゴリーを前提としたトップダウン的な分析ではなく、各言語における形式の実際の用例に基づいてボトムアップ的に可能という意味を分析する。そのために、小説の対訳テキストをデータとして使用し、日英語の可能表現形式の比較調査を行う。

一つ目の量的調査では、類型的研究手法の一つである「意味地図」を使用して可能の概念スペース（conceptual space）を可視化し、可能の下で多義関係にある意味がどのように関連しあい、どのような並びでつながっているのかを観察したうえで、可能の概念を定

[33] 第１章脚注２を参照。

義するにあたってどのようなスケールが必要であるかを考察する。この調査では調査対象として日本語と英語に加えて中国語の分析を取り入れ、意味地図の中でも統計的手法を用いた統計的意味地図の手法を採用し、通言語的多様性の中から普遍性を探ることを目的とする。

二つ目の質的調査[34]では、日英語の可能表現の特徴を、表現形式の対応関係を通して考察する。高橋（2011,2012a,2012b, 2013）では、日本語原作の小説をデータとして考察を行っているが、本研究では英語原作小説を追加し、より多くのデータから日英語の可能表現が持つ特徴を観察する。更に、観察された特徴について、一つ目の調査で得られた意味地図との整合性をはかり、統計的手法を用いた調査方法の妥当性を検討する。

3.2.1 量的調査

量的調査では日本語・英語・中国語の対訳テキストをデータとし、これら三言語における可能表現の統計的意味地図を構築する。量的調査では、二つの理由から中国語を分析対象に加えた。一つ目は、統計的手法を用いるためのデータに関わる理由である。量的調査で使用する統計的意味地図の作成には、ある二つの意味 A と意味 B を表すために各言語が用いている形式を比較し、形式の一致度が高ければ類似性が高く、形式の一致度が低ければ類似性が低いと判断し、その（非）類似性を数値データとして用いる（詳細は 3.2.1.1.3 を参照）。しかしながら、二言語の場合、形式が一致するかしないか、つまり 0 か 1 か、という二つの数値しか得られず、（非）類似性を段階的に数値化することができない。したがって、最低三つ以上の言語間の比較が望ましい。中国語を選んだ理由は、技術上、著者自身による例文の解釈が可能であることが第一であるが、中国語は日本語とも英語とも異なる系統の言語であり、また中国語の可能表現は英語と同様の助動詞によるものと、より実現的な可能である「結果可能」を表す形式があり、類型論的研究のデータとして適当であると判断した。二つ目に、前章でも述べたように、日本語と英語の可能表現という全くことなる枠組みに基づくものを比較する場合、どちらかの枠組みからもう一方を見ることになってしまう。そこに第三の視点を追加することで、二言語の比較だけでは見えなかった特徴が顕在化する可能性がある。

---

[34] 量的調査が統計的手法を用いた量的な調査方法であるのに対し、個別の用例を比較、観察し、現象の成り立ちを理解する手法という意味で「質的」と呼ぶ。インタビュー調査等の意味での「質的調査」とは異なる。

調査１では、日本語原作の小説をデータとして用いる。調査２では、英語原作の小説をデータとし、データ数を増加させ、調査１の結果と比較する。調査１は Imaizumi (2019)、調査２は今泉 (2018b)に基づく。

3.2.1.1 調査１[35]

3.2.1.1.1 調査の目的

Imaizumi (2019)では、日本語の小説と、その英語・中国語の翻訳テキストをデータとし、これら三言語における可能表現の統計的意味地図を構築した。

3.2.1.1.2 調査対象

データは日本語の小説『キッチン』と、その英語、中国語翻訳版である。収集対象とした形式は、日本語の“「える」、「られる」、「できる」、「ことができる」、英語の can、could、may、might、中国語の「能」、「能够」、「可」、「可以」、「会」および可能補語形式（動詞＋不/得＋補語）である。これらの形式の他にも、可能を表す表現はあるが、ここでは統語的機能を担うもの（日本語では格の交替を引き起こす接辞、英語では助動詞）を扱い、語彙的な表現形式や多義が見られない形式は収集対象としなかった。ただし、「ことができる」は迂言的、語彙的な形式であるが、現代日本語で動詞の活用タイプを選ばずに生産的に使用され、可能の意味において多義的であることから分析に加えた。一方「える／うる」は、で見たように通時的な視点からは多義形式であるが、現代日本語では生産性を失い、意味も散在的可能性に限られていることから、収集対象から除外した[36] 。

3.2.1.1.3 調査手順

調査方法は Wälchli (2010) を参考にした。Wälchli (2010) はマルコ福音書の 153 言語の翻訳版をデータとし、移動表現に関わる場所表現（前置詞または格）の用例を抽出し、多次元尺度構成を用いて、移動に関わる場所の表現の意味地図を構築している。Imaizumi (2019)ではこの研究における手法に従い、統計的意味地図を構築した。

---

[35] 本節の内容は、Imaizumi (2019)に加筆修正を行ったものである。

[36] ただし、収集の対象にしなかった形式であっても、他言語の可能表現に対応する形式（つまり、他言語の可能表現の翻訳）として収集されたものはデータに含まれており、分析対象に含まれている。

まず、日本語版データから日本語の対象形式の用例を収集した。そして、それぞれの用例について英語版、中国語版で対応する形式を収集した[37]。続いて英語、中国語のテキストでも同様の作業を行い、重複を削除した結果、274 の文脈[38]が収集された。一つの文脈は（83）～（85）のように三言語のパラレルデータからなる。

(83) a. そんなに寝ぼけてて包丁持てる？

b. Do you think you can handle a knife?

c. 能拿菜刀吗。 （Imaizumi 2019: 66）

(84) a. ちゃんと、部屋代入れます。

b. Naturally, I'll pay rent and everything.

c. 房租, 我一定会交的。 （Imaizumi 2019: 67）

(85) a. 取りに行ってくれてもいいわよ。

b. You can go pick it up if you like.

c. 你可以先去替我拿一下啊。 （Imaizumi 2019: 67）

例えば、（83）では三言語全てで対象形式が用いられているが、（84）では中国語でのみ対象形式が用いられ、日本語、英語ではその他の形式が用いられている。また、（83）と（85）を比べると、英語はどちらも can の用例であるが、日本語は「える」、「てもいい」、中国語は「能」、「可以」、と異なる形式が対応している。収集された各対象形式を含む文節の数は表 10 の通りである。

---

[37] ただし、翻訳文においては全ての形態素が一対一に対応しているわけではなく、文全体として意訳される場合も多い。本調査では三言語で同じ動詞が使用されている文節のみを採用し、それ以外は除外した。

[38] ここでいう「文脈」とは、各言語形式が実際に使用された環境をさす。今回の調査では、一つの文脈には、３つの言語における「用例（各言語における表現形式)」があることになる。Wälchli(2010)では「文脈」に当たる言葉を“situation”、各言語の「用例」を“doculect”という造語で表しているが、本稿では「文脈」「用例」を使用することにする。

表 10収集された用例数（対象形式別）[39] （Imaizumi2019: 66）

	英語		中国語		日本語	
用例数	Can	26	能	34	-eru	42
	Could	55	能够	2	-(r)areru	61
	May	5	可以	25	-dekiru	13
	Might	9	可	1	ことができる	8
			会	81		
			V-得-C	8		
			V-不-C	17		
合計		95		168		124

次に、収集した 274 の文脈同士の類似性をハミング距離[40]として数値化した。ハミング距離は、同じ桁数の文字列中の、異なる文字の数によって求められる。三言語全ての形式が一致する場合は距離 0、二言語で一致する場合は距離 1、一言語のみで一致する場合は距離 2、三言語全ての形式が異なる場合は距離 3、として、4 段階で距離を計算した。全用例に関して他の全用例との距離を計算し、274×274 のマトリックスデータが得られた。ただし、表 11 にその構造を示すように、表の半分が同じデータとなるため省略される。

表 11　274×274 のマトリックス構造（Imaizumi 2019: 68）

	1	2	3	4	…	271	272	273	274
1	0								
2		0							
3			0						
4				0					
⋮					0				
271						0			
272							0		
273								0	
274									0

[39] 中国語「可」の用例のうち、譲歩を表す接続詞としての用例は助動詞としての用例ではないため除外した。「可」の動詞レベルの用法から節レベルの用法への発展は「可」の文法化を考える上で重要であるが、ここでは動詞構文レベルの用法に限定する。「V 得 C」「V 不 C」は可能補語形式のそれぞれ肯定形と否定形であるが、本調査では二つの異なる構文として扱う。ただし、この可能補語形式以外の形式は、否定構文も肯定と同じ形式として扱う（例えば、「られない」、can't は、「られる」、can の用例とみなされる）。可能の意味を考える際には肯否の非対称性も考慮すべき重要な要因であるが、本調査では構文としては肯否の区別をしないことにする。また、時制についても考慮せず、「られる」も「られた」も全て「られる」として収集されている。

[40] 情報工学では「信号距離」とも呼ばれる。

次に、得られた距離データに基づき、274 の文脈を多次元尺度構成法（Multi-Dimensional Scaling, MDS）によってマッピングした。MDS は、対象間の距離的なデータから対象の地図（＝空間布置）を求める方法である（足立 2006: 135)。Borg and Groenen (1997)では、「MDS は対象間の（非）類似性を距離として低次元のスペース内に表示する方法である（“Multidimensional scaling (MDS) is a method that represents measurements of similarity (or dissimilarity) among pairs of objects as distances between points of a low-dimensional multidimensional space” (Borg and Groenen 1997: 3)）と定義している。つまり、「対象間の距離」とは、対象間の「(非）類似性」を数値化したものである。全ての対象同士の（非）類似性を示すには、データ数 274 の場合最大で 273 次元必要になるが、MDS はそれを可視化するために、本来の位置関係をできる限り保ったまま低次元に落とす。類似性が高い、つまり距離の値が小さいもの同士は「地図（＝空間布置)」中で近くに配置され、類似性が低い、つまり距離が大きいもの同士は遠くに配置される(Cysouw 2007: 236)。

MDS の実行には R (R Core Team 2016)の関数 *cmdscale()*を使用した。次元の縮約による歪み度を調べる Mardia 基準値[41]を測定したところ、基準値 2 の値が 3 次元 0.76、4 次元 0.81 となり、5 次元以上が適切という結果になったが、今回は可視化を目的とするため、可視化の限界である次元数 3 を採用した。

表 12　Mardia 基準値の測定結果（Imaizumi 2019: 69)

次元数	Mardia fit measure 1	Mardia fit measure 2
2	0.25	0.60
3	0.31	0.69
4	0.38	0.76
5	0.43	0.82

3.2.1.1.4 調査結果

R 関数 *cmdscale()*で出た結果を、R 関数 *scatterplot3d()*で作図した結果[42]、図 11 が得られた。図中の一つの点が一つの文節に当たり、274 の文脈が類似性に基づいて配置され

[41] 基準値 1,2 のどちらかが 0.8 以上の場合、歪み度が許容範囲とみなされる。

[42] 紙面の都合上本稿では *scatterplot3d()*の図を使用したが、分析の際には図の視点を自由に動かせる *plot3d()*を使い、記号ではなく色で形式を分けて観察した。

ている[43]。これが今回のデータにおいて、対象形式が表す意味の集合体としての概念スペースである。

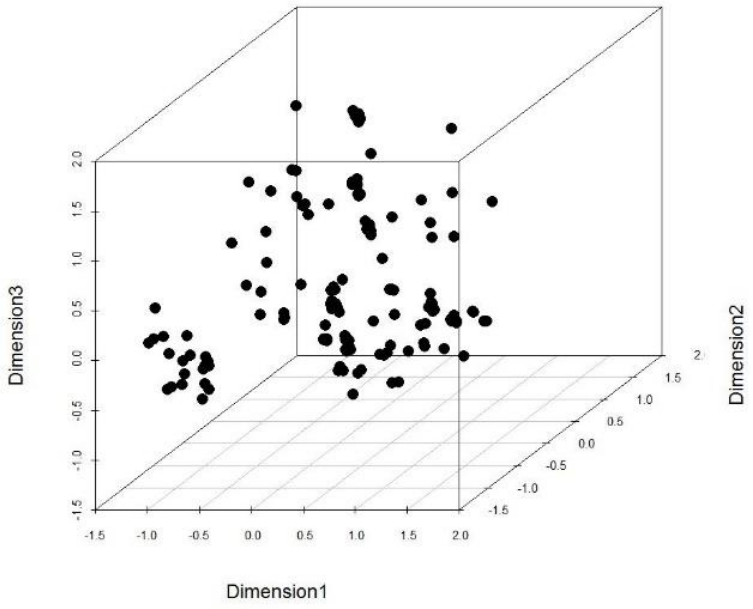


図 11 MDS の結果（『キッチン』）（Imaizumi 2019: 70）

次に、各言語がこれらをどのように表し分けているかを表示した。図 12～図 14 では各言語の対象形式が異なる記号で表示されている。Dimension1 は図に向かって水平方向の軸、Dimension2 は向かって手前から奥への軸、Dimension 3 は向かって垂直方向の軸を指す。

[43] 距離 0 の文脈は同じ場所に配置されるため、図中の点の数は 274 よりも少ない。

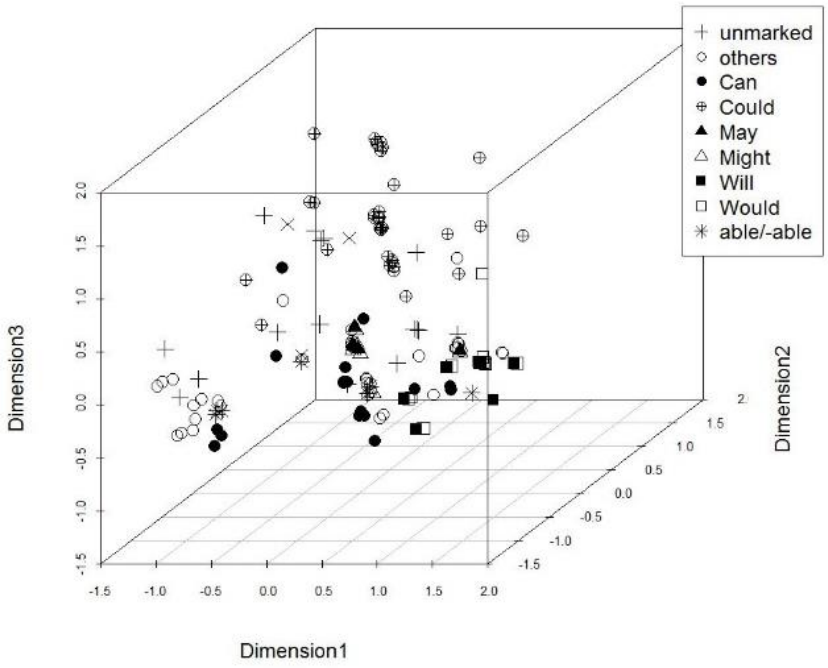


図 12 英語可能表現形式の分布（三次元）（『キッチン』）(Imaizumi 2019: 70)

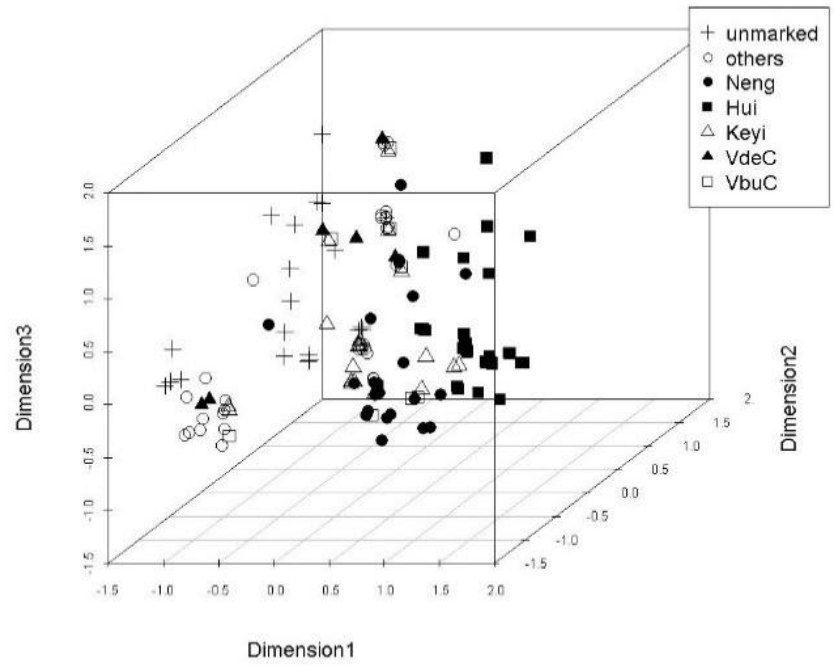


図 13 中国語可能表現形式の分布（三次元）（『キッチン』）(Imaizumi 2019: 71)

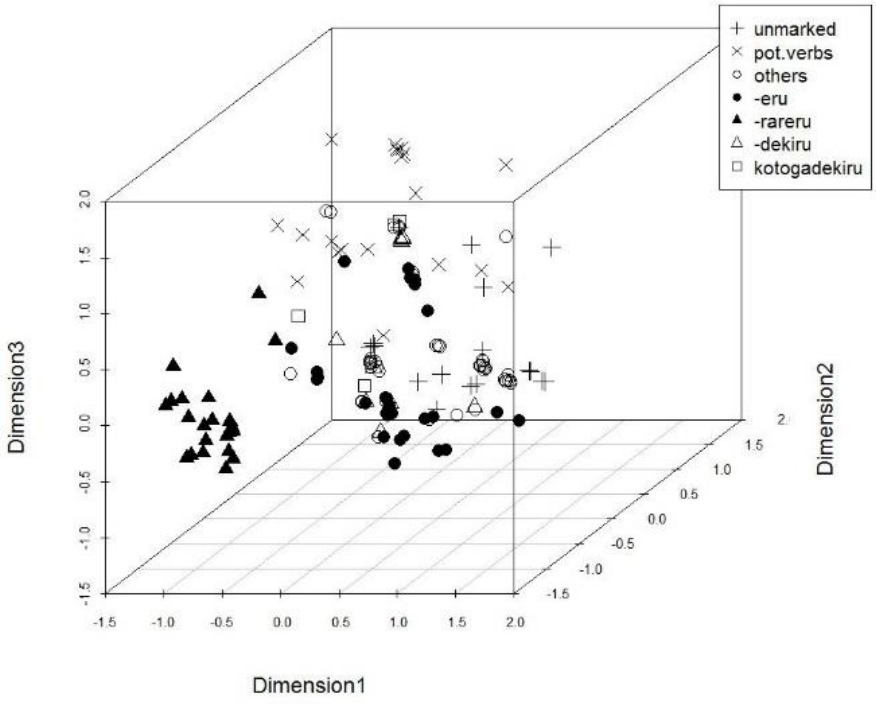


図 14 日本語可能表現形式の分布（三次元）（『キッチン』）(Imaizumi 2019: 71)

図 12～図 14 に示される形式の分布は、各言語が「可能」に関連する意味をどのようにカテゴリー化し、言語化しているかを示している。つまり、これらが今回のデータ（『キッチン』の三言語翻訳）から収集された可能表現形式の意味地図である。

Dimension1～3 は MDS によって自動的に得られた軸である。3.2.1.1.3 で述べたように、274 の用例と、それぞれ他の全ての用例との（非）類似性（つまり 274×274 の（非）類似性）を表すには最大で 273 次元が必要になる。MDS によって、その配置関係をできるだけ保ったまま 3 次元に落とされたものが図 11～図 14 である。Dimension1～3 がそれぞれ何を表すスケールであるのかは、研究者によって判断される。したがって、得られた意味地図における用例の配置を観察し、軸のラベルを検討する必要がある。

3.2.1.1.5 分析

次に、MDS によって得られた図 12～図 14 の各言語の表現形式の分布を観察し、それに基づいて三つの軸の解釈を検討した。しかしながら、三次元の図では特に Dimension 1, 2 の配置を観察するのが難しい 。そこで、次元数を 2 次元に設定した図を作成したところ、Dimension 1,2 の配置をほぼ保った図が作成されたため、Dimension 1,2 の分析には

以下の２次元の図を使用することにする。

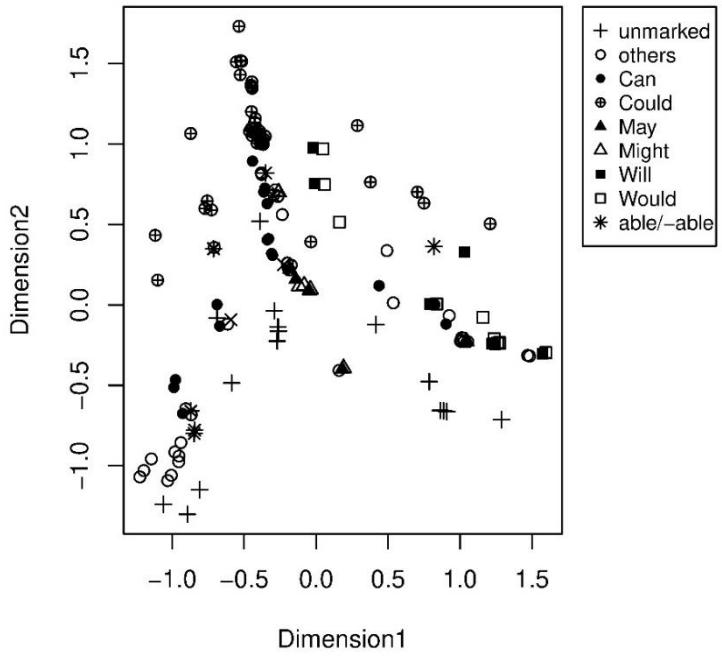


図 15 英語可能形式の分布（二次元）（『キッチン』）(Imaizumi 2019: 72)

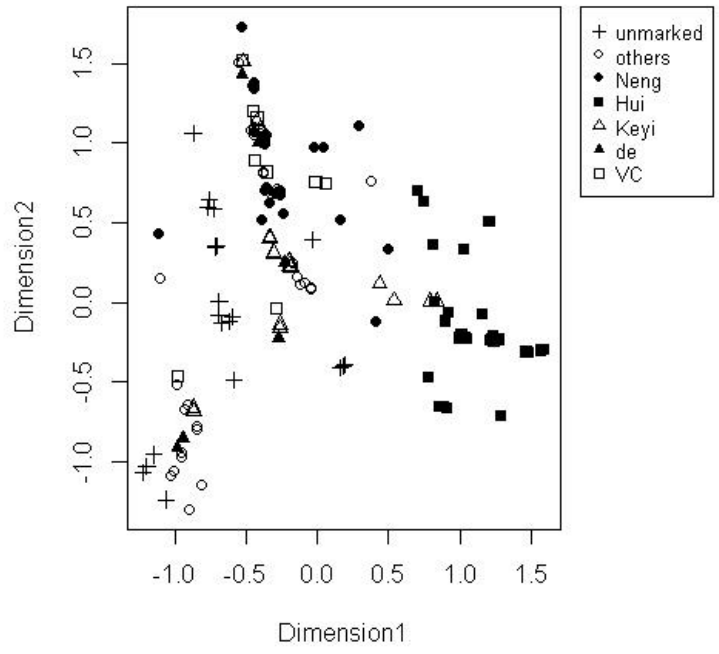


図 16 中国語可能形式の分布（二次元）（『キッチン』）(Imaizumi 2019: 73)

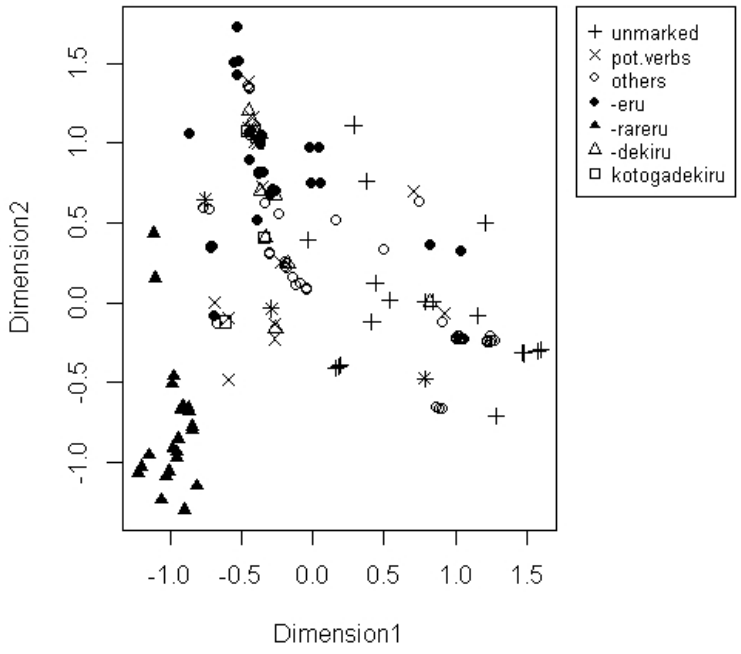


図 17 日本語可能形式の分布（二次元）（『キッチン』）(Imaizumi 2019: 73)

3.2.1.1.5.1 Dimension 1 の解釈

英語、中国語の全体的な分布の特徴として、同一形式が Dimension1（D1）軸方向に広がりを見せる。 D1 の軸上には、can、could、能、可以がマイナス側（図の向かって左側）から中央にかけて、may、might、will、would、会が中央からプラス側（図の向かって右側）にかけて広がっている。各文脈の意味を確認すると、D1 マイナス側には(83)のような動作主内的可能の用例、（86）の動作主外的可能の用例が分布し、（85）のような許可の用例は中央付近に分布している。許可の用例はやや中央よりに配置されているが、動作主内的可能、動作主外的可能の分布については明確な区別は見られず、D1 マイナス側に両者が混在している。（各用例が地図中のどの位置に配置されているかを図 18 に示す。）また、図 17 の日本語表現形式の分布を見ると、D1 軸の最もマイナス側には、「られる」が集中している。特に左下の一角には、「られる」による受身用法が集中して分布している。自発の用例は数が少なかったが、受身用法付近に分布している。

(83)（再掲）a. そんなに寝ぼけてて包丁持<u>てる</u>？

b. Do you think you <u>can</u> handle a knife?

c. <u>能</u>拿菜刀吗。 （Imaizumi 2019: 66）

(86) a. 冷蔵庫のわきがいちばんよく眠れることに、ある夜明け気付いた。

b. One morning at dawn I trundled out of my room in search of comfort and found that the one place I could sleep was beside the refrigerator.

c. 直到一天清晨，我发现在冰箱旁睡得才最安稳。

(85)（再掲）a. 取りに行ってくれてもいいわよ。

b. You can go pick it up if you like.

c. 你可以先去替我拿一下啊。 （Imaizumi 2019: 67）

(87) a. 入ってもいいんでしょ？

b. May I come in?

c. 可以进去吗？

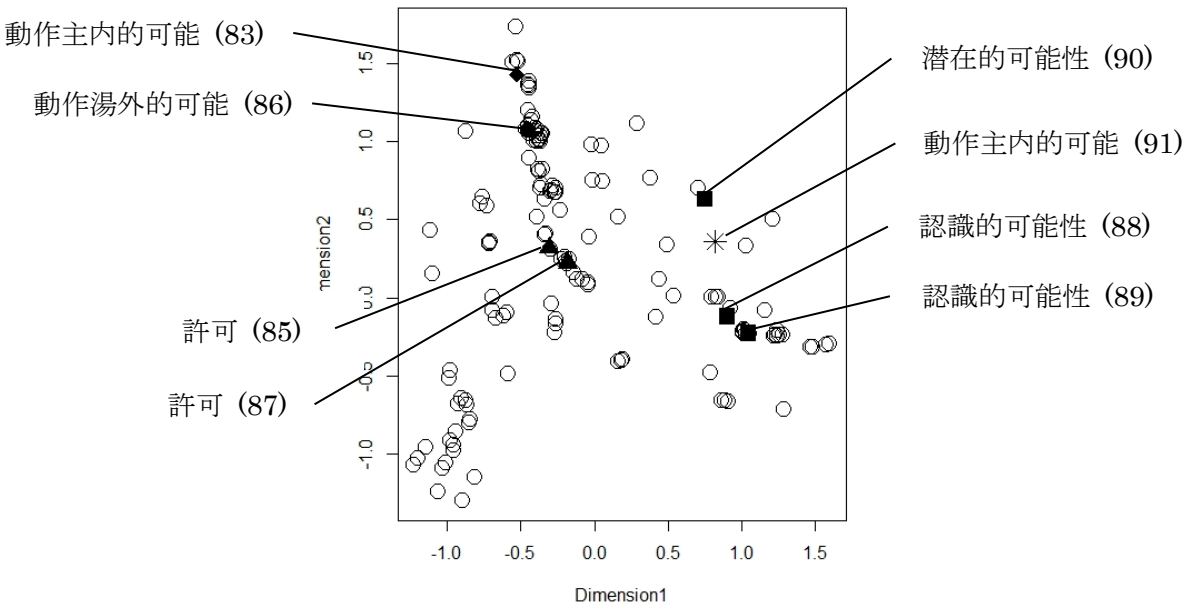


図 18 内的条件可能、外的条件可能、許可、認識的可能性の用例の分布

一方でプラス極端には、認識的可能性の用法が多く分布している。この領域は図 15、図 16 からわかるように英語では will や would、中国語では「会」が多く分布しているが、(88)、(89) のような can や may/might の用法も見られる。日本語では「かもしれない」「だろう」等その他の形式及び無標形式が用いられている。また、(90) のような「あ

り得る」の用例もプラス側に配置されている。

(88) a. それに、これ以上ろくでもないことはないだろうと確信していたのに、上には上があるものだ。

b. I've lost my last blood relation, and things can't get any worse.

c. 我确信痛苦不会再加深了。 （Imaizumi 2019: 74）

(89) a. くりかえしくりかえしやってくる夜や朝の中では、いつかまたこのひと時も、夢になってゆくかもしれないのだから。

b. 现在的这一刻或许也会在不知何时进入我的梦境之中。

c. In the endless repetition of other night, this moment, too, might become a dream.

(90) a. 昨日の朝までは想像もありえなかった。

b. I couldn't have dreamed of this yesterday morning.

c. 我做梦都不会想到的吧。

ただし、（91）のように英語で be able to が用いられている用例もプラス側に分布している。

(91) a. そういったものを作れるようになるまでにはかなりかかった。

b. […] it looked a fair amount of work to be able to make those things.

c. 学会它们的做法用掉了很长时间。

この用例は典型的な動作主内的可能を表すため、意味からいえばマイナス側に配置されることが予測されるが、今回の結果は全体の分布傾向から説明することができない。考えられる要因として、中国語の「会」が認識的可能性や未来などを表す一方で、（91）のように「（技術などを習得して）できる」という能力を表す用法も兼ね備えていることから、出現の多い認識的可能性用法の影響でプラス側に配置されているということが考えられる。

このように残される問題はあるものの、全体的に見ると、大きくマイナス側に受身、自

発及び根源的可能、右側に認識可能が分布するという二分傾向が見られる。動作主内的／外的可能については明確な分布の差は見られなかった。許可の用法は動作主内的・外的可能よりもややプラス側に配置されている。

以上をまとめると、D1 軸はマイナス側からプラス側にかけて（92）のような傾向が観察できる。

(92)（－）受身　＜　内的可能／外的可能　（／・＜）　許可　＜　認識的可能性　（＋）

（92）は 2.1.4.2.2.9 で（72）に挙げたスケールのうち、どの概念に基づくスケールであると考えればよいだろうか。動作主内的可能／外的可能には差がなく、許可、認識的可能性への連続が現れていることから、「事態指向的／話者指向的」のスケールが適切であると思われる。2.1.4.2.2.5 で述べたように、「事態指向性」は「事態内の客観的条件や状況」を表すものである。「受身」は事態内の状況を表すものであるため、「事態指向性」という概念に取り込むことができる。以上のことから、D1 は「事態指向的／話者指向的」(Narrog 2005b)というラベルを採用することにする。図中では D1 マイナス側にいくほど事態指向的、プラス側にいくほど話者指向的ということになる。

(93)（－）受身／自発 ＜ 内的可能／外的可能　（／・＜） 許可　＜　認識的可能性（＋）

事態指向的　　話者指向的

(Imaizumi 2019: 75 一部修正)

このスケールは中国語の可能補語構文の分布についても説明できる。図 16 おいて、可能補語構文（▲と□で表示）の用例は主に D1 軸マイナス側に偏っている。(94) は可能補語構文の例である。

(94) a. 君の言ったものを全部買ったらさぁ、ここまでひとりで持ってこられないの。

b. I can't carry it all in one trip.

c. 一个人根本拿不上来，太多了。　　(Imaizumi 2019: 75)

張（1998）によると、可能補語は「結果可能」を表す。結果可能とは、「動作主の意図した状態が実現できるかできないかを動作が行われた結果という観点からとらえようとする可能表現（張 1998: 81）」である。事態の結果に注目するということは、事態指向的であるから、D1 マイナス側に分布することを説明できる。

3.2.1.1.5.2 Dimension 2 の解釈

D1 軸上には英語と中国語の助動詞が広がりを見せていたのに対し、Dimension2（D2）軸上には日本語の可能表現形式が広がりを見せている。D2 マイナス側（下方向）からプラス側（上方向）にかけての日本語の対象形式は(95)の順に広がっている。

(95) （－） られる ＜ ことができる／できる ＜ える （＋）

D2 プラス側には(9)のような内的条件可能の用例が位置している。一方、マイナス側には（96）のような受身、（97）のような自発の「られる」の用例が見られる。

(96) a. じんとしびれるような淋しいこの夜の中に、ひとり置き去りにされたからだ
b. I was crying for having been left behind in the night.
c. 自己孤零零被抛弃在了这寂寞得叫人麻木的的深夜里。 （Imaizumi 2019: 76）

(97) a. あれ以来の雄一はたとえ目の前にいても電話の向こうの世界にいるように感じられた。
b. Since then, even when he was standing next to me, I had felt as if Yuichi were in some other world.
c. 那以来的雄一即使站在我的眼前，感觉也像在电话另一端的世界里。
（Imaizumi 2019: 74）

「られる」の用例のうち可能の意味で使用されているものは 13 例あったが、全て動作主外的可能を表すものであった。特に無意識的な行為の実現や、（98）のように「～（したくても）できない」といった自分の意図に反して不可能となる動作主外的（不）可能を表す用例が多く見られた。

(98) a. 十分しか抜けられないなら、電話入れればいいと思うんだよね。

b. If she could only get away for ten minutes, she should have just called.

c. 只能离开十分钟，打个电话不就行了。

また、許可の用法は動作主内的・外的可能と比べるとややプラス側に配置されている。したがって。D2 軸はマイナスからプラスにかけて（99）のような並びになる。

(99)（－） 受身／自発 ＜ 許可 ＜ 外的可能／内的可能 （＋）

これらの分布状況を考慮すると、D2 軸は主語による事態実現の「コントロール可能性」として解釈できる。この概念は、Croft (2012) による。Croft (2012) は、ヴォイス構文に関して、主語が動作主として現れるか、被動作主として現れるかを決める要素は「コントロール」である（“semantic factor determining realization as A-like or P-like is not aspectual […] the major semantic factor is a causal one, namely control.” (Croft 2012: 258)と述べている。動作主内的可能は、可能となる条件が動作主内に存在するものであるから、動作主によるコントロールが可能であるのに対し、受身では、主語は被動作主となり、事態の実現をコントロールすることができない。また自発は、動作主体の意図なしに、または意図に反して発生する状態を表すものであるから、動作主によるコントロールは不可能である。Narrog (2010)も、自発は動作主のコントロールが及ばない事態（“out of control” (Narrog 2010: 114)）であると述べている。例えば（30a）「昔のことが思い出される」は、自身の行為であるにも関わらず、無意識的にその行為が実現する、という状況を表す。したがって、理論上はコントロール可能性に関しては「動作主内的可能＞動作主外的可能」「自発＞受身」となるはずであるが、今回のデータでは受身と自発の大きな違いは見られなかった。

日本語の可能表現は、動作主内的可能であっても、（15 d）のように、意味上の動作主が、構文上は動作主として現れない（二格表示）場合もある。

(15)（再掲） b. 佐藤さんが、英語を話せることはみんな知っている。（可能構文１）

c. 佐藤さんが、英語が話せることはみんな知っている。（可能構文２）

d. 佐藤さんに、英語が話せることはみんな知っている。（可能構文３）

コントロールという概念を導入すれば、(15b,c) は動詞「話す」の動作の主体である「佐藤さん」によるコントロールが強いのに対し、(15d) は弱いと解釈できる。実際に、動作主を「に」で表す場合、(100a, b) のように主体の能力によってできるというよりも、能力や属性に関わらずに自然にできてしまう、といったニュアンスになる場合が多い。さらに、(100c) のように修飾節内部にある場合により許容度が上がることからも、非動的な属性描写の文脈において使用されやすいことが予測される。

(100) a. あなたにも 30 分で英語が話せる！

(Google 検索 https://diamond.jp/articles/-/12235)

b. このゲームはお年寄りにもできる。

c. お年寄りにもできるゲーム

また、(85)、(87) のような許可の用例は内的・外的条件可能に比べて D1 プラス側に位置すると同時に、D2 軸上でもややプラス側に位置している。許可用法では、最終的に行為を行うのは動作主であっても、それが権威を持つ人物（または社会的規範）の力にコントロールされているため、動作主によるコントロール可能性は低くなる。

全体的な分布を見ると、D1 軸上プラス側に分布する用例は、同時に D2 軸上のプラス側にシフトしており、両軸のプラス極端領域に分布している用例は認識的可能性の用法が多い。事態の発生が話者指向的になるにつれ、事態内の動作主によるコントロール可能性も低くなると考えると、これら 2 軸の解釈は実際の位置関係と整合性が得られる。以上の理由から、D2 を（101）に示すように動作主によるコントロール可能性のスケールとして解釈することにする（ただし、能動文と比較すると可能構文のコントロール可能性は低い。したがって、日本語の可能表現が重視するスケールは「コントロール可能性」というよりも、「コントロール不可能性」と言ったほうが適当かもしれない)。

(101)　　(−)　受身／自発　＞　許可　＞　外的可能／内的可能　(＋)

主語の意味役割：　被動作主　／　経験者　＞　動作主

コントロール不可能　　コントロール可能

(Imaizumi 2019: 77 一部修正)

3.2.1.1.5.3Dimension 3の解釈

D3 は図 12 を見ると、英語の can、could の区別に関わっているようである。can は D3 のマイナス側に、could はプラス側に分布している。一方中国語と日本語では、D3 と形式の分布に顕著な相関は見られなかった。

英語の助動詞 can、could の区別は第一に、(102) のように時制に関わる。しかし、could は (102) のような過去時制だけではなく、(103) のように can に比べて可能性の低い推量にも用いられる。

(102) a. 彼の目を見ることができなかった。
b. I couldn't meet his eyes.
c. 无法直视他的眼睛。 (Imaizumi 2019: 77)

(103) a. 誰のポジションが一番良かったかなんて、トータルでしかわからない。
b. Who could know which of us was in the better position?
c. 就没人清楚。

過去／非過去、可能性の高／低という対立は、どちらも「現実からの距離」と捉えられる。Langacker (2009: 242)では、これらの対立を包括する概念として、即時性 (immediate vs. non-immediate) を挙げ、can/could、may/might、will/would といった法助動詞の対立を記述している。ただし、will/would、may/might に関しては D3 軸における分布の違いが見られなかった。本調査のデータ中にこれらの形式の用例数が少なかったことが原因と考えられる。したがって、D3 の解釈については検討を要するが、現時点では can/could の区別として、「即時性」という概念を採用し、(104) のようなスケールとして解釈することにする。

(104) (－) 可能性： 高い ＜ 低い (＋)
時制： 非過去 ＜ 過去

即時的 非即時的

(Imaizumi 2019: 78 一部修正)

3.2.1.1.6 結論

以上の考察の結果、今回構築された意味地図は（105）に挙げる三つの軸から、図 19 のように構成されると解釈できる。

(105) a. 命題指向的／話者指向的

b. コントロール可能性

c. 即時性

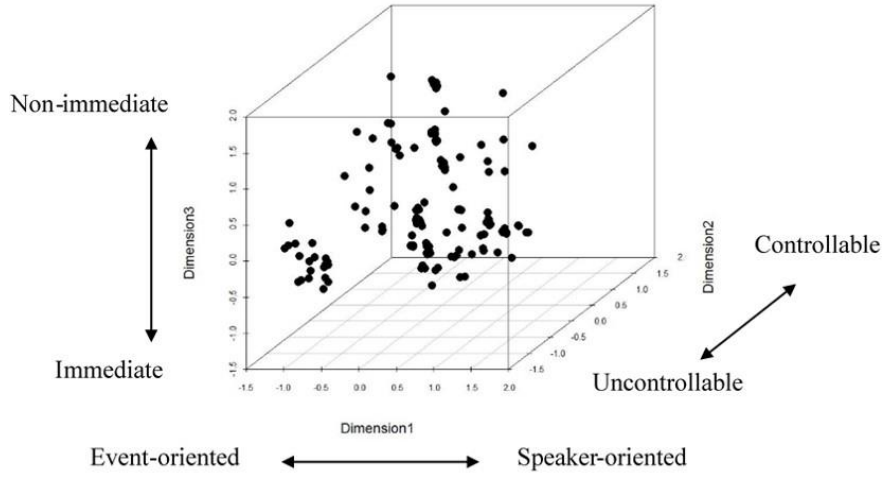


図 19『キッチン』日英中版における可能表現の意味地図（Imaizumi 2019: 78）

ただし、コントロール可能性に関して、受身と自発、動作主内的可能と動作主外的可能に大きな差は見られなかったことは、理論上予測される配置とは異なる。また、英語 be able to で表示される動作主内的可能がより話者指向性の強い位置に配置されていたこと等、理論上の説明とは合致しない配置も見られた。

また、今回構築された意味地図が唯一の「可能表現の意味地図」であるというわけではなく、あくまで今回の限られたデータにおける用例の意味地図であり、対象とする言語やデータを変えると、意味地図も変化する。しかしこれはまた Wälchli (2010) が述べるように、動的な人間の認知を反映した、動的な意味地図の特徴でもある。また、今回は可視化のために三次元の地図を構築したが、本来可能の概念は更に複雑なものであり、より多くの軸が複雑に絡み合っていると考えられる。可視化は不可能であるとしても、より多くの次元を設定すれば、その他の概念に基づく軸が現れてくると考えられる。それらの多くの

軸の中で、今回対象とした三言語の区別に最も重要であると判断されたものが、「事態／話者指向性」「コントロール可能性」「即時性」であったということである。実際に、二次元の意味地図では D3 が縮約されたことから、この三軸のなかでも前者二軸がより重要であることが推測できる。

3.2.1.2 調査２[44]

調査１(Imaizumi 2019)では、日本語原作の小説『キッチン』とその英・中翻訳をデータとし、274 の文脈から日・英・中可能表現の意味地図の構築を試みた。しかし、このデータが意味地図を構築する上で十分であるのか、また、日本語原作のデータのみで問題がないのか、つまりデータの質と量による影響に疑問が残る。そこで、今泉（2018a）では英語原作の小説『ハリーポッターと賢者の石』とその日・中翻訳を用いて同様の手順で調査を行った。

3.2.1.2.1 調査の目的

調査２の目的は調査１（Imaizumi 2019）と同様に日本語・英語・中国語の対訳テキストをデータとし、これら三言語における可能表現の統計的意味地図を構築することであるが、データの質と量を追加し、調査１で得られた結果の妥当性を検討するために行った。

3.2.1.2.2 調査対象

本調査のデータは英語原作の小説『ハリーポッターと賢者の石』とその日・中翻訳版である。収集対象とした形式は、調査１と同様の、日本語「える」、「られる」、「できる」、「ことができる」、英語 can、could、may、might、中国語「能」、「能够」、「可」、「可以」、「会」、および可能補語形式（動詞＋不/得＋補語）である。

3.2.1.2.3 調査手順

調査は調査１と同様の手順で行った。まず三言語のテキストデータから、対象形式が用いられている文脈とその対訳を収集したところ、906[45]の文脈が収集された。次に、

---

[44] 本節は今泉(2018a)の調査に基づくが、一部のデータの変更を行ったため、結果も一部異なる。図 20～25, 26 は今泉（2018a）に掲載されたものではなく、最新版である。

[45] 今泉（2018a）では、955 の文脈が収集されたが、「見える」「聞こえる」「わかる」などの知覚・思考表現が収集対象として含まれていたため、今回はそれらを除外した。

906×906 全ての文脈同士の（非）類似性をハミング距離として計算した。それらの距離データについて、R 関数 *cmdscale()*を使って MDS を実行し、３次元（及び２次元）スペースにマッピングした。

3.2.1.2.4　調査結果

MDS の結果、図 20 が得られた。次に各言語の表現形式の分布を観察するために、それぞれの言語の表現形式別に表示した図を作成した。調査１と同様、観察の便宜上次元を２に設定した図を挙げる。

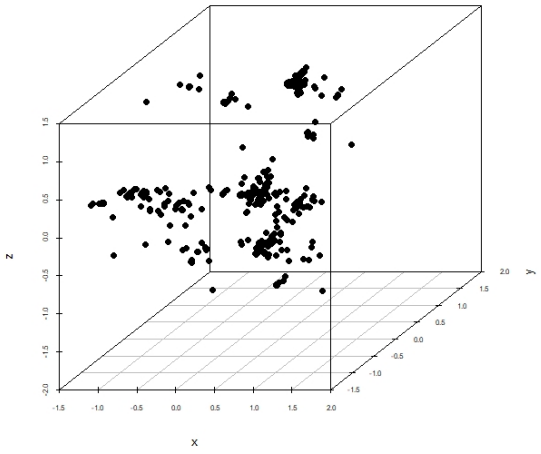


図 20 MDS の結果（『ハリー』）（今泉 2018a:350 修正版）

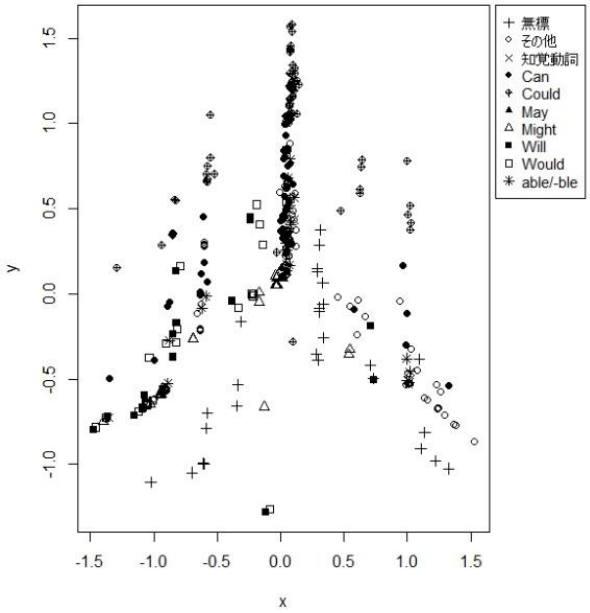


図 21 英語表現形式の分布（『ハリー』）（今泉 2018a:351 修正版）

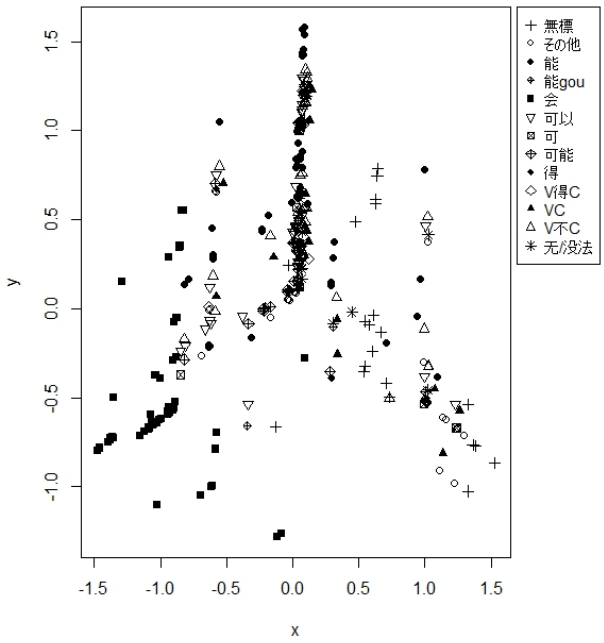


図 22 中国語表現形式の分布（『ハリー』）（今泉 2018a:351 修正版）

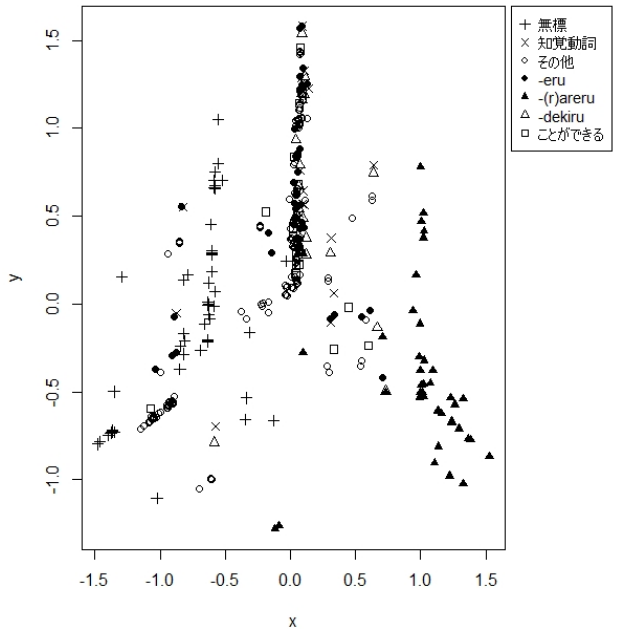


図 23 日本語表現形式の分布（『ハリー』）（今泉 2018a:350 修正版）

3.2.1.2.5　分析

今回は地図中で各用法がどのように分布しているのかを観察するため、各文脈の用法別に表示した。x 軸、y 軸の観察のために二次元図（図 24）、z 軸の観察のために三次元図を作成した。

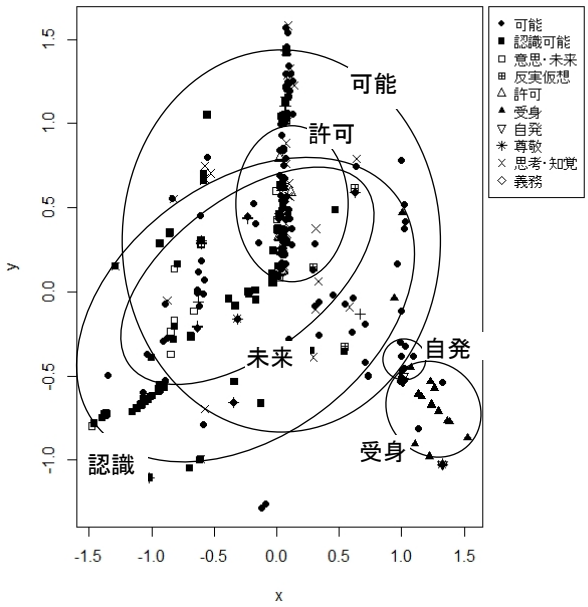


図 24 用法別（二次元）（『ハリー』）（今泉 2018a:351 修正版）

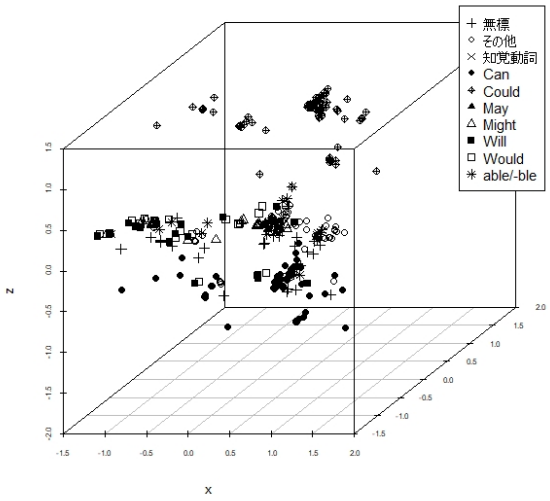


図 25 英語表現別（三次元）（『ハリー』）

3.2.1.2.5.1　x 軸

x 軸は、マイナス側（左方向）からプラス側に向かって「認識的用法＜内的・外的可能＜自発＜受身」という連続になっている。これは、調査 1 の Dimension1「事態志向的／話者志向的」というスケールに相当する。x 軸マイナス側がより話者指向的、プラス側がより事態指向的であると解釈できる。

3.2.1.2.5.2　y 軸

y 軸はプラス側（上方向）からマイナス側（下方向）に向かって「内的・外的可能＞許可＞認識的可能性／自発＞受身」という連続性をなしている。これは調査 2 の Dimension2「コントロール可能性」と解釈できる。調査 1 では、自発と受身の差が顕著に見られなかったが、今回の結果では受身がよりコントロール可能性の低い位置に配置された。ただし、動作主内的／動作主外的可能の差は今回も見られなかった。

3.2.1.2.5.3　z 軸

今泉（2018a）では z 軸に関して知覚・思考表現がマイナス側に集中しているという考察を提出した。しかし、データには「見える」「聞こえる」「わかる」などの知覚・思考表

現が収集対象に含まれていた。本調査でそれらを収集対象から外したところ、can/could の対立が現れた。図 25 を見ると、プラス側に could、マイナス側に can が多く分布している。調査 1 同様、日本語と英語では分布の規則性が見られなかった。「could＞can」という順序は「即時性」に沿うものであるが、今回も、will/would、may/might のペアには z 軸に関わる分布の差はみられなかった。データが小説であるため、基本的に過去時制で語られていることが could の出現に影響を与えている可能性がある。本調査では「時制」を考慮に入れなかったため、「即時性」のスケールが時制までを含んでこれらのデータの分布を説明できるかどうかは、今回の分析からはわからない。z 軸の解釈に関しては、不明点が残るが、「即時性」という解釈ができる可能性がある、という結論にとどめたい。

3.2.1.2.5.4　まとめ

以上の観察から、x 軸は調査 1 の Dimension1 と同様「事態志向的／話者志向的」というスケール、y 軸は調査 2 の Dimension2 と同様「コントロール可能性」のスケールと解釈できた。z 軸については。調査 1 の Dimension3 と同様「即時性」と解釈できる可能性が見られたが、確証はできなかった。

3.2.1.2.6　日本語原作データによる意味地図との比較

今回得られた意味地図と、調査 1 で得られた意味地図を比較してみよう。以下の図 26 は調査 1 で得られた図 17 を反転させたものである。

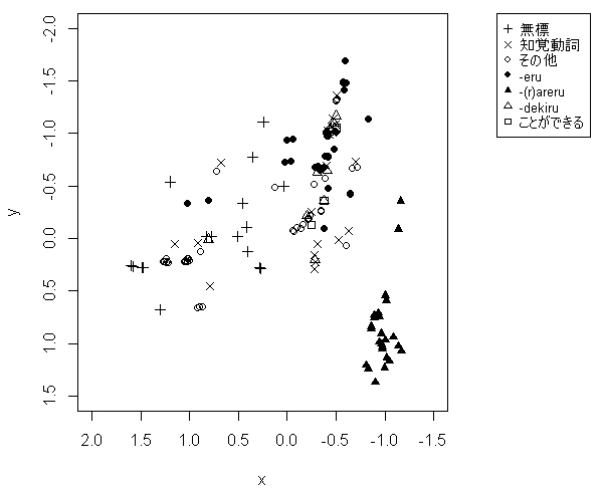


図 26 日本語表現形式別（二次元）反転版（『キッチン』）（今泉 2018a:352 修正版）

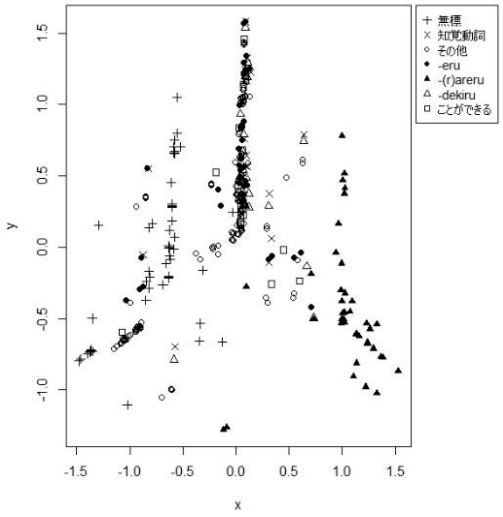


図 23（再掲）日本語表現形式別（二次元）（『ハリー』）（今泉 2018a:352 修正版）

どちらも三方向への広がりが見られ、全体として三角形の分布になっており、分布の配置も同じ傾向を見せ、軸の解釈についても同様に解釈することができた。

3.2.1.2.7 結論

調査２の結果、『ハリー』における日英中可能表現の意味地図は(106)の三つの軸からなり、図 27 のように表示されると結論付けられる。

(106) a. 事態指向的／話者指向的

b. コントロール可能性

c. 即時性（？）

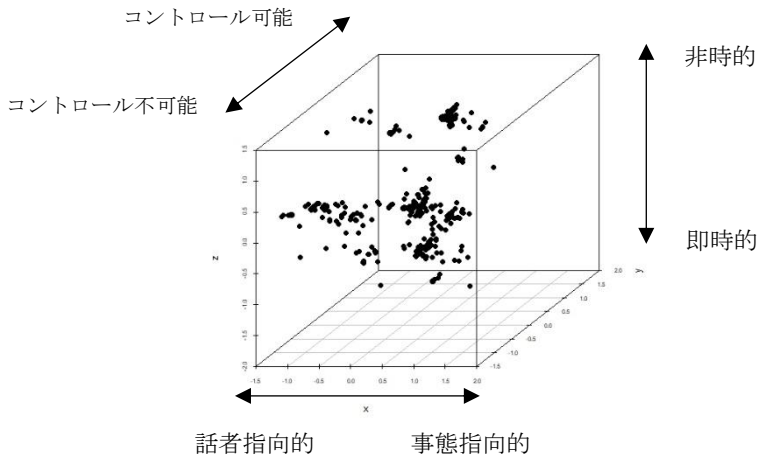


図 27『ハリー』における日英中可能表現の意味地図

3.2.1.3 量的調査のまとめ

調査１、調査２から構築された意味地図を簡略化して示すと、日本語・英語・中国語の可能表現が表す可能概念の構造として図 28 次のような構造が予測できる。Dimension3（z 軸）については、軸の解釈に疑問が残ったため、ここでは保留とした。

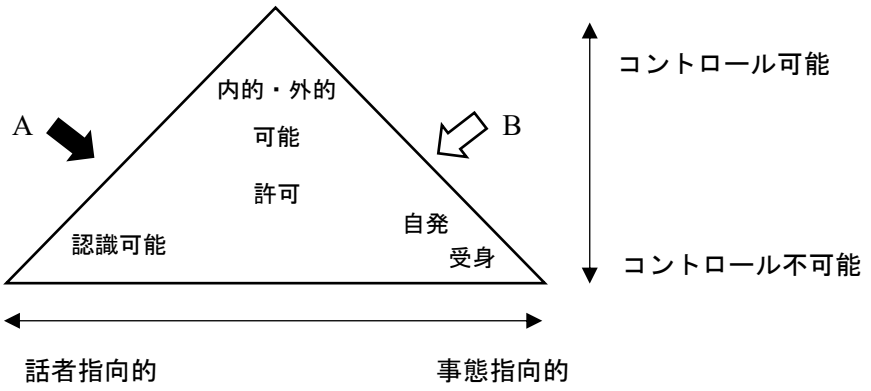


図 28 英中可能表現が表す可能概念の意味地図（今泉 2018a: 353 より一部修正）

主にモダリティに関わる意味の連続は x 軸上に、日本語のヴォイスに関わる連続性は y 軸に見られる。このように、可能の意味を図 28 のような地図として捉えることで、モダリティとヴォイスの関りが見えてくる。英語、中国語は図 28 の矢印 A の方向から可能概念を捉える傾向にあり、「事態指向的／話者指向的」というスケールに基づく意味の連続

性を持つ。一方日本語の可能表現はより事態指向的で、話者指向的な意味への連続性は見られない。しかし、コントロール可能性に基づく意味の連続性を持ち、図 28 の矢印 B の方向から可能を捉える傾向にあると考えられる。これらの二つのスケールは別々に存在しているわけではなく、共に可能の概念スペースを構成している。

このように見ると、日本語の可能表現の意味変化は、モダリティの意味変化の「内的可能→外的可能→認識可能」という一方向性の反例ではなく、単に異なる側面から可能概念を捉えているということがわかる。また、図 28 の意味地図によれば「自発→可能」という方向も、「事態指向的→話者指向的」という方向性に反していないことになる。

以上の量的調査の結論として、(107) を提示する。

(107) 日本語と英語の可能表現が表す意味の概念スペースは、二次元では以下のスケールから構成される。

a. 事態指向性／話者指向性

b. コントロール可能性

3.2.2 質的調査[46]

量的調査では三言語における構文の一致度からその（非）類似性を距離として数値化し、その数値に基づき統計的手法によって意味地図を構築した。しかしながら、人間の使用する言語の意味が、そのような数値化によって捉えることができるものなのかという疑問が残る。調査１，２で量的データとして使用したテキストの可能表現を直接観察し、3.2.1 で得られた結論が妥当なものであるかを確認する必要がある。そこで、今泉（2018b）（調査３）では、日本語と英語の可能表現について、小説の原作とその翻訳における形式の対応を観察することを通して、それぞれの言語による「可能」の概念の捉え方の特徴を考察した。さらに、その結論が量的調査で得られた結論と整合性が見られるかを確認し、妥当性を検討する。

3.2.2.1 調査対象

本調査では日本語原作の小説『キッチン』とその英語翻訳版“*Kitchen*”、及び英語原作

[46] 本節の内容は今泉（2018b）に加筆修正を行ったものである。

の小説“*Harry Potter and Philosopher's Stone*”とその日本語翻訳版『ハリーポッターと賢者の石』をデータソースとした[47]。収集対象とした形式は日本語の「える」、「られる」「できる」、「ことができる」、英語の can、could である[48]。２作品×２言語の小説の本文中から、収集対象とした形式が用いられている文節を検索し、さらに、対応するもう一方の言語において用いられている表現形式を収集した[49]。調査方法としては高橋（2011, 2012a, 2012b, 2013）と同じであるが、本調査では英語原作のデータを加え、用例数が多いため、一例一例の表現の比較だけではなく、量的な傾向も観察することができた。

3.2.2.2 調査結果

データ収集の結果、『キッチン』と *Kitchen* からは 164 例、*Harry* と『ハリー』からは 579 例、計 743 の用例が収集された[50]。

以下の例のように、一つの用例は対応する日英語の文節のセットから成るが、(83) のように両言語で収集対象とした可能形式が用いられている場合もあれば、(85)、(108) のように、どちらか一方でのみ対象形式が用いられている場合もある。

(83)（再掲）a. そんなに寝ぼけてて包丁持<u>てる</u>？ (『キッチン』)

b. Do you think you <u>can</u> handle a knife? (*Kitchen*)

(85)（再掲）a. 取りに行ってくれ<u>てもいい</u>わよ。 (『キッチン』)

b. You <u>can</u> go pick it up if you like. (*Kitchen*)

---

[47] これ以降それぞれ『キッチン』、*Kitchen*、*Harry*、『ハリー』とする。

[48] 今泉（2018b）では現代語で動作主内的可能の用法を持たない may, might は除外し、「える」「られる」「できる」「ことができる」と can, could の比較に絞ったが、日英語可能表現の比較としては、今後 may, might の用例も含めて収集を行う必要がある。

[49] 本稿では各表現がどのように翻訳されているかを調査することが目的ではなく、原作と翻訳のテキストデータを、あくまで同一の意味を表す、二言語における形式のペアとして扱い、パラレルコーパスデータのデータソースとして利用している。そのため、“Kitchen”における英語対象形式、『ハリー』における日本語対象形式も同様にデータとして含まれている。また。データは文学作品の翻訳であるため、必ずしも一字一句対応する形で翻訳されているとは限らず、文全体が意訳されている場合も多い。そこで、今回は日英どちらの文でも同じ動詞が使用されている場合のみ収集対象とした。

[50] ただし、手作業で収集したため、これらがデータ中のすべての用例であるという確証はないが、本調査では網羅的に収集することを目的にしてはいない。

(108) a. クィレル先生は君から石を取り上げることができなかった。 (『ハリー』)

b. Quirrell did not manage to take it from you. (*Harry*)

以下の表 13 は、2 作品×2 言語、計 4 つデータから収集された各言語の対象形式の数である。

表 13 各小説から収集された各言語の対象形式数（今泉 2018b：42）

日本語対象形式	キッチン	ハリー	合計
-(r)areru	61	212	273
-eru	41	85	126
-dekiru	13	64	77
ことができる	8	32	40
英語対象形式	Kitchen	Harry	合計
can	26	105	131
could	55	206	261

（83）のように両言語で可能形式が用いられているものは、743 例中 165 例で、全体の 22%であった。つまり、残りの 578 例では、どちらか一方の言語でのみ対象形式が用いられており、もう一方の言語では、対象形式以外の形式が対応しているということになる。ただし、そのうち 206 例は日本語の「られる」が受身用法として用いられている用例であった。受身用法を除いて考えると、両言語で対象形式が用いられている用例は、ほぼ半数になる。第 3 節でみたように日英語の可能表現は統語上異なる特徴を持っているが、今回のデータの中で、受身以外の意味に関していえば、日英語の可能形式の表す意味のうち、重なる部分が半数を占めているということである。

3.2.2.3 分析

次に、日英語の可能形式の表す意味が重ならない部分はどのような特徴があるのか、対象形式以外の表現形式に注目し、言語別に観察する。

3.2.2.3.1 英語の可能表現に対応する日本語の表現形式

表 14 は、英語で can、could が用いられている文節に対応する日本語の文節で用いら

れている表現形式の種類と用例数をまとめたものである。対象形式（「える」、「られる」「できる」、「～ことができる」）以外に、39 種類の表現形式が収集された。

表 14“can”、“could”に対応する日本語の表現形式今泉 2018b：43 一部修正）

No.	表現形式	用例数
1	見える／聞こえる／わかる	71
2	-eru	65
3	動詞無標形	53
4	-dekiru	49
5	-(r)areru	30
6	ことができる	22
7	といい／ばいい	11
8	-てもいい	9
9	だろう	8
10	ありえる	5
11	はずだ	5
12	ことがある	4
13	-たらどう	4
14	-てはいけない／ならない	4
15	かもしれない	3
16	-そう	3
17	-たい	3
18	だめだ	3
19	ところだった	3
20	-てならない	3
21	（のは）無理だ	3
22	わけにはいかない	3

No.	表現形式	用例数
23	-きれる	2
24	くれる	2
25	そこねる	2
26	-ている	2
27	-てくれる	2
28	とか	2
29	やすい	2
30	余裕がある	2
31	意向形（-よう）	1
32	簡単にはいかない	1
33	じゃない	1
34	つもりがある	1
35	-て	1
36	-てくる	1
37	-てしまう	1
38	-てやる	1
39	に決まっている	1
40	にちがいない	1
41	ばかりだ	1
42	命令形	1
43	わけがない	1
合計		393

対象形式以外の 39 種類の表現形式には、以下の三つの特徴が観察される。

一つ目に、(109)、(110) のように「といい／ばいい」「たらどう」「てもいい」「ては」など、条件表現を含む表現が多くみられる。つまり、英語の can、could が表す意味には、条件節としての側面があるということである。

(109) a. トランプで卵を賭けてもいいって。　（ハリー）
b. We could play cards.　（Harry）

(110) a. 何と説明すればよいかわからなかった。　（ハリー）
b. He wasn't sure how he could explain.　（Harry）

二つ目に、「あり得る」「ことがある」「だろう」「はず」「かもしれない」「じゃない」「はず」「そう」「にちがいない」といった、モダリティ文末表現が多くみられる。これは高橋（2013）の指摘に沿うものである。例として（111)、(112）を挙げる。

(111) a. 殺されてたかもしれないのよ。 (『ハリー』)
b. You could have been killed. (*Harry*)

(112) a. 埋められているのだろうか。 (『ハリー』)
b. Could there really be (*Harry*)

自明のことではあるが、英語の can、could が話し手の認識的モダリティを表すのに対し、日本語の可能表現には認識的モダリティの用法がなく、その他の文末形式が用いられるということがわかる。先行研究で言及した中井・呂（2014）では「～得る」のみを認識可能として日本語の可能表現の分類に加えていたが、認識可能という分類を立て、純粋に意味に基づくカテゴリーとして可能表現を定義するのであれば、「～得る」以外にも、多くの形式が可能表現として含められるということになる。

三つ目に、(113)、(114）のような「てもいい」「てはいけない」や、「わけにはいかない」など許可を表す形式が見られる。これらは can、could の持つ義務的モダリティの意味を表している。日本語の可能表現にも、例えば「ここは駐車できません」のように許可を表す機能があるとも考えられるが、このような用法は直接聞き手の行動を制御する表現というよりは、その場の状況における可能・不可能を描写することで、聞き手によるその行動の実現を制御するといった、語用論的な意味として解釈するほうが適切であると思われる。したがって、英語の can、could がもつ義務的モダリティの意味は、日本語では主に可能表現以外の形式によって表されるといえる。

(113) a. マントも持ってっていい。 (『ハリー』)
b. You can take the Cloak. (*Harry*)

(114) a. 外に出てはいけないよ。 (『ハリー』)
b. You can't go out. (*Harry*)

3.2.2.3.2 日本語の可能表現に対応する英語の表現形式

次に、日本語の可能表現に対応する英語の表現形式を観察する。表 15 は、日本語で「える」、「られる」、「できる」、「ことができる」が用いられている文節に対応する英語の文節において用いられている形式の種類と用例数をまとめたものである。 対象形式の can、could 以外に、33 種類の表現形式が収集された。

表 15「える」「られる」「できる」「ことができる」に対応する英語の表現形式

（今泉 2018b：45）

No.	表現形式	用例数
1	could	103
2	can	62
3	be+過去分詞	93
4	動詞無標形式	122
	主語の交替あり	82
	主語の交替なし	26
	seem/look/appear	9
	get	5
5	過去分詞	25
6	be able to	17
7	would	11
8	will	10
9	have+過去分詞	8
10	easy/difficult	7
11	possible/impossible	6
12	-ble	5
13	dare to	5
14	enough to	5
15	get+過去分詞	5
16	manage to	5

No.	表現形式	用例数
17	let X ~	3
18	too 形容詞 to	3
19	be supposed to	2
20	be ready to	2
21	stop X from -ing	2
22	to ~	2
23	allow X to	1
24	be going to	1
25	be -ing	1
26	be to ~	1
27	have chance	1
28	lack energy to	1
29	fail to	1
30	get to	1
31	have to	1
32	never ~	1
33	there is no -ing	1
34	powerless to	1
35	have trouble	1
合計		516

表 15 に挙げられている対象形式以外の表現形式には、以下の四つの特徴がみられる。一つ目に、easy/difficult、enough、ready、powerless、“too 形容詞 to” のような形容詞文や、have energy、have trouble/chance といった have を用いた表現が多くみられる。（115）は easy、（116）は have chance の例である。

(115) a. 彼の泊っている宿は、夜中に生やさしく入れるような古い造りではなかった。

（『キッチン』）

b. The inn where Yuichi was staying was not the old-fashioned kind, which would have been easy to get into in the middle of the night. (*Kitchen*)

(116) a. それ以上何の推測もできなかった。 (『ハリー』)

b. […] they didn't have much chance of guessing what it was without further clues. (*Harry*)

これらの例から、日本語の可能表現は、動作主の力について述べるというよりも、話し手の周囲に広がる状態を描写するという特徴が強いと解釈できる。

二つ目に、(117) のように let を用いた表現が 3 例見られた。

(117) a. だが、ダンブルドアが、俺を森の番人としてホグワーツにいられるようにしてくださった。 (『ハリー』)

b. But Dumbledore let me stay on as gamekeeper. (*Harry*)

この例を見ると、英語では動作を可能とさせる主体の方を主語とする使役構文が使用されるのに対し、日本語では受け手である話し手の視点から、「ある状況が可能になった」と述べる傾向にあると言える。つまり、日本語は動作主への注目が強くなく、話し手の視点からその状況を描写する傾向があると言える。

三つ目に、先行研究でも指摘されていることであるが、(118) のように、過去のある時点の能力を表す場合、be able to が使用され、(119) のように、過去における行為の実現を表す場合、manage が使用されている。

(118) a. そういったものを作れるようになるまでにはかなりかかった。 (『キッチン』)

b. […] it took a fair amount of work to be able to make those things. (*Kitchen*)

(119) a. コンクリの上へころがり込むことができた。 (『キッチン』)

b. I managed to roll myself onto the roof. (*Kitchen*)

これらは実際に実現した行為であり、行為の達成を表す。日本語の可能表現は属性可能

や完遂型起源の実現可能など、客観的事実（「現実」）としての可能を表すことができるのに対し、can、could は客観的事実の描写はできず、代わりに be able to や manage など be 動詞やその他の動詞による表現が用いられる。

四つ目に、（120）、（121）のように dare、will などの主体の意志を表す表現が見られる。高橋（2013）も意志表現との関係に言及しているが、報告されている例は「のだ」のみである。

(120) a. 学校にだけはさすがに手出しができんかった。 (『ハリー』)
b. Didn't dare try takin' the school, not jus' then, anyway. (*Harry*)

(121) a. 捕まえられる。 (『ハリー』)
b. We'll catch them. (*Harry*)

法助動詞は、これからある行為につながる効力について述べるものであるため、もともと力動的であり、また未来志向的である（Langacker 2008）。英語において、未来の行為に向かう力動性が知覚された場合、その力の源となる動作主体を主語として、その主体の意志的な行為として表現する傾向にある。一方日本語では、すでに述べたように、動作主体に注目するよりも、話し手が置かれた状況の描写として表す傾向にある。つまり英語では動作主の意志による行為の実現可能性として表されるものが、日本語では、話し手が置かれた状況下における、事態の発生可能性として表されると解釈できる。

3.2.2.4 結論

前節における分析をまとめると、英語の can, could に対応する日本語の形式のうち、「られる」、「れる」「できる」「～ことができる」以外の形式には、（122）の三つのタイプの形式が見られた。

(122) a. 条件表現を含む形式
b. 話し手の推量などを表す文末モダリティ形式
c. 許可や義務を表す形式

（122）から、日英語の可能表現に関して（123）のような特徴が解釈できる。

(123) a. 英語の可能表現は条件節としての意味概念を含む。

b. 英語の can、could が話し手の認識的可能性を表すのに対し、日本語の可能表現には認識的モダリティの用法がなく、その他の文末形式が用いられる。

c. 英語の can、could がもつ義務的可能性の意味は、日本語では主に可能表現以外の形式によって表される。

一方、日本語の「られる」「れる」「できる」「～ことができる」に対応する英語の形式のうち、can、could 以外の形式には、（124）の四つのタイプの形式が見られた。

(124) a. 形容詞や have 構文など、状況を描写する表現

b. 使役構文

c. ある時点における能力、実現可能、命題内の可能

d. 主体の意志を表す表現

（124）から、日英語の可能表現に関して（125）のような特徴が解釈できる。

(125) a. 日本語の可能表現は、動作主の力について述べるというよりも、話し手の周囲に広がる状態を描写するという特徴が強い。

b. 英語では動作を可能とさせる動作主または使役者を主語とするのに対し、日本語では動作の受け手の視点から、「ある状況が可能になった」と述べる傾向にある。つまり、日本語は動作主への注目が強くなく、話し手の視点からその状況を描写する傾向がある。

c. 日本語の可能表現は属性可能や行為の達成など、客観的事実としての可能を表すことができるのに対し、can、could は客観的事実の描写はできない。

d. 英語ではある行為に対する動作主の意志として表されるものが、日本語では、話し手が置かれた状況下における事態の発生可能性として表される。

3.2.3 量的調査と質的調査の比較

質的調査で得られた（123)、(125）の結論を、調査１で得られた結論（107）に対応させてみる。

まず、(123b)、(123c）は認識可能、義務的可能への意味の発展に関わるものであることから、(107a)「事態指向性／話者指向性」の軸に関わる。図 28 で見たように、英語は可能の概念の側面のうち「事態指向性／話者指向性」のスケールを重視して捉えるため、このような特徴が表れていると考えられる。

次に、(125a,b)、(125d）は視点と力動性[51]に関わるものである。日本語は事態の発生を観察する話し手の視点が可能の中に組み込まれている。したがって、力動性の源ではなく、到達する先の視点から、その事態発生のコントロール（不）可能性として捉える傾向にある。一方、英語は力動性の源である動作主体側の視点から、使役や意志表現として表し、可能とは別の形式で表現する。つまり、日本語の可能表現が（107b)「コントロール可能性」の軸を重視しているということを支持するものである。

さらに、(123a)、(125c）は「現実／非現実」の対立に関わるものである。英語の可能表現は動作の実現を非現実として位置づけるのに対し、日本語の可能表現はより現実的なものとして捉える特徴がある。これは「今ここ」にある知覚として捉えるのか、「今ここ」にない非現実として捉えるのか、という違いとして解釈できる。これは量的調査では結論を保留とした（107c)「即時性」の軸に関わると考えられる。

したがって、量的調査で提示した可能表現の三軸は、質的調査で得られた日英語の可能表現の特徴と合致するものであり、各調査の結論が相互に支持されたと言える。

3.2.4 結論

量的調査では、日本語、中国語、英語の可能表現の統計的意味地図を作成し、可能という概念を２次元でとらえた場合、「事態指向性／話者指向性」「コントロール可能性」のスケールから構成されると結論付けた。これは、本研究の研究目的である（4b)「日本語と英語の可能表現形式が表す意味にはどのような側面はどのように関連して可能という概念を構成しているのか」に対する答えとなる。また、質的調査では日本語と英語の可能表現

---

[51] Langacker の「ビリヤードモデル」では、ある動作を、参与者間のエネルギーの伝達として捉える。このような事態における参与者間の力関係が力動性（force dynamics）(Talmy1988) である。

には（123)、(125）のような特徴が見られ、これらの特徴は英語が可能という意味を捉える際に「事態指向性／話者指向性」の軸を中心に見るのに対し、日本語は「コントロール可能性」の軸を中心に見るということによると関連付けた。これは、研究目的（4c)「日本語と英語は可能の意味をどのように捉え、記号化しているのか。」への答えとなる。

以上の考察から、日英語の可能の捉え方の違いは（126）のようにまとめられる。

(126) 英語は可能概念の「“今ここ”にない出来事の発生」という側面を中心的に捉えるのに対し、日本語は「“今ここ”の状況における知覚」という側面を中心的に捉える。

第4章 考察

4.1 解決すべき課題

ここで、第１章で提示した本研究の目的をもう一度確認する。

(4)（再掲）a. 日本語と英語の可能表現形式が表す意味にはどのような側面があるのか。
b. それらの側面はどのように関連して可能という概念を構成しているのか。
c. 日本語と英語は可能の意味（a）をどのように捉え、記号化しているのか
d. 日英語の可能の捉え方の違い（c）は、どのような認知プロセスの違いを反映しているのか。

第２章では日本語と英語の可能表現に関する先行研究に基づき、それぞれの言語における可能の意味を整理し、表 9 としてまとめた。これを（4a）への解答とした。しかしながら、従来の統語理論ではそれらの違いを包括的に比較、考察できる枠組みがないため、個別言語における可能でなく、普遍的な意味で「可能」と言う概念の全貌を捉えきれないことを指摘した。そして、ヴォイス、モダリティといった統語的・意味的カテゴリーを出発点とする従来の研究方法ではなく、構文を基本単位として類型論的な視点から統語構造を明らかにしようとする RCG の考え方が本研究の目的にふさわしいことを論じた。それを受けて第３章では、RCG を反映した意味地図を用いて、可能の概念スペースの可視化を試みた。その結果、日英語の可能表現が表す概念を構成するスケールのうち、最も重要なものは「事態指向性／話者指向性」「コントロール可能性」という二つの軸であると結論付けた。これを（4b）への解答とした。さらに、その可能の概念スペース捉える際の視点として、英語は「事態指向性／話者指向性」のスケールに基づいて捉える傾向が強いのに対し、日本語は「コントロール可能性」のスケールに基づいて捉える傾向が強いと主張した。これらの観察から（126）を提案し、（4c）への解答とした。

(126)（再掲）英語は可能概念の「“今ここ”にない出来事の発生」という側面を中心的に捉えるのに対し、日本語は「“今ここ”の状況における知覚」という側面を中心的に捉える。

残された課題は（4d）である。本章では、（126）のような捉え方の違いが、日英語のどのような認知プロセスの違いに基づくものなのかを検証する。4.2 では、まず、そもそも人間の認知、つまり人間が現実世界にある物事を「捉える」ということはどのようなことなのか、そして、それを他者と共有するということはどのようなことなのか、そしてそれが言語にどのように反映されているのか、といった問題を、認知言語学において「捉え方」を考える上で基礎となる「グラウンディング」から説明する。

4.2 現実の捉え方とグラウンディング

これまで、本稿では「ものの捉え方」という言葉を幾度となく用いてきたが、人が物事を「捉える」というのは、そもそもどのようなことなのだろうか。

私たちは普段、目で見たモノがそこに存在すると信じ、疑うことはせずに生活している。しかしながら、私たちが見ていると思っているものは、実際は脳の中で構築されたイメージでしかない。それでは、なぜ私たちは脳内の「仮想」を、客観的「現実」だと信じるのだろうか。脳内のイメージと外界を結びつけているのは、私たちと外界との様々なインタラクションである。例えば、目の前にコップが一つあるとしよう。私たちはコップを見たり、触ったり、それで水を飲んだりと、様々な感覚を通してコップとのインタラクションを経験する（茂木 2004: 101-103）。それらのインタラクションを繰り返し経験することで、場所や時間が異なっても、また、大きさや色、形が多少異なっても、それらの経験の間に共通性が見出されれば、同じ「コップ」として認識するようになる[52]。さらに、人間の認知能力は、そこにコップがなくても、つまりインタラクションがなくても、自由にコップを思い浮かべることができる。また、言語を用いて、他者の脳内にコップのイメージを呼び起こすこともできるし、誰かが「机の上に花瓶がある」と言えば、自分の捉え方と他者の捉え方が同じではないことを知ることができる。私たちは絶えず、言語を使って自己の捉えた現実と他者の捉えた現実を交差させ、更新しあい、発展させている。Langacker (2009) も（127）のように述べている。

(127) As living and sentient creatures, we are constantly engaged in building up a

[52] 第 1 章でも述べたが、このように複数のものごとを、それらの間の類似性や一般性に基づいて一つの「まとまり」として捉える認知プロセスは「カテゴリー化」と呼ばれ、人間の一般的認知能力の一つである。

> conception of reality (RC), what we ourselves accept as real. And one thing we accept as real is that there are other conceptualizers engaged in this task, each with their own reality conception. While they overlap, these reality conceptions diverge in what they cover and differ in specifics, hence they are subject to negotiation. This is one major reason why we talk. (Langacker 2009: 290-291)

つまり、現実は「捉えられた現実」でしかなく、現実であると同時に「仮想」なのである。ただし、私たちは通常、見ているものがすべて「仮想」であるということを意識してはいない。例えば、「机の上にコップがある」 と言ったとき、通常は現実の客観的描写だと思われるだろう。しかしながら、正確に言うと、自己の捉えた現実を、自己の捉えた現実として言語でコード化し、他者に伝える行為である[53]。つまり、あくまで捉える主体（＝自己）の存在が前提となっているという点で、常に主観性を伴うのである。また、「自己の」現実として捉えるということは、「他者」の存在が前提となる。この自己（話し手）と他者（聞き手）を含む発話の場を、Langacker の認知文法では「グラウンド」と呼んでいる。

4.2.1 グラウンディング

グラウンドは認知文法において「発話事態とその発話事態の参与者（発話者と聞き手）、発話者と聞き手の相互作用、および（とりわけ発話の時と場所と言う）即時的・直接的な環境を示す」（Langacker 2008: 259, 山梨監訳: 329）とされている。その構図は、図 29 によって示される。図 29 中のグラウンド（G）には、話し手（S）と聞き手（H）が含まれ、その相互作用が双方向の矢印によって示されている。グラウンディングの対象はある事例であり、IS（Immediate scope[54]）の中の太線の四角形で示されている。事例は、話

---

[53] 自己、他者、指示対象という三項関係は「共同注意（joint attention）」と呼ばれる。Tomasello (2003)は、「言語記号は社会的やりとりを直接統制するために２項関係的に用いられるのではなく、発話において他者の注意、心的状態を外界の事物に向けるために指示的（３項関係的）に用いられる」（Tomasello 2003, 辻・野村・出原・菅井・鍋島・森吉訳: 14）と述べ、人間のコミュニケーションにおける言語記号の本質であるとしている。

[54] 「スコープ」とは、ある言語表現が扱う範囲、つまり言語主体の心的な「視界」のことであり、言語表現の理解に直接関係する部分は直接スコープ（immediate scope）、スコープの最大の範囲は最大スコープ（maximal scope）と呼ばれている（Langacker 2008: 62-63）。

し手及び聞き手に概念化され、プロファイルされる[55]。例えば、話し手が“the dog”と言ったとき、話し手はその発話時との関係で指示物（特定の犬）を概念化し、それへと聞き手の注意を向けさせる。“the”のように、グラウンドと指示対象を結びつける働きを担うものをグラウンディング要素という。

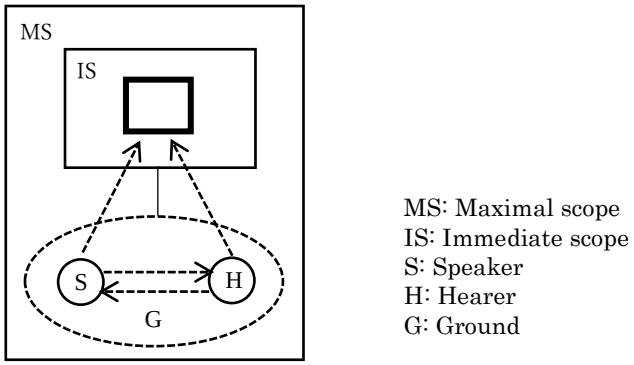


図 29 グラウンド（Langacker 2008: 261）

グラウンディングには、名詞類のグラウンディングと節のグラウンディングがある。名詞類のグランディングは、“**the** dog”のように、「それはどれのことか」という同定を行うものである。主なグラウンディング要素には冠詞や数量詞（all, some, any, each など）がある。一方、節のグラウンディングとは、「ある事象が起こったかどうか」という事象の存在に関わるものである。節のグラウンディング要素には、時制と法助動詞がある。英語の可能表現と関りがあるのは、グラウンディング要素としての法助動詞である。そこで、次に、グラウンディング要素としての法助動詞について、Langacker (2008) の記述を中心に詳しく見ていく。

4.2.2 グラウンディング要素としての英語法助動詞

先に述べたように、節のグラウンディングとは、簡単にいうと、事態が起こったかどうかという「事象の存在」について述べることである。より具体的には、プロファイルされた事態の生起が即時的な現実として位置づけられるのか、非現実として位置づけられるの

[55] プロファイルとは、ある概念ベース内で認知的際立ちを与えられる、つまり示す対象として知覚されることである（Langacker 2008: 66, 山梨監訳: 86）。

か、といった、事象の位置づけを表す（Langacker2008: 296-302）。Langacker (2008) は、「現実」を図 30 のように、伸長し発達する円柱として示している。

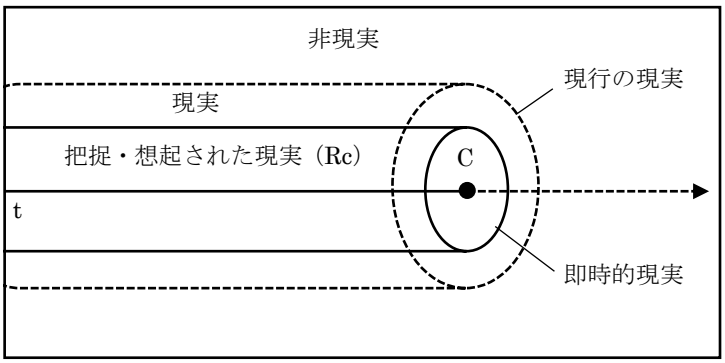


図 30 伸長する現実（Langacker2008：301，**山梨監訳**：389）

中心部分の円柱は、特定の認知主体（C）によって確定された知識として受け入れられた現実、つまり、把捉・想起された現実（conceived reality (R_c)）である。その先端部分は C によって「今ここ」の現実として受け入れられている部分であり、即時的現実（immediate reality）と呼ばれている。即時的現実は、時間軸（t）に沿って絶えず伸長し、R_c を形成し続けている。

節のグラウンディング要素のうち、時制は即時的現実／非即時的現実の位置づけに関わる。例えば、過去時制（英語の"-ed"）はある事態の発生を即時的現実の外、つまり、R_c の円柱の先端部分以外のどこかに位置づける働きを担う。一方、法助動詞は、現実／非現実の位置づけに関わる。Langacker (2008: 302) によると、「法助動詞は、プロファイルされたプロセスを想起された現実の外部に留め置くもので、ある領界においてそれを非現実（unreal）として参照することができる（R_c の補部）。法助動詞によってグラウンディングされたプロセスは、概念化者には現実として受け入れられているものではないので、非現実的であると言われる」（Langacker 2008, 山梨監訳: 391）。従って、法助動詞を用いるということは、本質的に事態を非現実（unreal）として捉えるということである。

Langacker (2009: 241) ではそれを図 31 のように示している。法助動詞がない場合、図 31(a)のように事象 p は C の即時的現実、または非即時的現実に位置づけられる。現在時制の場合は即時的現実に、過去時制の場合は非即実的現実に位置づけられる。一方、法助動詞がある場合、図 31(b)のように事象 p は現実（Reality）の外に位置づけられる。ま

た、p の位置は potentiality、つまりその事態が現実に取り込まれる可能性の度合いによって、R から遠くに位置づけられたり、近くに位置づけられたりする。例えば might は may よりも potentiality が低く、p が R からより離れたところに位置づけられ、R に取り込まれる可能性がより低くなる（Langacker 2009: 242)。

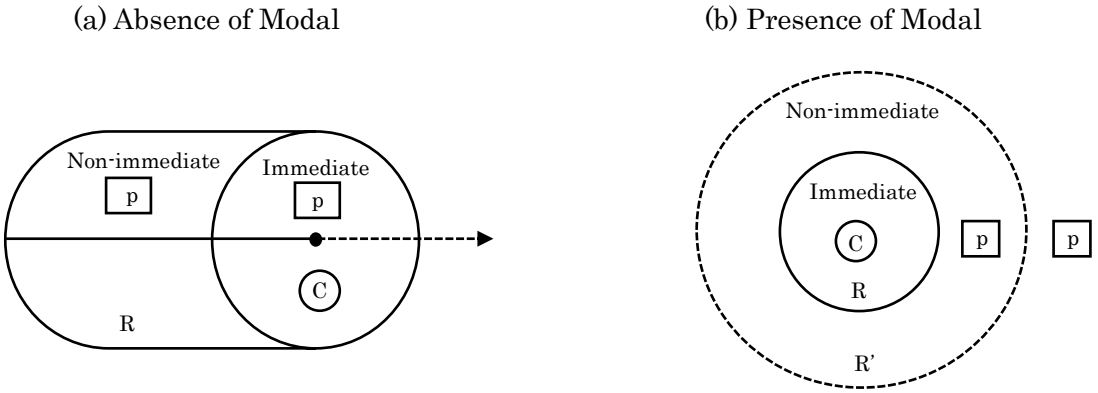


図 31 法助動詞の有無（Langacker2009：242）

2.1.4.1 で統語的特徴から法助動詞を定義した際に、助動詞（Aux）には法助動詞、have+過去分詞、be+現在分詞、及び時制要素（Tense）が含まれると述べた。グラウンディングという観点から見ると、助動詞（Aux）のうち、法助動詞と時制はグラウンディング要素であるのに対し、それ以外はグラウンディングされた構造ということになる。

4.3 グラウンディングから見た可能表現

英語の可能表現 can、could、may、might は節のグラウンディング要素であり、図 31(b)のようなグラウンディングを行う。つまり、英語における「可能」とは、事態の発生をグラウンドから見て、非現実として位置づけるものである。（126）に挙げた「英語は可能概念の「今ここ」にない出来事の発生としての側面を中心的に捉える」という特徴は、このグラウンディングの理論から説明できる。事態の発生をグラウンドから捉える、ということは、事態とグラウンドが対峙する図 29 のような構図が前提となる。これは、先行研究で指摘されている「外から客観的に眺める視点」としての「客観的事態把握」にも通じる。

一方、日本語の可能表現は、客観的事態把握ではなく、主観的事態把握を反映してい

る。つまり、事態と対峙するグラウンドからの視点ではなく、事態の中に入り込んだ視点から周囲の状況を眺める。ここで問題になるのが、このような日本語の事態内におかれた視点は、図 29 のような認知構図では説明できないということである。同じ意味を表すにも関わらず、日本語の可能表現は、英語と同様の理論は説明することができない。日本語の可能表現を説明するには、図 29 とは別の認知のあり方を導入する必要がある。この英語と日本語の異なる事態把握を説明できる理論が、中村（2004, 2009）の「I モード認知／D モード認知」である。

4.3.1 I モード認知と D モード認知

I モード認知とは、認知主体と対象との主客未分な身体的インタラクションを基盤とした認知モードで、D モードは、認知主体が本来存在するインタラクションから独立し、外から対象を客観的に眺める脱主体化された認知モードである（中村 2004, 2009）。それぞれの認知モードは以下の図 32 のような構図になる。図 32(a)の I モード認知では、認知主体（C）と、四角形で示される事態との間の二方向の矢印によって外界とのインタラクションが表されている。一方、図 32(b)の D モード認知では、C は本来の認知主体としての場から外置され（=displacement）、外から認知像を眺める構図になっている。

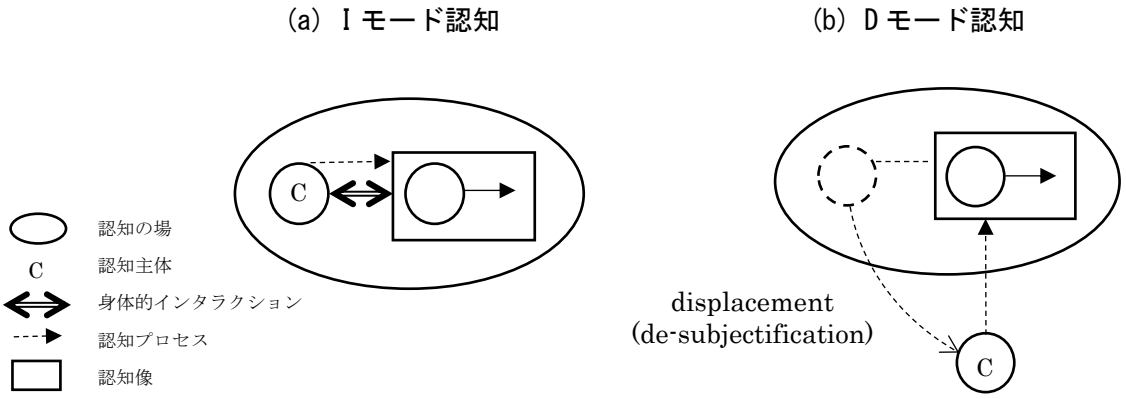


図 32 I モード認知／D モード認知（中村 2009：359, 363）

ここで重要なのは、I モード認知では、認知主体 C の円と対象としての円、認知の場としての外円が一体化していて、「認知主体としての私たち自身の境界があいまいであること、さらに私たちと対象とのインタラクションが、私たち（円 C）の外部で生じているの

か、私たちの内部で（楕円の内部で、脳内で）生じているのかがあいまいであるという認知の実情を捉えることができる」（中村 2009: 360）という点である。図中では三つの異なる円として描かれているが、認知主体 C、認知の対象、認知の場は切り離すことができず、融合して存在しているのである。一方、4.2 で述べたように、インタラクションを通じて捉えた現実を他者と共有するとなると、その経験を客観的に捉え、それに対して他者の注意を喚起する必要がある。そのためには、図 32(b)のように認知主体が事態と対峙する D 認知モードが必要になる。つまり、図 29 のグラウンディングの構図は、D モードを前提としているのである。したがって、事態を捉え、それを他者に伝える手段である言語は、D モード認知と不可分のシステムであるといえる。中村（2004: 38）も D モードは人間を特徴づける認知モードであり、I モードから D モードへ移行すると述べている。

一方で、日本語にはインタラクションに根差した I モード認知を反映した言語現象がしばしば見られる。例えば「寒い！」という表現は、その場の認知主体（C）による外界とのインタラクションによって得られた感覚を、そのまま吐露する表現である。今泉（2018c）は、感情や感覚を表す日本語の内的状態述語の人称制限が I モード認知によって説明できることを示している[56]。

中村（2009）は、日本語の可能表現が I モード認知を反映していることに言及している。例として、以下の（128a,b）を挙げ、（128a）が、認知主体が対象との何らかのインタラクションによって得られる感触をその場で吐露するような表現であれば、それは I モード認知を反映する表現であり、一方、その感触を対象の客観的特性伝えるために（128b）のような表現を用いるのであれば、その場合は D モード認知を反映する表現であると述べ、（128a）の「られる」は、I モードを反映する側面を残しており、完全に D モードを反映する言語形式にはなりきっていないと述べている（中村 2009: 364）。

(128) a. このりんごは 3 分で食べられる。

b. These curtains are washable. （中村 2009: 364）

---

[56] 日本語には I モード認知を反映した言語表現が多くあるが、日本語の表現が全て I モード認知であるわけではない。先述した通り、言語表現である以上 D モード認知が必要である。また、日本語の可能表現はグラウンディング要素ではないが、日本語にグラウンディングがないわけではない。今泉（2016）では、日本語のモダリティ文末表現に形式名詞などの名詞化要素が多く含まれていることを指摘し、日本語ではこれらの名詞化が脱主体化の働きを担っていると主張した。

つまり、認知モードがある言語表現にどの程度反映されるかは、程度の問題である（中村 2009: 364）。しかし、可能表現とIモード認知の関連についてこれ以上詳細な分析は行っていない。

以上のことから、日英語の可能表現を説明するには、図 29 のグラウンディングでは不十分であり、Iモード認知／Dモード認知という二つの認知モードを導入することで包括的に説明できることが期待される。先行研究では「視点が事態の中か外か」、「客観的把握か主観的把握か」といった違いが既に指摘されているが、それが具体的にどのような認知プロセスに基づくのかを示すことはできていない。Iモード認知／Dモード認知という認知モードを導入することで、日本語と英語の捉え方の違いを記述することが可能になると考えられる。

4.3.2 日英語の可能表現と認知モード

そこで、以下ではIモード認知とDモード認知の観点から日英語の可能表現の特徴を説明することを試みる。

4.3.2.1 英語の可能表現とDモード

既に述べたように、英語の可能表現 can、could、may、might はグラウンディング要素として、事態の発生を非現実に位置づける働きをする。これは、話し手を含むグラウンドと事態との対峙関係が前提となっている。また、第3章の結論（126）で英語の可能表現は「事態指向性／話者指向性」というスケールに基づいて可能を捉えていることを主張したが、これもグラウンド（話し手）と事態との対峙関係が前提になっているからこその特徴であると言える。以下でこの主張を立証していく。

もともと客体、つまり「観られる側[57]」における要素を表していたものが、認知主体、つまり「観る側」の要素を表すようになる過程は、主体化（subjectification）と呼ばれている。Langacker (2006) では、法助動詞の語源となる本動詞から法助動詞の認識的用法

[57] Langacker は認知の主体と客体の関係をステージの上と外に例え（ステージ・モデル）、ステージの外にいる観客のように主観的に捉えられることを“subjectively construed”、ステージ上の対象のように客観的に捉えられることを“objectively construed”としている。この主観／客観という用語は以下の脚注 59 でも述べるように、異なる理論において異なる意味で用いられるため、概念の混乱を招く恐れがある。中村（2016）ではこの対立を「観る側性／観られる側性」という用語を用いている。本稿でもこの用語を採用することにする。

への主体化を以下の図で示している。

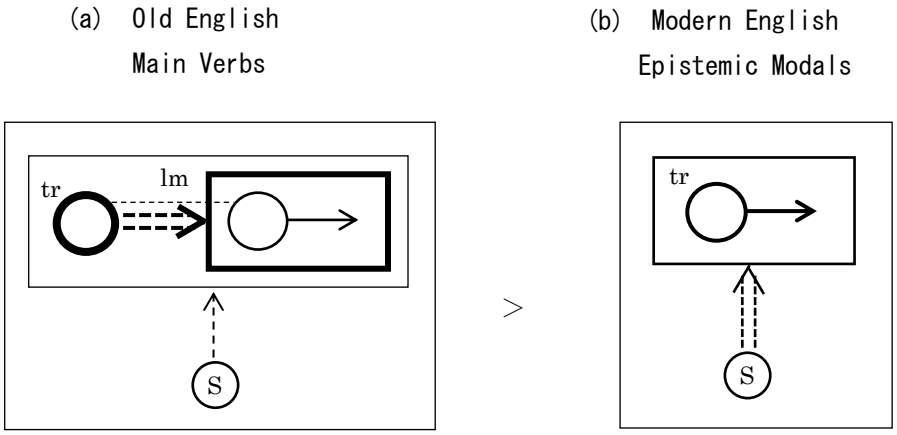


図 33 Main Verb から Epistemic Modals への主体化（Langacker 2006: 19）

2.1.4.2.3 で述べたように、can は cunnan (know how to)という動詞を起源とし、やがて動作主体の能力を表すようになり、動作主外的可能や許可、認識的可能性の用法へと発展してきた。may は mæg (have power to)という動詞から派生し、現代英語では認識的可能性を表す。本来の動詞としての用法や、能力を表す用法の場合、図 33 (a)のように、トラジェクター[58]としての動作主体（小円）から事態（四角形）の発生を可能とする力（二重矢印）の存在を話し手（S: Speaker）が外から眺める構図になる。一方、図 33 (b)では、「力」は捉えられる側に存在するのではなく、話し手の事態発生に対する認識的な「性向（inclination）」(Langacker 2006: 20)として、S から事態へ向かう矢印で示されている。このように、「観られる側」にあった力動性がその客体制を失い、潜在力として「観る側」に残されるようになる変化が、法助動詞の主体化である。

法助動詞の認知プロセスが主体化すると同時に、意味の面においても、より話し手の命題に対する態度を表すようになるという主観化（Subjectification）が起きる (Traugott 1989) [59]。これはつまり、「事態指向的」な意味から「話者指向的」な意味への変化であ

[58] トラジェクター（trajector: tr）は、最も際立ちが高く注意の焦点となるもので、図と地の区別における「図」に当たる。一方ランドマーク（landmark: lm）は「地」に当たり、トラジェクターを位置づけるための基準点となる（谷口 2006: 38）。

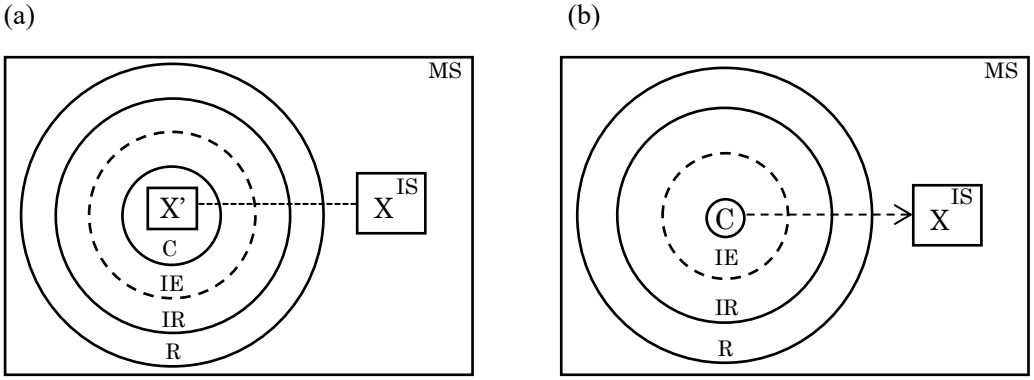
[59] Langacker の認知文法における主体化（Subjectification）は客体として把握されていたものが、徐々にその客体性を失い、もともと内在していた主体としての把握しか残らなくなるよ

る。英語の法助動詞は、観る側の認知主体（C または S）と観られる側の対峙関係が前提になっているからこそ、認知プロセスに関わる「主体化」と意味に関わる「主観化」が並行して発生する。以上のことから、(126）英語の可能表現は「事態指向性／話者指向性」というスケールを強く反映するという特徴は、D モード認知を基盤としているからこその特徴であると言える。

ただし一つ疑問が残る。can の語源は cunnan（know how to）であった。know は認識を表す動詞であるから、本来、認知の対象は認知の主体の内部（脳内）に発生するものである。ここになぜ、認知主体と認知対象の非対称性が生まれるのだろうか。

これに対する答えは、Langacker (2009) の以下の記述にあると考えられる。先述のとおり、人間は今、ここで直接経験していること以外のことを、いつでも自由に想起することができる。例えば、今ここにコップがなくても、コップを思い浮かべることができる。つまり、仮想のコップに意識を向けることができるのである。したがって、単にあることを頭の中に思い浮かべるだけでその内容が現実になるわけではなく、実際に経験されるのはその「把握（apprehension)」である（Langacker 2009: 203-204)。そのような現実の捉え方が、Langacker (2009)では図 34 (a)によって示されている。思考の対象 X は IS の中に位置し、その apprehension が X'で示され、認知主体（C）の中に位置している。例えば「新しいコップがほしいなぁ」のように、現実にはないコップを思い浮かべるとき、思い浮かべたコップは私の脳内（C）で実際に生起するが、現実世界には存在しない。現実世界に存在しないということは、X が Reality（R）の外に置かれることで示される。

うな希薄化のプロセスである。一方、Traugott の主観化（Subjectification）は「意味が命題に対する話し手の主観的信念／態度に根ざすようになるプロセスである」(Trauott1995:31, 野村 2003: 159-160)。例えば英語の can が能力の意味から認識的可能性の意味へと文法化する際には、主体化が起き、主観も起きるが、両者は同義ではない。



C: Conceptualizer　IE: Immediate Experience　IR: Immediate reality　R: Reality

図 34　認知主体と認知対象の対峙（Langacker 2009：204）

図 34(b)では、X'を設定する代わりに、C から X への矢印で C が X を捉えるプロセスが示されている。この点については、以下のように述べている。

(129) It's apprehension, X', is internal to C, an aspect of C's conscious awareness. To keep the diagrams simple, I will abbreviate this as shown in diagram (b), where X' is left implicit. Instead, a dashed arrow stands mnemonically for the process we conceptualize metaphorically as C "reaching out" and "apprehending" X.

(Langacker 2009: 204)

つまり、図 34(b)は、本来 C と切り離せない X'として捉えられる X を、便宜上 C の外にあるものとして捉えている、ということである。X'を省略し、独立した X として、C と対峙させて捉える捉え方は、インタラクションを抜きにした D モード認知に通じる。ここで注目したいのが、(130)）の記述である。特別な例として、「痛み」の経験のような場合は、X が C の中に位置し、X と X'の区別がなくなると述べている。

(130) And in the special case where X is internal to C, e.g. the experience of pain, X and X' effectively collapse – there is no essential difference between apprehending an internal experience and simply having that experience.　(Langacker2009: 204)

認知の対象が C の内部に位置し、その経験と経験の把握が一体化するという状況は、ま

さにIモード認知が表す状況である。英語はこのように本来Iモード的な概念化の場合も、あえて図 34(b)のようにXをCの外に置き、自分の痛みの経験を外から捉える。つまり、英語は認知主体Cと認知対象Xを対峙させる捉え方を選び、本来は主体内部に発生するものでも、Dモード認知として外から捉えようとする傾向にあるということである。これは、感情だけではなく、思考、感覚、知覚などの経験も同様であると考えられる。ここで思い出してほしいのが、2.1.4.3.5で述べた、動詞cunnan が助動詞canへと文法化する初期の段階において、認識に関わる動詞との共起が多かったという事実である。「cunnan＋認識動詞」は、例えば（78）の“know how to distinguish”のように、それを把握すること自体が経験となり、（130）の状況に一致する。このように、cunnanの可能の意味の獲得は、経験と把握の境界が曖昧になる事態把握において発生したということが予測できる。また、canは先に述べたように法助動詞として事態が「非現実」にあることを表すものであるが、唯一「現実」を表す「知覚の実現」の用法を持つ。これは本来、「知覚」という行為自体が、話者、認知主体、動作主体を切り離すことができない、Iモード認知を強く反映していることに由来すると考えられる。

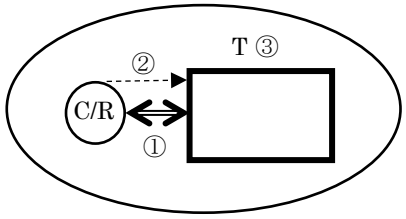
以上、英語の可能表現が「“今ここ”にない出来事の発生」としての側面を強く反映していることは、認知主体と事態が対峙する構図であるDモード認知を強く反映していると述べた。一方で、Dモード認知を強く反映した英語の法助動詞canにも、初期の用法における認識動詞との融和性や、例外的に“今ここ”を表す知覚の実現用法等、Iモード認知の反映が見られることを指摘した。つまり、「可能」の意味は本来、認識、知覚といったIモード認知に根差した認知プロセスであるが、英語というDモード認知への傾倒が強い言語においては、それらもDモード認知としてのシステムに取り込まれているのである。

4.3.2.2 日本語の可能表現とＩモード

英語の可能表現が「“今ここ”にない出来事の発生」としての側面を中心的に捉えるのに対し、日本語の可能表現は「“今ここ”の状況における知覚」という側面を中心的に捉える（126）。前節では英語の可能表現と「非現実」との関連性をDモード認知によって説明した。次に、日本語の可能表現がIモード認知を反映していると仮定して、この主張を認知モードの面から分析してみよう。

まず、日本語の可能と多義関係にある「受身」について、中村（2009）は「雨に降られた」「足を踏まれた」のような間接受身の認知構造を以下の図 35 ように示し、Iモード認知（図

32(a)）と類似の構造になると述べている。



C: Conceptualizer
R: Reference point（参照点）
T: Target

図 35 間接受身の認知構造（中村 2009：376）

中村 （2009:376）によると、図 35 では、③で示される「雨が降った」と言う事態と認知主体（C）が関連付けられて表現されていることが示されている。また、認知主体は、小円（C）であると同時に認知の場としての楕円でもあり、これによって事態が主体の外の存在なのか、内部で構築されたものなのかという曖昧さが示され、主体と対象・環境との主客未分のインタラクションであることが示されると述べている。第２章 2.1.3.4.1.1 で見たように、「られる」の受身、可能用法は自発を起源とすると考えられている。したがって、もし間接受身の認知構造が図 35 のようであるならば、同形式「られる」の起源的用法である自発や、多義関係にある可能、及び直接受身の用法にも図 35 の構図の特徴が何らかの形で反映されていると考えられる。以下では、中村（2009）の図 35 を応用し、インタラクションの在り方をより詳細に記述することで、日本語の「られる」によって表される間接受身、直接受身、自発、可能用法を包括的に説明できる認知構図を提案する。

Ｉモード認知に含まれるインタラクションは、双方向の矢印に示されるように、認知主体から環境への働きかけと、その環境からの反応である。日本語の可能表現は、「コントロール可能性」に関して敏感であることを第３章の結論で述べた。コントロール可能性とはつまり、認知主体からの働きかけによって、ある事態の発生という反応が返ってくるかどうか、と言い換えることができる。したがって、コントロール可能性はＩモード認知における認知主体と外界とのインタラクションとして考えることができる。そこで以下では、日本語の「られる」によって表される四つの用法のうち、尊敬を除く[60]可能、自発、受身のコントロール可能性を Ｉ モード認知のインタラクションとして考え、その働きかけと反応の在り方

[60] 2.1.3.2.2.3 で述べたように、尊敬構文にはヴォイスとしての特徴はなく、動作主背景化に基づく語用論的拡張として説明できる。

を検討していく。

4.3.2.2.1　自発

まず、最も起源的であるとされている自発は、本来意識的に行われる動作が、非意識的に、または意志に反して発生するものであった。したがって、認知主体からの働きかけ（＝意志）は背景化され、事態の発生自体がプロファイルされ、トラジェクターとなる。これは図 36 のように表すことができる。

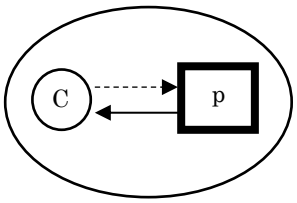


図 36　自発の認知図

ここで重要になるのは、4.3.1 で述べたように、認知主体（C）の円と認知の場としての外円は同一のものであるという点である。自発は「思う」「感じる」などの動詞に使用が限られている。これらの内的な思考・感覚を表す動詞は、4.3.2.1 の図 34 で見たように、本来認知主体の内部にある思考の対象を、外部にあるかのように表すものである。つまり、動詞そのものの意味は D モード認知を反映した動詞である。しかしながら、4.3.1 で言及したように、日本語の内的状態を表す表現は I モード認知を強く反映している（中村 2004, 2009, 今泉 2018c 等）。したがって、本来 D モード的である思考・感覚などの認識に関わる動詞に、「られる」を付与することで、あえて認知主体の働きかけを背景化し、I モード認知に引き戻していると考えることができる。

4.3.2.2.2 受身

受身用法では、認知主体からの働きかけはさらに背景化され、図 37 のように表すことができる。

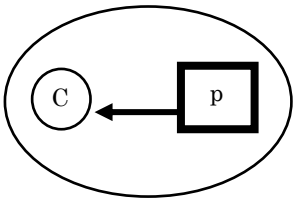


図 37 受身の認知図

認知主体から事態へ向かう矢印は消失しているが、事態から認知主体へ向かう方向の矢印は残され、プロファイルされている。ここに、日本語の受身構文における「被影響」の意味が生じると考えられる。つまり、p という事象が発生し、それによって主体が何らかの影響を受けるということが p から C に向かう矢印によって示される。「られる」による日本語の受身は、直接受身構文のように、動作の受け手として直接影響を受ける場合だけでなく、「雨に降られた」「母に日記を読まれた」のように、出来事の発生により何らかの影響を被ったことを表す間接受身が存在する。荒川・森山（2009:106）では、以下のように図示されている（一部著者による修正を加えた)。

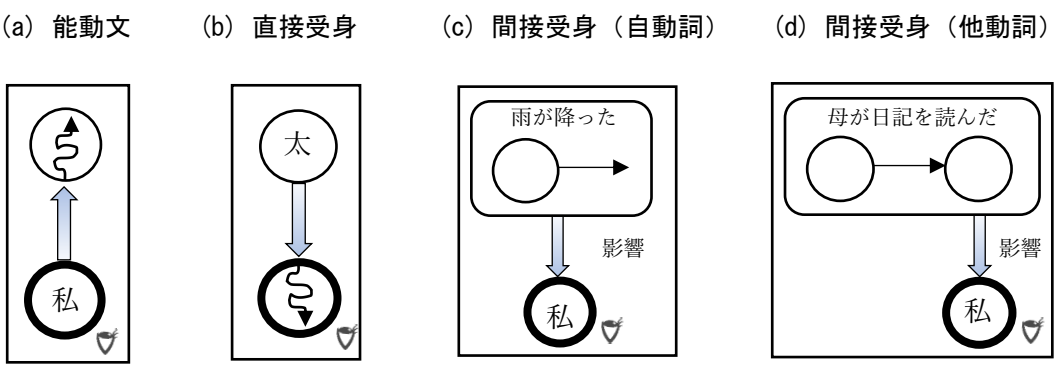


図 38 日本語の受身と被影響（荒川・森山 2009: 106 より一部修正）

図 38(b)~(d)では全てに共通して、認知主体（私）へ向かう矢印が存在している。「られる」による受身構文を図 37 のように考えることで、日本語の「られる」による直接受身、間接受身と「被影響」の意味を図 38 のように統一的に説明することができる。中村（2009）の図 35 において示されているインタラクションをより詳細に考えることで、間

接受身だけではなく、直接受身や自発及び可能とのつながりも見えてくる。

4.3.2.2.3　可能

可能は、意志動詞にしか用いることができないことから、認知主体から対象への働きかけを前提としている。したがって、図 39 のように表される。

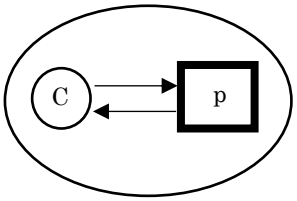


図 39 可能の認知図

ただし、プロファイルされるのは、認知主体からの働きかけではなく、事象 p の発生そのものである。これは、その起源である自発が、働きかけの背景化によって事象 p の発生に際立ちが移るという機能を受け継いだ結果であると説明できる。こう考えると、「られる」の起源は図 36 のような自発であり、図 36 →図 37 、図 36 →図 39 と発展したと考えれば、2.1.3.4.4.1.に挙げた「られる」の文法化の流れの予測（図 5）と一致する。

日本語の可能表現には、(125a) に挙げたように、動作主の力について述べるというよりも、話し手の周囲に広がる状態を描写するという特徴が強い。これは、可能用法にも、認知主体と外界とのインタラクションが埋め込まれているため、表現上は現れない認知主体が主客未分なインタラクションを通して、その状況を描写することになると考えられる。一方、英語は脱主体化した D モードで捉え、状況を客観的に描写することになる。これは、日本語の可能表現に対応する英語の形式に形容詞文や have 構文が多く出現したことを説明することができる。また、英語では事態の中の力動性[61]に注目し、その力動の源になるものが基本的には主語として選択される。したがって、日本語では状況可能として捉えられるものが、英語では使役構文や意志表現によって力動的事態として捉え直されるのである。

[61]脚注 51 を参照。

4.3.2.3 知覚とインタラクション

自発用法に用いられる思考・知覚動詞は、認知プロセスそのものである。認知主体は自己の感覚器官を通して何らかの刺激を受容し、その受容自体が認知そのものになる。つまり、感情、感覚、知覚、思考を、経験すること（experience）であると同時に捉えること（apprehension） であり、両者を分けることができない。また「(自分の）経験を（自分が）捉える」ということになり、観る側としての役割と観られる側としての役割が不可分となる。図 32 のIモード認知ではこれが巧みに表されている。認知プロセスそのものがインタラクションであり、主体と客体、さらには認知の場としての存在が一体化し、全体として非有界的に存在している。つまり、思考や知覚は認知プロセスとしてはIモード認知に根差したものである。しかしながら、思考・知覚動詞によってその行為を言語化するということは、それが自分の把握であることを客観的に捉える必要がある。言い換えると、思考・知覚の主体である観る側の自己を、観られる側として客体的に捉え直さなければならない。このプロセスを可能にするのは、Dモード認知である。つまり、思考・知覚などの認識に関わる行為は、認知プロセスとしては極めてIモード認知的であり、言語表現としては極めてDモード認知的なのである。この二面性が、日英語の可能表現の根本的な違いの源と言えるのではないだろうか。

4.4 結論

以上、Iモード認知／Dモード認知という二つの認知モードから、日英語の可能表現の捉え方の違いの説明を試みた。

言語は、本来主観的にしか捉えられない意味を、他者との共有のために客観化するためのシステムである。「～できる」という意味も、本来環境とのインタラクションを通じて知覚されるが、英語では、脱主体化したDモード認知によって捉えられ、グラウンド（話し手、聞き手、発話の場からなる）から捉えられる。したがって、可能表現が文法化される場合には、グラウンドと対峙する事態指向的な意味から、グラウンドとしての話し手指向的な意味への変化が見られる。つまり、英語の可能表現が「事態指向性／話者指向性」のスケールを重視するということは、Dモード認知が前提となる。

一方、日本語の可能表現には、本来のIモード認知のあり方が言語表現においても強く反映されている。したがって、認知主体、認知の場、客体が不可分に融合された状況で捉えられ、認知主体と外界とのインタラクションが残されている。そのインタラクションを

主体から外界への働きかけ（意志）と、事態からの反応（影響）という双方向で捉えると、日本語の自発、受身、可能の意味は「主体からの働きかけの背景化」という共通の機能によって統一的に説明できることを示した。この主体からの働きかけの背景化の度合いは、主体による事態のコントロール（不）可能性と読み替えることができる。したがって、日本語の可能表現が「コントロール可能性」のスケールを中心的に捉えるということは、I モード認知を前提としている。

また、知覚や思考など、認知プロセスそのものを表す動詞では、経験すると同時にそれを捉えること、という主客不可分な状態にある。そのような曖昧な状態を、知覚プロセス本来の I モードとして捉えるか、言語本来の D モードとして捉えるかという選択が言語によって異なり、D モード認知をより強く反映する傾向にある英語では D モード認知、I モード認知を反映する傾向にある日本語は I モード認知が選択される。第２章、第３章で見たように、日英語の可能表現は現代語の体系においては大きな違いが見られるが、その起源は両者ともに知覚・思考表現に関わるという共通点が存在する。これは、可能と言う概念が I モード認知と D モード認知の狭間にあることに由来すると考えられる。

以上の考察により、(4d)　日英語の可能の捉え方の違いは、どのような認知プロセスの違いを反映しているのかという問題に対して、(131) を解答として提示する。

(131) 日本語の可能表現は I モード認知を反映し、英語の可能表現は D モード認知を反映している。

第5章 結論

5.1 結論

本研究は、(4a~d) を明らかにすることを目的に、日英語の可能表現について考察した。

(4)（再掲）a. 日本語と英語の可能表現形式が表す意味にはどのような側面があるのか。
b. それらの側面はどのように関連して可能という概念を構成しているのか。
c. 日本語と英語は可能の意味（a）をどのように捉え、記号化しているのか
d. 日英語の可能の捉え方の違い（c）は、どのような認知プロセスの違いを反映しているのか。

第２章では、主にヴォイスとして論じられてきた日本語の可能表現と、モダリティとして論じられてきた英語の可能表現の特徴を整理した。先行研究から、それぞれの言語における可能の意味を整理し、日本語の可能表現が表す意味を（46)、英語の可能表現が表す意味を（74）のように分類した。また、特に英語のモダリティの定義にどのような概念が必要なのか、先行研究で提示されている様々なスケールを整理した。これらの作業を通して、日英語可能表現の違いを表 9 のようにまとめた。これによって、(4a) が明らかになった。

しかしながら、従来の統語理論ではそれらの違いを包括的に比較、考察できる枠組みがないため、個別言語における可能でなく、普遍的な意味での可能と言う概念の全貌が捉えきれていないことを指摘した。そして、統語的カテゴリーを出発点とする従来の研究方法ではなく、形式の観察からボトムアップ式に統語構造を明らかにしようとする RCG の考え方が本研究の目的にふさわしいことを論じた。それを受けて第３章では、RCG を反映した意味地図を用いて、可能の概念スペースの可視化を試みた結果、日英語の可能表現によって表される概念を構成する側面のうち、最も重要なものは「事態指向性／話者指向性」「コントロール可能性」という二つの軸であることが明らかになった。これによって、(4b) が明らかになった。

次に、これらの主な二軸によって構成される可能の概念スペースを捉える際に、英語は「事態指向性／話者指向性」のスケールに基づいて捉える傾向が強いのに対し、日本語は

「コントロール可能性」のスケールに基づいて捉えていることを主張した。そして、(4c)への解答として、(126)を提示した。

最後に第4章では、日英語の可能表現に反映されている認知プロセスを「Iモード認知／Dモード認知」を用いて説明した。そして、「事態指向性／話者指向性」のスケールを重視する英語の可能表現には、認知主体と事態とを対峙させるDモード認知が反映されており、「コントロール可能性」のスケールにもとづく日本語の可能表現には、外界とのインタラクションを残した主客未分な認知であるIモード認知が反映されていると結論づけた。また、日本語「られる」の可能・自発・受身の連続性は「主体による働きかけの背景化」によるコントロール（不）可能性に関して連続体をなすことを示した。また、両言語の可能表現はその起源に、経験とその把握が融合する思考・知覚表現との関わりを持つが、そのようなプロセスの概念化は、認知プロセスとしてのIモード認知と、言語機能としてのDモード認知という二面性を持つことを指摘した。以上の考察から、(4d)への解答として（131）を提示した。

以上で本研究の問いである（4a~d）が明らかになったが、これらの考察を踏まえ、本研究の最終的な結論として、「可能とは何か」という問いに対し、(132)の定義を提案する。

(132)「今ここ」にない出来事の発生を、認知主体が「今ここ」において知覚すること。

つまり、可能と言う概念は「今ここ」性に関して、相反する二つの側面を含むのである。このような二面性を持つ概念であるからこそ、日本語と英語において、認知プロセスとしてIモード認知と、言語機能としてのDモード認知という異なる認知モードを反映し、統語的特徴としてヴォイスとモダリティという全く異なるカテゴリーとして体現するのである。ヴォイスとモダリティ、IモードとDモードが交差する「可能」という概念には、主観的な経験を客観的に捉えて伝えるという、言語の本質としての主観性と客観性が同時に、相補的に、反映されていると言える。

5.2 反省と今後の課題

まず、本研究はヴォイスとモダリティという言語学における大きなトピックを扱ったため、それぞれの分野における研究のレビューが概観的なものになり、各分野において深い

議論ができなかった。

二つ目に、今回は可能表現として統語的機能を担うものを中心に取り上げ、be able to, possible など、語彙的な可能表現については考察できなかった。また、英語にもヴォイスに関わる構文によって可能を表す中間構文が存在するが、これらの構文が可能の概念スペースの中でどのように位置づけられるのかを明らかにする必要がある。

三つ目に、今回は時制や肯否による差を考慮しなかったが、これらの概念も可能表現の意味には大きな関りがある。can と could、may と might の区別も本稿では詳しく取り扱わなかった。調査１，２の結果として三つ目の軸「即時性」の存在について明確に結論付けることができなかったことも、この不足点によるものである。

四つ目に、調査方法についても残された課題が多い。特に量的調査で行った統計的意味地図の手法は、言語によって表される複雑な概念を本当に体現できるものなのかという点に疑問が残る。本来より多くの側面が絡み合う複雑な可能の「意味」を可視化という目的のために三次元に縮約したが、見えるようになったものがあると同時に、捨象された側面があることを忘れてはならない。また、技術にも問題が多い。文脈同士の距離を算出する際、形式の一致の認定は研究者の判断に委ねられているため完全に客観的であるとは言えない。分布の観察についても全ての用例が本稿の軸の解釈と一致するわけではなく、あくまで傾向として読み取れたものである。さらに、データの量と質の問題がある。今回扱ったデータは非常に限られたものであり、小説という特定のスタイルによる影響も考えられる。話し言葉等、異なるスタイルのデータを取り入れる必要がある。また、今回は日本語、英語、中国語を対象としたが、対象とする言語を変えれば異なる結果が得られる可能性も大きい。この手法の信頼性を高めるには、異なる言語やスタイルのデータを集め、同様の軸の解釈ができるかを確かめる必要がある

今後の課題として、語彙的な形式や時制、否定なども考慮してより深く可能の意味の分析を行うこと、また、日英語だけでなくより多くの言語における可能表現についての考察を行い、可能表現の類型論的研究を進めていきたい。

謝辞

本論文を完成させることができたのは、多くの方々のご指導、ご支援のおかげです。

まず、主査をお引き受けくださった平田未季准教授に心より感謝申し上げます。突然のお願い、そしていつも締め切り間際の提出で、ご負担をたくさんおかけしてしまいましたが、先生のご厚意とご指導のおかげで、博士論文を完成させることができました。

副査をご担当くださった佐藤俊一名誉教授には、修士１年から退官後も、長い間お世話になりました。ご相談に伺うのも、原稿を出すのもいつもギリギリの私を、最後まで見捨てずに指導してくださいました。また、弱気になるタイミングでいつもさりげなくフォローしてくださいました。ここまで来ることができたのは何を置いても佐藤先生のおかげです。

同じく副査をご担当くださった大野公裕教授にも、修士課程からお世話になりました。突然のお願いにも関わらず副査をお引き受けくださり、有益なコメントをいただきました。心より感謝申し上げます。

同じく副査をご担当くださった山田智久准教授には、副査としてだけではなく、大学院の先輩としても、折に触れて励ましの言葉をかけていただきました。心より、感謝申し上げます。

博士課程の指導教官をお引き受けくださった首都大学東京飯田真紀准教授にも深く感謝しております。いつも締め切り間際にしか現れず、ご迷惑、ご負担をおかけしてしまいましたが、先生のご指導のおかげで、博士課程での研究を続けることができました。

Imaizumi (2019)執筆にあたっては、国立台湾大学の馮怡蓁副教授に大変お世話になりました。また、河合靖教授にはJSPS科研費 JP15H03221の共同研究者として参加させていただき、様々な機会とご支援をいただきました。

大阪学院大学中村芳久教授には、金沢大学在学時代、本稿にとって重要な理論であるIモード認知／D モード認知についてご教授を賜り、認知言語学に興味をもつきっかけとなりました。また、認知言語学会においても温かいコメントをいただきました。

最後に、学会や研究会で質問やコメントをくださった方々、投稿ジャーナルの匿名の査読者の方々、長い学生時代を支えてくれた家族、同僚、友人に感謝申し上げます。

皆様、本当にありがとうございました。

2020年1月　今泉智子

参考文献

青木ひろみ（1997）「自動詞における《可能》の表現形式と意味―コントロールの概念と主体の意志性」『日本語教育』93. 97-107.

青木伶子（1980）「可能表現」『国語学大辞典』東京堂出版. 169-171.

足立浩平（2006）「14 多次元尺度構成法」『多変量データ解析―心理・教育・社会系のための入門』ナカニシヤ出版. 135-143

荒川洋平, 森山新（2009）『わかる！！日本語教師のための応用認知言語学』凡人社

安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』開拓社

庵功雄（2012）『新しい日本語学入門 ： ことばのしくみを考える 第 2 版』スリーエーネットワーク

池上嘉彦（2003）「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(1)」『認知言語学論考』3. 1-49.

池上嘉彦（2004）「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(2)」『認知言語学論考』4. 1-60.

今泉智子（2016）「脱主体化プロセスとしての日本語モダリティ再考」『日本認知言語学会論文集』16. 79-91.

今泉智子（2018a）「可能表現にみるモダリティとヴォイスの相互関係 ： 対訳データに基づく意味地図の可能性」『日本認知言語学会論文集』18. 345-356.

今泉智子（2018b）「小説の対訳データから見る日英語可能表現の比較」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』27. 33-51.

今泉智子（2018c）「日本語の内的状態述語の考察－ Ⅰ モード認知と主客の相補性－」中村芳久教授退職記念論文集刊行会 （編）『ことばのパースペクティヴ』開拓社. 406-416.

大上正直（2004）「タガログ語の可能表現: 意味論的・語用論的視点からの形式・意味・用法の分析」『大阪外国語大学論集』30. 51-71.

大槻文彦（1897）『廣日本文典別記』大槻文彦

尾上圭介（1998a）「文法を考える-5-出来文(1)」『日本語学』17(7). 明治書院. 76-83.

尾上圭介（1998b）「文法を考える-6-出来文(2)」『日本語学』17(10). 明治書院. 90-97.

尾上圭介（1999）「文法を考える-7-出来文(3)」『日本語学』18(1). 明治書院. 86-93.

尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語（特集 ヴォイスを捉える視点--照らし合う意味と統語)」『言語』32(4). 34-41.

小野茂俊夫，中尾一雄，荒木正朋，宇賀治博哉，若田部（1972)『英語史』大修館書店

加藤重広（2006)『日本語文法入門ハンドブック』 研究社

金子尚一（1986)「日本語の可能表現＜現代語＞標準語のばあい」『国文学解釈と鑑賞』51(1). 74-90.

亀井孝，河野六郎，千野栄一，西田龍雄（1988)『言語学大辞典術語編』三省堂

川村大（1993)「ラル形式の機能と用法」松村明先生喜寿記念会（編） 『国語研究』 明治書院. 714-730

川村大（2004)「受身・自発・可能・尊敬—動詞ラレル形の世界— 」尾上圭介(編)『朝倉日本語講座６ 文法Ⅱ』朝倉書店. 105-127.

川村大（2012)『ラル形述語文の研究』くろしお出版

楠本徹也（2009)「無標可能表現に関する一考察」『東京外国語大学論集』79. 65-85.

黒滝真理子（2013)「日英語の事態把握と間主観的モダリティ：Potentiality 状況可能と Evidential Modality の観点から」『認知言語学論考』11 . 313-345.

國分功一郎（2017）『中動態の世界：意志と責任の考古学』医学書院

斉木美知世，鷲尾龍一(2012)『日本文法の系譜学：国語学史と言語学史の接点』開拓社

坂梨隆三（1969)「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』46(11). 34-46.

澤田治美（2006)『モダリティ』開拓社

柴谷方良（1997）「言語の機能と構造と類型」『言語研究』112. 1-31.

渋谷勝己（1993a）意味の縮小と文体差－可能の補助動詞エルをめぐってー」近代語学会（編）『近代語研究』9. 武蔵野書院. 409-431.

渋谷勝己（1993b)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1). 1-262.

渋谷勝己（2005)「日本語可能形式にみる文法化の諸相(<特集>日本語における文法化・機能語化）」『日本語の研究』1(3). 32-46.

渋谷勝己（2006)「自発・可能」小林隆（編)『シリーズ方言学２方言の文法』岩波書店. 47-92.

高橋正（2011）「モダリティ表現の日英語対照研究(3)日本語の能力・可能表現と CAN/COULD の対応」『英語英文学研究』36(1). 1-30.

高橋正（2012a）「モダリティ表現の日英語対照研究(4)知覚動詞と CAN/COULD」『英語英

文学研究』36(2). 1-32.
高橋正（2012b）「モダリティ表現の日英語対照研究(5)日本語で能力・可能表現のない場合の CAN/COULD の出現とその分析」『英語英文学研究』37(1). 17-40.
高橋正（2013）「モダリティ表現の日英語対照研究(6)可能性を表す can/could はどのような日本語表現と対応しているか?」『英語英文学研究』37(2). 19-42.
田中春美（1988）『現代言語学辞典』成美堂
谷口一美（2006）『認知言語学』ひつじ書房
張威（1998）『結果可能表現の研究 ： 日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 第 1 巻』くろしお出版
中井悟，上田雅信，奥聡，高尾典史，松岡和美，Hirose Yuki（2004）『生成文法を学ぶ人のために』世界思想社
中井政喜，呂雷寧(2014)「日本語における可能の意味について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』47. 1-12.
中野研一郎（2017）『認知言語類型論原理 ： 「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』京都大学学術出版会
中村芳久（2001）「言語相対論から認知相対論へ」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』21. 1-23.
中村芳久（2004）「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」中村芳久（編）（2004）『シリーズ認知言語学入門 5　認知文法論Ⅱ』大修館書店. 3-51.
中村芳久（2009）「認知モードの射程」坪本篤朗，早瀬尚子，和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』開拓社
中村芳久（2016）「Langacker の視点構図と（間）主観性―認知文法の記述力とその拡張―」中村芳久・上原聡（編）『ラネカーの（間）主観性とその展開』開拓社. 1-51
ナロック・ハイコ（2014）「モダリティの定義をめぐって」 澤田治美（編）『ひつじ意味論講座 モダリティ Ⅰ：理論と方法』ひつじ書房. 1-23.
日本語記述文法研究会（2003）『モダリティ』くろしお出版
日本語記述文法研究会（2009）『格と構文：ヴォイス』くろしお出版
野村益寛（2013）「主体化／主観化（subjectification）」辻幸夫（編）『新編認知言語学キーワード事典』研究社. 159-160
畠山雄二（編）平田一郎，寺田寛，岸本秀樹，本田謙介，田中江扶，今仁生美（著）(2016)『徹

底比較日本語文法と英文法』くろしお出版
早瀬尚子, 堀田優子 (2005)『英語学モノグラフシリーズ 19　認知文法の新展開 カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社
早津恵美子 (1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語研究』 6. 79-109.
文化庁 (2015)『平成 27 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』
益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
益岡隆志 (2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
円山拓子 (2007) 「自発と可能の対照研究--日本語ラレル北海道方言ラサル韓国語 cita」『日本語文法』7(1). 52-68
三矢重松 (1908)『高等日本文法』明治書院
茂木健一郎 (2004)『脳と仮想』新潮社
森山卓郎, 渋谷勝己 (1988) 「いわゆる自発について－山形市方言を中心に」『国語学』 152. 92-80.
森川結花 (1999)「可能形動詞に見られる"日本語らしさ”：その発想を日本語教育の中でどう教えるか」『言語と文化』3. 148-159.
山岡洋 (2014)『新英文法概説』開拓社
鷲尾龍一 (2010)「ヴォイスの意味」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座 語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房. 113-131

Benveniste, Émile. (1966) *Problèmes de Linguistique Générale*. Paris: Gallimard. （エミール・バンヴェニスト（著）, 岸本通夫（監訳）(1983)「12. 動詞の能動態と中動態」『一般言語学の諸問題』みすず書房. 165-173.）
Bolinger, Dwight. (1989) “Extrinsic Possibility and Intrinsic Potentiality: 7 on May and Can+ 1.” *Journal of Pragmatics,* 13(1). 1-23.
Borg, Ingwer and Patrick J. F. Groenen. (1997) *Modern Multidimensional Scaling : Theory and Applications*. Springer.
Bybee, Joan L. (1988) “Semantic Substance vs. Contrast in the Development of Grammatical Meaning.” *BLS,*14. 247-264.
Bybee, Joan L. (2010) *Language, Usage and Cognition*. Cambridge University Press.

Bybee, Joan L., Revere D. Perkins and William Pagliuca. (1994). *The Evolution of Grammar : Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World.* University of Chicago Press.

Coates, Jennifer. (1983) *The Semantics of Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm. （ジェニファー・コーツ（著）, 澤田治美（訳）(1992)『英語法助動詞の意味論』研究社）

Croft,William. (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press. （ウィリアム・クロフト（著）, 山梨正明（監訳）, 渋谷良方（訳）(2018)『ラディカル構文文法—類型論的視点から見た統語理論—』研究社）

Croft, William. (2012) *Verbs : Aspect and Causal Structure*. Oxford University Press.

Croft, William. and D. A. Cruse. (2004) *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.

Croft, William. and Keith T. Poole. (2008) "Inferring Universals from Grammatical Variation: Multidimensional Scaling for Typological Analysis." *Theoretical linguistics,* 34(1). 1-37.

Cysouw, Michael. (2007) "Building Semantic Maps: The Case of Person Marking." in Matti Miestamo and Bernhard Wälchli. (eds.), *Trends in Linguistics, Studies and Monographs: 189, New Challenges in Typology: Broadening the Horizons and Redefining the Foundations*. Mouton de Gruyter. 225-247.

Dixon, Robert M. W. (1991). *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles.* Clarendon Press

Goossens, Louise. (1992) "CUNNAN, CONNE(N), CAN: The Development of a Radial Category." in Kellermann, Günter and Michael, D. Morrissey. (eds.), *Diachrony within Synchrony-Language History and Cognition: Papers from the International Symposium at the University of Duisburg*. Peter Lang Pub Inc. 377-394.

Greenbaum, Sidney and Randolph Quirk. (1990) *A Student's Grammar of the English Language.* Harlow: Longman. （グリーンバウム・シドニー, クワーク・ランドルフ（著）, 池上嘉彦, 米山三明, 西村義樹, 松本曜, 友沢宏隆（訳）(1995)『現代英

語文法—大学編』紀伊國屋書店）

Haspelmath, Martin. (1997). *Indefinite Pronouns*. Oxford University Press.

Haspelmath, Martin. (1999). "External Possession in a European Areal Perspective." *Typological Studies in Language,* 39. 109-136.

Haspelmath, Martin. (2003) "The Geometry of Grammatical Meaning: Semantic Maps and Cross-Linguistic Comparison." *The New Psychology of Language.* Psychology Press. 217-248.

Heine, Bernd and Tania, Kuteva. (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge University Press.

Hinds, John V. (1988) *Japanese*. Routledge.

Imaizumi, Satoko. (2019) "Typological Study on Expressions of Possibility and Their Related Meanings in English, Chinese and Japanese–How Modality and Voice Intersect." In Fon, Janice (ed.), *Dimensions of Diffusion and Diversity (Cognitive Linguistics Research: 63).* Berlin, Boston: Walter de Gruyter. 56-82.

Langacker, Ronald W. (2006) "Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes." In Athanasiadou, Angeliki, Costas, Canakis, and Bert Cornillie (eds.), *Subjectification: Various Paths to Subjectivity (Cognitive Linguistics Research: 31)*. Walter de Gruyter. 17-40.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* Oxford: Oxford University Press. （ロナルド・W・ラネカー（著），山梨正明（監訳），碓井智子，大谷直輝，木原恵美子，児玉一宏，中野研一郎，深田智，安原和也（訳）（2011）『認知文法論序説』研究社）

Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar.* Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (2012) "Remarks on the English Grounding Systems." In Brisard, Frank (ed.), *Grounding: The Epistemic Footing of Deixis and Reference.* Walter de Gruyter. 29-38.

Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*. Longman.

Narrog, Heiko. (2005a) "On Defining Modality Again." *Language Sciences,* 27(2). 165-192.

Narrog Heiko. (2005b) "Modality, Mood, and Change of Modal Meanings: A New Perspective." *Cognitive Linguistics,* 16(4). 677-731.

Narrog, Heiko. (2010) Voice and Non-Canonical Case Marking in the Expression of Event-oriented Modality. *Linguistic Typology,* 14(1). 71-126.

Narrog, Heiko and Johan, van der Auwera. (2011) "Grammaticalization and Semantic Maps." *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford University Press. 318-327.

Palmer, F. R. (1979) *Modality and the English Modals.* Longman.

Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality* (2nd edn.). Cambridge University Press.

Radden, Günter and René Dirven. (2007) *Cognitive English Grammar*. John Benjamins.

Shibatani, Masayoshi. (1985) "Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis." *Language,* 61(4). 821-848.

Sweet, Henry. (1891) *A New English Grammar：Logical and Historical*. Clarendon Press.

Talmy, Leonard. (1988) "Force Dynamics in Language and Cognition." *Cognitive Science,* 12(1). 49-100.

Tomasello, Michael. (2003) *Constructing a Language: A Usage-based Theory of Language Acquisition.* Cambridge, Massachusetts, London: Harvard University Press.（辻幸夫，野村益寛，出原健一，菅井三実，鍋島弘治朗，森吉直子（訳）（2008）『ことばをつくる—言語習得の認知言語学的アプローチ』 慶應義塾大学出版会）

Traugott, Elizabeth Closs. (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language*, 65(1). 31-55

Traugott, Elizabeth Closs. (1995) "Subjectification in Grammaticalization." In Stein, Dieter and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives.* Cambridge University Press. 31-54.

van der Auwera, Johan and Vladimir A. Plungian. (1998) "Modality's Semantic Map." *Linguistic Typology*, 2. 79-124.

van der Auwera, Johan and Amman, Andreas. (2013) "Situational Possibility." in Dryer, Matthew S. and Martin Haspelmath (eds.). *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. [http://wals.info/chapter/74] (accessed 2019.10.5).

von Wright, G. H. (1951) *An Essay in Modal Logic*. North-Holland Publishing Co.

Whorf, B. L. (1956). *Language, Thought, and Reality: Selected writings of Benjamin Lee*

Whorf. MIT. Press.（B. L. ウォーフ（著），池上嘉彦（訳）(1993)『言語・思考・現実』講談社）

Wierzbicka, Anna. (1996) *Semantics：Primes and Universals.* Oxford University Press.

Wälchli, Bernhard. (2010) "Similarity Semantics and Building Probabilistic Semantic Maps from Parallel Texts." *Linguistic Discovery,* 8(1). 331-371.

【辞書】

『日本国語大辞典第二版』小学館

『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館

Oxford English Dictionary Online, Oxford University Press［ https://www.oed.com/ ］(accessed 2019.10.25)

【コーパス】

日本語学習者作文コーパス「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」科研グループ［ http://sakubun.jpn.org/ ］（参照 2019.10.5）

【データ】

吉本ばなな（1988)『キッチン』角川文庫

英語翻訳版：Megan Backus（訳）（1993）*KITCHEN*. faber and faber

中国語翻訳版：李萍（訳）(2009)『厨房』上海译文出版社

J.K.Rowling (1997) *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. Bloomsbury

日本語翻訳版：松岡佑子（訳）(1999)『ハリーポッターと賢者の石』静山社

中国語翻訳版：苏农（訳）『哈利波特与魔法石』人民文学出版社